
IS語

謎人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS語

【Nコード】

N2123V

【作者名】

謎人

【あらすじ】

尾張時代の半ば——一つの物語が終わったが、歴史の遺産はまだ残っていた。時は現代、ISが進出した時代に再び異質な刀が現れた。そして歴史の亡霊達も動き出す。刀をめぐる争いが再び始まり、始まり。

設定（前書き）

よろしくお願いします。

設定

設定

主人公
まにわほむら
真庭焰

所有刀 絶刀 鉋

プロフィール

突っ込みのポジションかつボケ。人柄は穏やか。体格は小柄。鈴より少し高め。やや女顔。髪は長髪。趣味 甘味巡り 気苦労 信条 終始一貫

使用忍法

演武 他者の忍法の使用法を見たり聞いたりすれば、まねることができる。ただ自身が一度でも無理だと感じると使用することができない。また完璧にその忍法を使用することができず制限がある。(使用できる忍法 足軽 巻き菱指弾 爪合わせ 永劫鞭 記録辿り 渦刀・鎖式 柔球術 音飛ばし 断罪円 大嵐木枯し)

鬼火 火を自在に扱う。

真庭拳法 段位持ちの実力

??? かつて真庭毒鶴が使っていた忍法

鑢
刻葉こくよう

流派　？刀流

プロフィール

七花に似て長身。七花とは違い趣味は無趣味ではない（散歩と修行）。顔は七花似。髪は黒金（日にかざすと金色）肩まで伸ばしている。掛け声は、チエリオ。

両親は、幼少時に他界。？刀流継承者である祖母に引き取られたが、中学二年次に他界。いろいろつてを頼りに、中学三年時に焰たちに出会う。

織斑　一夏

所有刀　薄刀　針

プロフィール

原作通りだが、針を手に入れてからは剣道に励むようになってい

る。

技
薄刀開眼　型月の直死の魔眼の扱いで。万物の死を見、針で線を斬ることができるが、脳に負担をかけるので使えて最大5分。剣舞にすることができれが上昇する。なお舞った時にときめく人数は数知れず。

白刀開眼　薄刀開眼とは似て異なる技。

剣舞 零の舞 雪月花 3体攻撃
一の舞 月下氷刃 広域攻撃

真庭家

真庭 白夜

使用忍法 逆鱗探し

焰の兄。24歳。初代真庭白鷺の再来と言われているほど、実力は高い。

真庭 真希

使用忍法 永劫鞭

焰と白夜の姉。白夜とは双子。ほぼ真庭鴛鴦さん。外観も。職業はアパレル関係。恋人は遠い親戚でもある真庭 蝶次郎。

真庭 螳太郎

蝶次郎

密三郎

焰とは遠い親戚。この作品における虫組。鎌太郎さんは弁護士。朝次郎さんはバイク便兼真庭道場師範。密三郎さんは大学生。

真庭 亀有

焰の叔父。保護者。商店街の会長をしている。

真庭 海

使用忍法

渦刀 チェンソーを操る。

渦刀・鎖式 末代真庭喰鯨の忍法。

真・渦刀 雨の日限定で使える。初代真庭喰鯨の忍法。

亀有の長男。焰と同じ年。弾と同じ高校。部活は水泳部。可愛い物好き。

真庭 涼

使用忍法

運命崩し 柔球術 結界術

亀有の二男。小学生。ペンギングッツが好き。

この小説では、十二頭領の一人、真庭人鳥まにわぺんぎんの生存が前提です。左右田から逃れており、情報力を駆使して財をなし、無事天寿を全うしたという形でいきます。

といった形で時代は巡って現代へ。ISが進出したこの時代に再び刀をめぐる物語の始まりはじまり

プロローグ

それは、中学最後の夏の日のお盆の時だった。その日俺は、親友の織斑一夏と鏝刻？と一緒に蔵の掃除にかかっていた。

「すまんな一夏、刻？。人の家の大掃除に駆り出してちまって」

「いいさ。いろいろ世話になってるし。飯もありつけるしな」

「同じくだ」

「まあな。真希姉と静香おばさんの飯はうまいしな」

「しかしでかい蔵だな。何お宝でも埋まってんじゃないのか？」

「それを知るためのお掃除だ。といってもほとんどは二束三文のがらくたや急場しのぎにしまいこんだ資源ごみが大半だ」

と言って俺たちは掃除に取り掛かった。俺の家こと真庭家は忍者の末裔だったりする。実際に忍法も使えるし、ご先祖様も「真庭語」という真庭忍軍の歴史書も書きつづっている。実際に読んでみたが（訳は密兄さんにしてもらった）事実小説より奇だ。という感想だ。

真庭忍軍 暗殺を生業とした忍びの一族。十二人の頭領を中心とし、鳥、獣、魚、虫組に分かれ奇怪な忍法を駆使し生きてきた一族であったが、天下泰平の折に起こった大乱で力を落とし挽回しようと幕府を裏切り変体刀をめぐる争いで一族は滅んでしまったと表の歴史は語るが、実際には末代魚組十二頭領が一人、真庭人鳥まにわべんぎんが生き残っ

まにわへんぎん
ていた。真庭人鳥 童でありながら十二頭領になれたのは情報収集が優れていたのと使う忍法が優れていたからだ。刀集めの際に途中で離脱し、追手に追われたが逃げきったものの故郷に帰ると灰燼になつていた。彼は絶望しかけたが、生きるという目標のもとその情報力で商人となり財をなしたと真庭語は語る。

もう一つ語るとするとここら一帯は一級災害指定地不要湖であつたが一部開拓したのもうちのご先祖だったりする。そうこう掃除をしているうちにガタンと音がした。あれは

「一夏大丈夫か？」

「ああ、悪い。焰、階段の裏側壊しちゃった」

「なに！ちよつと見せろ」

「待て」

「なんだよ、刻？」

「これ隠し戸じゃないか？」

「まじでか」

言われてみれば隠し戸だ。中になんか入っているのか？調べてみると

「おお、なんか箱が三つ出てきた」

「まさかのお宝？」

「とりあえず、三つあるから三人で開けようぜ」

「いいのか？」

「いいんだよ。こういうのってなんか楽しくないか？」

「わくわくはするよな」

「じゃいくぞ」

三人同時に箱を開いた。そこには、

「真庭語（裏）？」

「なんだこれ？珠が12個ある？」

「こっちは1つだ…これISのコアじゃないか」

「何！本当か。一夏」

インフィニット・ストラトス

ISもともと宇宙空間で活動を想定してつくられたマルチフォームスーツ。製作者の意図とは別に兵器に転じてスポーツに落ち着いた機械であるが、女性にしか使えない機械でもある。この機械の進出で各国の防衛の改革及び女性の地位の上昇は記憶に新しい。てことだが

「たぶんそうだと思う。この間、特集で見た」

「だとしてもだ。俺達が触れたところで反応しないんじゃないか」

そう突っ込む刻？

「そっちは何が入っていたんだ？」

「ああ、真庭語（裏）だ。裏って書いてあるから表じゃかけない暴露本かなんかだろうがね」

そう言うって適当にめくったが、いかせん古い字体なのでほとんど読めない。あれ、と一夏が呟いた。

「どうした？」

「なあ、これ光ってないか」

なに、と俺と刻？が言つて球を見直すと三つ光つていた。よく見ると

「鉋、針、鑢？」

「物は試した。一夏おまえは針。刻？は鑢だ。俺が鉋に触れてみる」

「いいの？」

「触れる分はタダだ。死には・・・・・
・・・・・
しないと思う」「

「まてまてまて、言い淀んでるぞ。思いつきり」

「とりあえず触れるぞ」

「まあ、いいか」

そうして俺たちは触れてみた。すると

「主、認証しました」

という声が聞こえた。瞬時に光を放った。頭の中で鉋の使い方等などの情報が流れ込み目を開けると、まっすぐな刃に鏝なし鞘なしの綾杉肌に二筋桶が彫られてある。

「絶刀・鉋」

俺はそうつぶき、二人を見ると一夏は白い柄の刀を、刻？は手甲と足甲が装備されていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・これIS?」

「ごめん、自信ない」

「とりあえず掃除終わったら、おじさんに報告だな」

「そうだって、これしまえんのか?」

「しまえるんじゃないか?よつと」

俺はしまうイメージをしたところ右中指に二筋桶をあしらった指輪がはめられていた。

「どうやったんだ?」

「頭に浮かばなかったか?こう、しまう感じで?」

そう言われて二人は、念じてみると、一夏の右中指には、水晶みたいな美しい指輪が。刻？には、左手の中指に紅葉色の指輪が装着されていた。

「とにかく急ごうぜ」

「だな」

一旦お宝をかたづけ、掃除に取り掛かった。

「なんとまあ」

掃除が終わり俺たちは真庭家家長である亀有おじさんに事の報告をした。

「ふむ。真庭語（裏）の管理と訳は密に任せようかの。しかし、I Sのコアか？こいつは難儀だね〜」

ふむと頷くおじさん

「ま、しばらくは様子見じゃ。焰、白夜に連絡はつかんか？」

「白兄か？ちよつと時間かかるけど大丈夫だと思う。やっぱ、白兄経由で束さんに頼むしかないよな」

「なあ、束さんって誰なんだ？」

「刻？、篠ノ之 束さんってのはISの発明者なんだよ。現在どこにいるかも不明な研究者なんだよ」

「へえ〜。その凄い研究者とよく知り合いだな焰の兄さん」

「白兄と真希姉のクラスメートなんだよ。ついでに言うと一夏の姉さんも」

「まあな、俺も千冬姉に相談してみます」

「ま、それが妥当かな。しかし、鉋、針、鑢ねえ。四季崎記紀の完成形変体刀もたしかそんな刀の銘じゃなかつたかな？」

！！！！

その言葉に俺と刻？は反応した。逆に一夏はキョトンとしている。

「なあ、四季崎記紀って誰？」

「まあ、マイナーな人物だよな。歴史上では。ま、説明してやる。

「一夏、旧將軍は知ってるよな」

「まあな、受験生だし。確か、天下を統一した後、刀狩令を出して、清涼院護剣寺だったか。刀を溶かして大仏作ったんだよな」

「おおむねそうだ。その旧將軍の天下統一に四季崎記紀の変体刀が絡んでいるんだ」

「どうしてだ？」

「四季崎記紀の刀を手に入れば天下を得るって信じられていたんだよ。その数、合計千本。旧將軍は四季崎の刀を集めて天下を統一したんだよ。この時点で5／6割だったかな？その集大成で

「刀狩ってわけか」

「正解。最終的に988本集まったんだが残りの12本の収集にこごとく失敗した」

「それらが完成形変体刀ってわけか？」

「そういうこと」

にしても頭の回転速いな一夏。恋愛感情には鈍感な奴だが

「12本だよな。珠は13個あったぞ？」

「そいつは刻？。説明できるか？」

「ああ。一夏俺が使ってる流派知ってるよな？」

「ああ、？刀流だったか。己を一本の刀に見立てる無刀の剣法だよな」

「そうだ。俺のご先祖様鑢一根が開いた剣法だ。どうもご先祖様は四季崎と面識があったらしい。どういう関係かわからないがな。どうも、四季崎記紀は完成形変体刀を踏み台にして完了形変体刀、つまり意思を持った刀（？刀 鑢）を作りたかったらしい。何のためかは、俺にもわからん」

「へえ〜」

「兎にも角にも、待つしかないか」

そう言つて、俺達は昼飯を食べに居間にいった。

数カ月後

夏休みが終わった。が肝心の兄貴からは音沙汰がない。連絡を入れたところ、すぐに返事は返ってきたが内容が

「しばらく替れない。束も勿しいので他聞雷燃の波留にならないと替れない」

訳 しばらく帰れない。束も忙しいので多分来年の春にならないと帰れない

ということだった。一夏も千冬さんに連絡はしたがしばらくは織斑家には帰れないということだ。

日々は無情に過ぎていき、二月の受験。俺達は私立藍越学園を受けるため受験会場に来たのはいいが、刻？と一夏が道に迷ってしまっ

た。

「何をしてるおまえら！」

「知るか！なんだよ、ここトイレ行っただけで迷うなんて」

「つべこべ言うな。とりあえず、ここは次見つけたドアに入っちゃえば問題ない」

「だな」

頷いて、さっそくドアを見つけ入室した。

「すいませーん」

「ああ、君たち受験生だよな。向こうで着替えて。時間おしてるから急いでね。ここ4時までしか借りられないから」

試験官らしき人が見向きもせずに行った。役所仕事？か、思い言われるがまま部屋に入ると、

「IS？」

そう、ISだ。ちょうどいい具合に3体ある。ここまで来るとさすがにおかしいなと思うのだが、一夏は何を思ったのか、それに触れてしまった。次の瞬間、ピッカと光ったと思ったら、そこにはISを装着した一夏がいた。

「「まじでか！！」」

「と、とりあえず、お前らも触れてみるよ?」

明らかに混乱しているが、つられるがまま、俺達も触れてみた。すると、

膨大な量の情報が頭を駆け巡り、最後に頭に浮かんだのは、

鉋

目を開けると、ISを装着していた。隣を見ると刻?も装着していた。

俺達3人は同時に

「「「まじでか!!!」」」

と叫んでしまった。なにしろ命じ通りに動く。女性にしか反応しないんじゃないのこれ?

と混乱していると、

「準備はできた?はいじゃ、適性検査にいつてね」

と、さっきの試験官がさっさと俺達に紙を渡していった。

「どうする?」

「いけるとこまで行っちゃいますか」

ま、こんな経験滅多にないだろうしな。俺たちは向かった。

どうやら、模擬戦のようだが忍法を使うまでもない。俺は鉋を、—

夏は針を、刻？は無刀で、

「報復絶刀！！」

「薄刀開眼・零の舞・雪月花！！」

「？刀流・蒲公英！！」

瞬殺で決まった。すると、ピピピ

『試験官機撃墜。お疲れさまでした』

と表示された。

その後が大変だった。やっと男だつてということが分かり、悪ノリで受験しましたって白状したところで、見たこともない装備を使用していることでさあ、大変。結局その日は、家に帰れず、翌日、亀有おじさんと静香おばさんが迎えに来てくれた。俺達はそのまま、真庭家へ。一休みの後、さつそく家族会議が開かれた。内容はもちろん今後の方針である。事前に連絡が着ていたのか、俺達はIS学園に入校ができると、通達がきたそうだった。

おじさんいわく、この申し出は受けた方がいいそうだった。曰く、IS学園はどこの国の影響力も及ばない学園だそうだった。少なくとも3年は大丈夫ということである。実験動物扱いはごめんなので、俺達は入学することに決めたが、この三年間は相当苦勞する羽目になることはこの時考えてもみなかった。

第一話 入学（前書き）

少々忍法の設定をいじっています。

第一話 入学

side 一夏

今日は高校の入学式。新しい世界の幕開け、その初日。それ自体はいい。むしろ喜ぶべきところだ。だがしかし、問題はとにかくクラスに男が俺を含め3人という点だ。自意識過剰ではなく、本当にクラスメートほぼ全員からの視線を感じる。だいたい、席も悪いなんぞで俺らが真ん中&最前列なんだ。刻？に行っては長身だぞ。目立つことこの上ない。

「どうした？一夏。緊張のしすぎではないか」

小声で隣の焰が話しかけてきた。

「緊張もするさ。そんなことより、焰。あの窓際の子、篝だよな」

窓際の席から時折こちらに低温の視線を送ってくる女子。俺はその女子に見覚えがあった。幼馴染の篠ノ之篝。小学生のころ転校しちまったけど、昔と髪型が変わっていなかったのですね。気がついた。話しかけて行っているのか非常に疑問だ。機嫌が悪そうだな。あの低温の視線がそれを物語っている。

「確かに、篝だとは思うな。しかしよく気がついたな一夏。我も見ただけでは気がつかなかったぞ」

「………。焰。緊張してるだろ、お前」

「……何を根拠に」

「一人称が我になつてゐるぞ。使うときは、真剣勝負の時か、緊張しているのだぞ」

「く、我としたことが」

「なににせよ、自己紹介でわかるんじゃないか。先生来たぜ」

と刻？。緊張してないように見えるが、さっきから髪をいじっている。ああ、お前もか。

まずい、非常にまずい。どのくらいまずいかつていうとマジまずい。そのくらい混乱するほどまずい状況だ。自己紹介の順番だ。てつきり、左から右だろうと思ひ真ん中の俺はゆっくり考えようと思つたのだが、よりによつて出席番号順だ。焰と刻？は、アイコンタクトで「good job」と合わせるだけで何の助けにもならない。僅かな希望を託して第の方を向いたが、目をそらされた。俺、嫌われる？

「・・・君、織斑一夏君！！」

「は、はい！！」

いきなり大声で呼ばれたので思わず声が裏返ってしまった。案の定、くすくすと笑い声が聞こえる。というか、お前らも後でこうなるだ

からな。

「あつ、あの、お、大声だしちゃってごめんなさい。お、怒ってる？ 怒ってるかな？ ごめんね、ごめんね！ でもね、あのね、自己紹介、”あ”から始まって今”お”の織斑くんなんだよね。だからね、ご、ごめんね？ 自己紹介してくれるかな？ ダ、ダメかな？」

早口でそうまくし立てられ、必死に頭を下げる……えっと、そう、副担任の山田真耶先生。上から読んでも下から読んでも”ヤマダマヤ”だからすんなり覚えられた。
じゃなくて！ サイズの合ってなさげな眼鏡がずり落ちそうなくらい頭を下げる山田先生をどうにかしないと。

「あの、先生。そんなに謝らなくても自己紹介をしますから……」

「ほ、本当ですか！？ 絶対ですよ？ 約束ですからね！？」

……本当にこの人は年上と言うか教師なのだろうか。
同年代の人が無理に先生をしてるって方が頷けるぞ。

「——よし」

と、そんなことを思ってる時間も視線がなくなるわけではないので、とっとと終わらせる為に振り返る。正直何も良くないし、言うことも決まっていらないから忘れることにした。

「お、織斑一夏です。よろしくお願いします」

儀礼的に頭を下げて上げる。よし、このまま

「以上です」

戦略的撤退に持ち込む。がたたつ。思わずこっける女子が数名いた。どんだけ期待してんだよ。無茶言うな。そ一刻？、ため息交じりに苦笑するな。焔は何びびってんだ？

パアンツ！

いきなり頭を叩かれた。痛い、という無脊椎反射より、あることが頭によぎった。この叩き方は

「げえ、関羽！！」

「誰が、三国志の英雄か、馬鹿者」

振り返った俺に再び同じ衝撃が襲いかかってきた。なるほど、名簿で叩いてるのか、じゃなくて！

「ち、千冬姉！？」

「馬鹿者、ここでは織斑先生と呼べ。それとなんだ、お前は挨拶も口クにできないのか」

……職業不詳、月に一、二回しか帰って来ないうちの姉が立っていた。名簿を持っていかに教師な感じで。

「織斑先生、職員会議はもう終わったのですか？」

「ああ。すまないな山田君、ホームルームを任せてしまつて」

千冬姉はそう言うとか壇に立つて俺達を見下ろした。
覇気でも纏つてるんじゃないか、つてくらいのオーラで。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者にするのが私の仕事だ。私の言うことはよく聞き、理解しろ。できない者にはできるまで指導してやる。」

私の仕事は弱冠十五歳を十六歳までに鍛え抜くことだ。逆らつてもいいが、私の言うことは聞け、いいな」

言葉がまるで物質化でもしたんじゃないかと思つくらいに強い声が俺達に響き渡って行く。うん、この暴力宣言は間違いなく俺達の姉、千冬姉だ。

「キヤーツ！ 千冬様よ！ 本物の千冬様よ！」

「わ、私ずっとファンでした！」

「お姉さまって呼んでもいいですか！？」

「私、お姉さまの為なら死ねます!」

俺が生きてきた中で一番の騒音が鼓膜を揺らした。

なんだこれは?おい、焰、いつの間に耳栓を?刻?もか!!

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。」

それとも何か、私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか?」

違うぞ千冬姉。その理論だとおそらくこの学園の生徒の大半が馬鹿者になるぞ。

「キャー! 千冬様、もっと罵って!」

「付け上がらないように躑をしてえっ!」

もはや力オスだ。

「そういえば、織斑くん、さっき千冬姉って……」

「名字も一緒だし、まさか姉弟!?」

「いいなあ、変わって欲しいなあ」

うわ、なんかこっちにまで飛び火してきやがった。

千冬姉も、お前のせいだみたいな目をしないでくれよ。言わなかったそっちにも問題有りだからな！

怖いからそんなこと言えないけど。

「……まあいい、続けるぞ。そこで笑っている男子二人。さっさと紹介しろ」

side 焰

まさか、千冬さんがここで働いているとは。驚いたものだが、違和感はあるでないな。さて、私の紹介か、なるようになった。

「真庭焰だ。趣味は甘味巡り。特技は忍法だ。諸事情あつてISを動かせた。一年よろしく頼む。」

区切る。反応は、戸惑っているな。山田先生は、困惑気味だし、千冬さんはため息をついている。

「あ、あの真庭君、忍法ってなんなのかな？」

「実際、見せた方が早いでしょう。織斑先生」

「好きにしろ」

「では、忍法・演武・爪合わせ」

右手をかざす。みるみと、爪が伸びていく。クラス中が啞然として
いる。反応が薄いのは、一夏と刻？に千冬さん、それに箒もか

「以上だ。すまん、刻？、切ってくれ」

「あいよ」

手刀で爪を切っていく刻？。さすがに、千冬さんと箒も驚いている
な。

「次は、俺か。鑢刻？だ。趣味は散歩と修行だ。特技つーか流派は
？刀流。俺も、一夏と焰と同じくIS動かせた。一年間よろしく」

と刻？が紹介した。

「まあ、及第点だ。次」

あれで及第点か。そんなことを考えつつ、クラスメートの自己紹介
を聞いていった。

一時間目が終わり今は休み時間。この教室内の異様な雰囲気はいかんともしがたい。俺ら以外は全員女子。「ISを使える男」として一年生は当然在校生がみな知っているということだ。肩身が狭いな。しかも、俺の忍法のこと電光石火のごとく知られわたっていく。まあ、いずればれるからな。そんなには気にしてはいない。

「よかつたのか、焰」

「別にかまわん。こればかりは、真庭の人間にしか使えんしな。刻？、無事か？」

「なんとか」

一時間目の授業内容ですでにHPは黄色ケージか。二月で、電話帳の厚さを何とか覚えたばかりだしな。

「ちよつといいか」

「「「ん」「」」

突然話しかけられた。

「篝」

目の前にいたのは、6年ぶりの再会になる幼馴染だった。

「廊下でいいか？」

「お、おう」

と一夏。

「いてらー」

「「いや、お前もだから」」

なんだ俺もか。

side 刻？

一夏と焰が出ていったことで自然に教室に残る男子は俺しかいない。
とそこへ

「ねえ、ねえ、ようよう」

ようよう？見ると、女子3人が俺に話しかけてきた。

「俺のことか？ええと・・・」

「私、布仏本音だよ」

「で、その本音さんはなに用で？」

「うん。ようようがほむほむの爪を手で切ったのって忍法なの？」

「いや、純粹に手刀でだ。？刀流じゃ技にも入らない当たり前の技

術だ」

「？刀流〜〜？」

「虚しい刀の流れ。と書いて？刀流。刀を使わない剣法だ」

「剣法？拳法じゃなくて？」

「そういう流派だ。実習で見せる機会もあるから詳しくはそこで」

そう言ったところでチャイムが鳴る。やれやれ、また授業か・・・

side 焰

「・・であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したIS運用をした場合は、刑法によって罰せられ」

く、頭が痛いな。勉強は苦手というほどではなかったが、アドバンテージが違いすぎる。今の俺は、記録辿りの応用でやりくりしているが、あいつらはどうなんだろうか？一夏、頭に混乱のマークが付いているぞ。二か月まじめにやってこれか。刻？~~~~。戻ってこい。HPが残っていないぞ。頭から煙が出ているぞ。

「織斑君、真庭君、鑓君、何かわからないところがありますか？」

と山田先生。

「あ、いえ、大丈夫です」

と俺

「このこと、ここがわかりません」

と一夏

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

返事がない。ただの屍のようだ。って違う。

「鑓君!!」

「鑓、起きろ!!」

と、出席簿で鑓の頭を叩く千冬さん。様になってるな。

「うお、なんかさっきまで顔も知らない頬に入れ墨彫ったちよいわ
るそうなおっさんと話してた」

「「臨死体験!!」」

ダブルで突っ込む俺と一夏。

「馬鹿者。騒ぐな」

と頭をはたかれる俺ら。

「鑓、入学前の参考書は読んだのか？」

「一応読みました。内容の6割しか理解できませんでした」

「全部理解しろ」

「織斑先生、無茶言わないでください。それでも、刻？は頑張った方ですよ」

「甘いぞ、真庭。ISはその機動性、攻撃力、制圧力と過去の兵器を遥かに凌ぐ。そう言った『兵器』を深く知らずに扱えば必ず事故が起きる。そうしないための基礎知識と訓練だ。理解できるまで覚えるものだ」

確かに正論だな。

「とにかく頑張ります」

「うむ。精進するように」

「え、えッと、鑢君。わからないところは授業が終わってから放課後教えてあげますから、頑張って？ね？ねっ？」

「ありがとうございます」

「ほ、放課後……放課後見一人きりの先生と生徒……。あつ、駄目ですよ鑢君。

先生、強引にされると……」

「チェンジで」

「いや、気持ちはわかるが、そんなのねーから」

刻？のボケに同時に突っ込む俺と一夏。前途多難だ。

「ちょっと、よろしくて？」

「「「ん」」」

二時間目の休み時間、また三人でだべろうかとしていたところ声をかけられた。話しかけた相手は地毛の金髪が鮮やかな女子だった。

「どちらさん？」

これは一夏。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

あんた誰？という目線。これは刻？。

「……あなた達、このわたくしを知らないと？」

顔が真っ赤になっている。ときどき、真希姉が蝶兄さんにでれるときによく真っ赤になっていたがな。やれやれ、気苦労も趣味なのかねえ。

「失敬。そして、なに用だ。セシリア・オルコット嬢？」

「あら、あなたはそちらのお二人より好感は持てますわね。このイギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしのような選ばれた人間とクラスを同じ……って聞いてます？」

「「ん」「」」

実際、「この……」の段階でまともに聞いてはいない。最後あたり、選ばれたの時点で鼻で笑ったがな。

「失敬。なにせ、俺らは四季崎の刀に選ばれているからな。国代表程度では動揺はせん」

「だな」

「つか、入試ってISを動かして戦うやつ？」

「そうですね。わたくしが唯一教官を倒しましたわ」

「あれ、俺らも倒したぞ、教官」

「ああ、そうだな」

「わ、わたくしだけと聞きましたか？」

「女子ではってオチじゃね？」

と、刻？。ピシッ。何か嫌な音だな。

「つかぬ事を聞くが、何分で倒した？」

「俺ら、一瞬だったよな」

と一夏。一瞬、という言葉に反応してかオルコット嬢が何か言おうとした時、チャイムが鳴った。

「っ……！またあとで来ますわ！逃げないことね！よくって！？」

よくないわ。俺達はシンクロした。

「それでは、この時間は実戦で使用する各種装備の特徴について説明する」

1、2時間目とは違い、山田先生ではなく千冬さんが教壇に立っている。よっぽど

重要なことであるのか山田先生までノートを手を持っている。

「ああ、その前に再来週に行われるクラス対抗戦にでる代表者と副代表者を決めないといけないな」

その言葉にざわめく教室。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。副代表はその補佐だ。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点で大した差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると変更はないからそのつもりで」

さて、クラスの状況を考えると自信家のセシリア嬢か？と考えてい

ると

「はいっ。織斑君を推薦します」

「私もそれがいいと思います！」

「私は鑢君を推薦します」

「私は、真庭君を・・

「いや、我は副代表を自薦する」

しまった。条件反射で答えてしまった。

「では、代表候補者は織斑一夏か鑢刻？、副代表は真庭焰か。他に
はいないか自薦他薦は問わないぞ」

「お、俺！？」

「すみません。俺は、副代表の方を希望します。そして、一夏を代
表に推薦するぜ」

立ち上がっている一夏と冷静に対処する刻？。しかし、セシリア嬢
は騒がないな。このままいけばいいのだが…

「納得がいきませんわ！？」

とはならなかったな。

「このような選出は認められません！」

「だいたい、男がクラス代表なんていい恥さらしですわ。わたくしに、このセシリア・オルコットに一年間そのような屈辱を味わえるとおっしゃるのですか？」

とまくし立てるオルコット嬢。しかし、よく舌をかまないな。

「実力からいってクラス代表はわたくしがなるのが必然。それを、物珍しいからと言って極東の猿にされては困ります。わたくしはこのような島国までIS技術の修練に来ているのであって、サーカスをするつもりなど毛頭ございませんわ。いいですか、クラス代表は実力基準で決めるべきであり、つまりそれはわたくしですわ！」

改めて思う。よく舌をかまぬものだ。

「だいたい、文化としても後進的な国で暮らさないといけないこと自体、わたくしに取っては耐え難い苦痛で——」

「イギリスだって対してお国自慢ないだろ。世界一不味い料理で何年覇者だよ」

と一夏。やってしまったな。

「あ、あつ、あなたねえ！わたくしの祖国を侮辱しますの」

「それは、そちらもだろう。オルコット嬢」

こうなつては仕方がない。何とかおさめて見せますか。

「要は、我らの実力が知りたいのであろう？ならば、ここは模擬戦

でもしてみた方が白黒はつきりつくのではないか？」

「おお、いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」

「上等ですわ。完膚なきまでたたきつぶしますわ」

「だ、そうだ一夏」

「え」

「何を呆けている。代表候補はお前だぞ。それに我は、刻々と戦いたいしな」

「一年前の再戦か？」

「そのようなものだ。織斑先生、いかかですか」

「わかった。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑、セシリア、真庭、鑓はそれぞれ準備を行うように。それでは授業を始める」

さて、セシリア嬢を一夏に押し付けたが、意外にも早く再戦の機会を得た。今度は私の勝利だぞ、刻？。

第一話 入学（後書き）

感想、質問よろしくお願いします。

第二話 真庭家にて（前書き）

質問、感想よろしく願います。

第二話 真庭家にて

放課後、俺達は職員室に呼び出された。

「部屋ですか？」

と、俺ら。もう決まったのか。一週間はかかると聞いたが

「事情が事情なので、一時的な処置として部屋割を無理やり変更したらしいです。そのあたりのことって政府に聞いてます？」

最後らへんは俺達にしか聞こえるように耳打ちした。

「いいえ。てつきり、政府から嫌われているものだと思っていますし。よかつたいや悪いのかこの場合？」

と刻？。山田先生はぽかんとしているが、実際、刻？のご先祖様は家鳴將軍8代目を暗殺している。ま、俺の家も表舞台の連中から見れば大層な家ではないしな。

「ってことは荷物を一回家に取りに帰らないと、今日はもう帰っていいですか」

「あ、いえ、荷物ならー」

「私が手配してやった。ありがたく思え」

と千冬さん。

「織斑は生活必需品だけだな。着替えと、携帯電話の充電器があればいいだろう」

うなだれる一夏。ご愁傷さま。その時、内線が鳴った。千冬さんが取り、二言三言しゃべったあと、

「真庭、鑓、駐車場まで行ってくれ。真庭の姉が荷物を届けに来た。ああ、鑓は一旦帰って準備しろ。出迎えも頼んだからな」

「わかりました」

「寮の詳しいことは織斑に教えておくから、聞いておくように」
もう一度度返事をして、刻？とともに駐車場に向かった。

side刻？

「あれか？」

駐車場に着くと、長身の真希さんと小柄の蝶次郎さんがいた。

「真希姉、それに蝶兄さん」

「お、来たか」

焰の姉の真希さんと蝶次郎さん。一度、蝶次郎さんと戦ったが、負けた。だけど、そのおかけでずいぶんましにはなれたと思う。

「荷物はこんなんでよかった？」

「十分だ。真希姉。もしかして、仕事の途中だった？」

「安心しなさい。有給よ。ところで、千冬ここで教師してるって？」

「ああ、しかも俺らの担任。だけど、違和感はなかったな」

「かもね。あ、刻？君は夕食どうするの？ここ、時間とか決まってるだけど？」

「だったら家で食うか？」

そっぴえば考えてなかったな。

「いいんですか？」

「いいわよ。だけど、ちょっと帰り遅くなるけど大丈夫？」

「その辺のことは俺が伝えれば十分だろう」
「それもそうね」

「焰、たまには道場の方にも顔出せよ」

「わかってますよ、蝶兄さん」

「そんなときは俺もいいですか、蝶次郎さん？」

「いいぜ、刻？」

焰の荷物を下ろし終え、俺は真希さんの車に乗り家に向かった。

side 焔

荷物を受け取り、寮に向かう。番号は1026号室か。ようやく着いた途端

「なんだ、これは？」

突っ込んでしまう。見れば廊下に女子がぞろぞろと出ている。全員がラフな格好である。一部の子に至っては、目のやり位置が困る格好だ。原因は、

「何をしている一夏」

何とか通してもらい、原因である親友に問い詰める。

「焔か？なんだろうな、非常に言い難い」

「そうか」

恐らく、こいつのことだ。嬉し恥ずかしいイベントでも起きたのだろつ。

「寮のことは夕食後にも聞こう」

「そうしてくれ」

会話を終え、1026号室に入る。

「織斑君の隣が真庭君の部屋だね」

「いい情報ゲットー!!」

聞こえなかったことにしよう。

部屋に入ると、大きめなベットが二つ目に入った。ふむ、どちらかといえば布団派なのだな。さっそく荷物の整理にかかる。流石は真希姉。娯楽品も少しばかりは入っている。情報端末もある。あらかた片付け終わり、最後に4つ残った。一つは鳳凰の開け軸。一見アンティークに見られがちだが、これは音飛ばしの道具だ。2つ目は臙脂水晶。こいつは持ち主が死ぬと砕けるといういわくつきの真庭の家宝だ。実際砕けたらしい。掛け軸を机の前の壁にかけ、その下に水晶を置く。3つ目は、真庭語（裏）の要訳のレポートだ。ところどころ暗号染みた文章になっていたため訳が遅れたがようやく完成したものだ。そして最後に、去年の夏に見つけたISのコアらしい珠、計十個。真庭語通りにすれば残りは、鈍、？、鎧、鎚、鏢、釵、鋸、銓、鍍、銃

真庭家の方針としては、反応があつた人にやろうという形になった。ただ、鏢と鍍は危険だということで消極策で鎖を巻いている。これらについては明日、千冬さんにも相談しよう。そう思い、机の上に置き私服に着替え、焰のことを伝えるため職員室に向かった。途中、1025室から大きな音が聞こえたが、まあ、なんだという風にスルーした。

食事を終え、1025室をノックする。出てきたのは、

「第？」

「な、何の用だ？」

剣道着姿の幼馴染だった。明らかに何かあったな。

「一夏はいるか？」

「すまない、ちょっと気絶している」

させたんだな。あえてそこには触れずにしてやろう。

「ああ、寮の規則のことを聞きたかったのだがな。知っている範囲で教えてくれないか？」

「先生たちから聞いていないのか？」

「途中で荷物が届いてな。受け取りにいていた」

「そうか」

こうして、筭から知っている範囲で規則を聞きだした。細かな点は明日一夏に聞けばいいか。

「よくわかった。ありがとな、筭」

「う、うむ」

「何があったかは聞かないが後悔はするなよ」

「べ、別に私は…」

はいはいと受け流し、俺は屋上に向かった。一夏の奴め、美人な幼馴染に恋い慕われているのに気がつかないのは、ある意味重症か。まあ、これも青春かと思いつつ、1週間後に行われる模擬戦のため、我は鉈を出した。我は剣士ではない。剣を極めるのは無理だが、修めることはできる。そう考えながら訓練に徹した。

side刻？

「いただきます」

そう言つて、肉じゃがを頬張る。うま

ここは焰の実家の真庭家。荷物をとった帰りにこうして御馳走になっている。ここにいるのは、家長の亀有さん、奥さんの静香さん、焰の姉さんの真希さん、その恋人の蝶次郎さん、弟の密三郎さん、焰の従兄弟の海と涼君。蝶次郎さんと密三郎さんの兄鎌太郎さんは結構多忙な人なのかここにはいない。

「それで、IS学園はどうですか、刻??」

と海が聞いてきた。皆興味深々である。

「まだ初日だからな。これからだと言いたいが、疲れた」

「そんなにハードなのか？」

と亀有さん。

「そうっす。二時間目でバタンキューです」

「それは大変ですね」

と密三郎さん。結構イケメンなのに恋人がいない。と焰が嘆いていたな。

「ま、学生の本業は勉強ってこと。頑張りなさい」

と真希さん

「あ、あの」

「どうしましたか、涼？」

「まだ、実習とかないのですか？第三世代型とか見てないですか？」

現代っ子の涼君。そう言えば、ISに興味シンシンだったか。

「まだだな。そう言えば、一週間後に模擬戦があるんだったな」

「マジでか!!」

「そうがっつかないで下さい。蝶兄さん」

「で、誰と誰がですか？」

「一夏とイギリス代表の子だ。あと、俺と焰です」

「そいつは再戦か？」

「でしょうね。言っちゃ悪いですが負けませんよ、俺は」

「どうでしょうかね？ 焰の忍法は、私たちの中でも種類が多いですからね。苦戦になるでしょね」

「そ・れ・に。あの後、俺がみっちり鍛えさせたからな」

「そいつは怖い」

「そう言えば、千冬ちゃんは元気そうだった？ 刻？ 君」

と静香さん。基本的におっとりしている。

「一夏の姉さんですか。そうですね、元気そうでしたよ。元気すぎるというか……」

「何かあったのかい？」

「どうせ、叩かれたんだろ。こう、バシッと………凶星？」

「どうやらそうらしいですね。刻？」

「あらあら、まあまあ」

そつこう雑談と食事を終え、再びIS学園に向かう。部屋に向かう途中、何かと女子に話しかけられた。やれやれ、弾が聞いたら羨ましがられるかな？

side 一夏

「なあ……………」

「……………」

「なあつて、いつまで怒ってるんだよ」

「…………怒ってなどいない」

「顔が不機嫌そうじゃん」

「生まれつきだ」

にべもない。箸と同じテーブルで食べているがギスギスしている。今朝氣がついて、速攻で謝ったが不機嫌なままだ。原因は俺にあるが、この様子じゃ取り付く島もない。誰か助けてください。

「おはよう、一夏、箸」

「おっす」

願いが通じたか、親友二人がやってきた。

「おはよう、焰、刻？」

「…おはよう」

焰が篝の様子に気が付き、俺に小声で話しかけた。

「一夏、何をした？」

「詳しくは言えん。助けてくれ」

「しょうがない。昼にイチゴ牛乳おごれ」

「ああ、てか糖尿なるぞ、いつか」

「その辺は計算している。それに、カルシウムだ。カルシウムさえとっておけば問題ないんだよ、この世の中」

「飛躍しすぎだろ、とにかく頼む」

「ねえ、ねえー、ようよう。一緒に食べていい？」

横から、女子の声が聞こえた。

「本音さんじゃないか、いいぜ」

と刻？。本音さんとその友達二人は刻？の隣に座った。

「鑓君達、そんなに食べるの？」

「ああ、朝にがつつり食った方がいいだぜ。焰の場合、たまに甘い

もの控えた方がいいんじゃないかってレベルだな」

「計算はしているさ、刻？」

「それにしたって、宇治金時丼はやめろよな」

「何を言う。炭水化物＋炭水化物は王道だぞ。あんぱんしかり。ケ
ーキしかりだ。それにあまり間食はしないからな。問題ない」

「そういうもんか。てか、本音さんたち、そんなに少なくて平気な
のか？」

「わ、私たちはねえ？」

「う、うん平気かなっ？」

何という燃費の良さだ。ISが女にしか使えない理由って実はこれ
なのか？

「お菓子よく食べるし！」

…間食は太るぞ。

「……織斑、私は先に行くぞ」

「ん、ああ。またあとでな。ほう…篠ノ之さん」

「俺も先に行こう、一夏、刻？。またあとでな」

「焰、頼む」

「まかされた」

side 焰

「篝」

「焰か、どうした」

食堂を出るとすぐに見つかった。先ほどとは打って変わって、自己嫌悪な顔付きになっている。やれやれ

「昨日の様子だと何かあったが、喧嘩でもしたのか？」

「喧嘩をしたわけではないが、その……」

「待て、あの馬鹿はそんなにまずいことしたのか？」

「い、いや事故だというのは分かっているが、その鈍いんだ、あいつは」

「なるほど、一夏の重症は今に始まったことではない。ともかく、変に意固地になると変な方向に誤解してしまう。せめて、一夏って呼んでやれ」

「善処する」

「しかし、一途なものだな。一夏にはもったいないくらいだな」

「何を言っている!？」

「悪い、悪い。俺からは一言、頑張れよ」

「ああ」

そう言って会話を終え、教室に向かった

第二話 真庭家にて（後書き）

皆様にアンケートです。

もしよかったら、真庭家獣組を募集しています。どんどん書いてください。

よろしくお願いします。

第三話 変化（前書き）

サブタイトルつけるのが難しいです。感想、質問待ってます。

第三話 変化

side 一夏

二時間目の休み時間。焰たちとだべろうとした。箒も機嫌が治ったのか、今朝のようなギスギス感はない。しかし、昨日の様子見が終わりを告げたのか、

「ねえねえ、織斑君さあ！」

「はいはい、質問。真庭君の忍法ってあれ以外使えるの？」

「鑓君で、休みの日なにしてるの？」

「今日の昼ヒマ？放課後ヒマ？夜ヒマ？」

と俺達の席に詰めかける。流星の焰もたじたじだ。

「千冬お姉さまって自宅ではどんな感じなの！？」

「え。案外だらしな」

パンツ！

「休み時間は終わりだ。散れ」

わが姉上よ。いつの間にも後ろに？

「ところで、織斑、お前のISだが準備に時間がかかる。予備機が二台しかなかったんだ」

「すると、一夏のISはどうなるのですか？」

「学園で専用機を用意するそうだ」

「しかし大丈夫なものですかね。俺達は、ISコアモドキを持っているんですが」

「ISコアモドキって？」

「ああ、織斑先生話してもいいのですかね、これ？」

「ああ、それ思った」

「今のところは問題ない。束の奴にも確認は取れている」

「なるほど」

「ああ、そういえば。これらの保存するにあたって何か連絡とかないですかね」

「と言って、箱を取り出し見せた。」

「特には無いな。初めて見るな。確かにISのコアに見えるな」

「「「ええ〜〜〜！！」」」

と絶叫。

「ISのコアって世界に467個しかないんだよね？」

「まさか、真庭君・・・」

「いや、やましいこと何もしてないからな」

「そうだぞ、ん」

見ると、球の一つが光っている。鋸

「この場合どうすべきなんですかねえ、先生」

事前に話はしていたため、千冬さんは

「一人、一人確認するしかないだろ」

ということで、クラスの女子が次々と触れてみたが、無反応。十人過ぎただろうか、箒が触れると、

「主、認証しました」

と声が聞こえ光を放った。光が薄れると、木刀を持った箒がいた。

「木刀だね」

「木刀だな」

「伝説の刀鍛冶も何か迷ったのかねえ？」

「いや、あれが四季崎記紀の造りし完成形変体刀9番目の刀、王刀・鋸。主題は、毒気のなさだったかな」

箒はまっすぐに鋸を見つめていた。

「篠ノ之、しまえるか？」

「あ、はい、大丈夫です」

箒は目を閉じて、念じると右手の人差指に木製の指輪がはめられていた。

「さて、授業を始める。席に戻れ」

という千冬姉の鶴の一声で授業が始まった。

「安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとは思っていなかったでしょうけど」

休み時間、さっそく俺の席にやってきたセシリアは、腰に手を当ててそう言った。どうでもいいけど、お前好きだねそのポーズ。

「まあ？一応勝負は見えていますけど？さすがにフェアではありませんせんものね」

「それは、速計でないのか、オルコット嬢。こいつの奥の手は我らでも対処に苦戦する」

「あら、あなた方が言う変体刀のことですか？確かに未知ではありますが、所詮は過去の産物。敵ではありませんわ」

「それは勇ましいな。せいぜい、足元を掬われないようにな」

「ご心配なく。万に一つありませんわ」

「億に一つはあるかもな」

「馬鹿にしていますの？」

「さあな」

とにかく飯を食いに行きたい。そう思い打ちきつた。

「ISのことを教えてくれないか、箒。このままだと、多分負けるからさあ」

「くだらない挑発に乗るからだ、と言いたところだがいいだろう」

「助かる」

「というより、焰たちはどうするつもりだ？」

「心配には及ばん。すでに予備機（打鉄）が準備されている。放課後にもアリーナで訓練する予定だ」

「同じく」

「まあ、教官がいないことは不安であるがそれは刻？も同じだ」

「ねえ。君達って噂の子でしょ？」

いきなり、隣りから話しかけられる。見ると、やや外側にはねた髪が特徴的な女子がいた。リボンの色が赤色だから三年生のようだ。

「代表候補生の子と勝負するって聞いたけど、ほんと」

「はい、そうですけど」

噂ってそんなことまで広まっているのか。流石は女子、噂話には目がないな

「でも君達って、素人なんだよね？ISの稼働時間いくつくらい？」

「試験の時のみだったよな。10分くらいか。瞬殺だったしな」

「瞬殺！？だけど、ISって稼働時間がものを言うのよ。もしよかつたら私が教えてあげよっか？ISについて」

そう言われる。ふと焰たちを見ると、示し合わせたかのように

「そうですか、では頼みます。ああ、一夏は筭が教えることになっているんで」

「頼みます。先輩」

と、ここぞとばかりにくらいいついていた。

「ええ、よろしくね。放課後第3アリーナでいいかな？」

「大丈夫です。ああ、そういえば自己紹介がまだでしたね。俺が、真庭焰。こっちが、

「鑢刻？だ」

「私は、ちのほしちゆう皿場硝子。じゃ、放課後に」

そう言って去って行った。

「ふむ、都合よく見つかったな」

「そうだな」

「一夏」

「ん」

「今日の放課後、剣道場に来い。いちど、腕がなまってないか見てやる」

「いや、俺はISのことを——」

「まだ、機体は無いのだろう。いいから見ても」

「ま、それもそうか。よろしく頼む」

篤は、なぜか頬を赤く染めつつ

「うむ」

と頷いた。

「一夏」

「なんだよ。焰」

「食後にコーヒー牛乳おごれ」

「ああ、てかイチゴじゃなくていいのか？」

「今は無性にコーヒーが飲みたい気分だ」

どっちにしろ甘いチョコイスだな。

side 焰

放課後、焰とともに打鉄を装備して第3アリーナにいる。皿場先輩が基礎のこと教えてくれたので非常にうまくいっている。どこから噂が漏れたかは知らないが、第3アリーナにはギャラリーであふれかえっている。さてと、用意した鎖を手を持ち

「忍法・演武・渦刀鎖式」

忍法を使用してみた。ふむ、違和感はない。続いて

「永劫鞭」

繰り出す。装備として、チェーンウィップなんかないだろうか？聞いてみよう。焰の方を見ると、七花八裂の練習をしている。ふむ我も負けられないな。

「真庭君」

「わざわざすみません。皿場先輩」

皿場先輩に頼んで射撃用的を持ってきた。用意した棒状手裏剣を構え、

「巻菱指弾応用」

まずは、5丈（15メートル）問題なし。10丈（30メートル）問題なし。

12丈（36メートル）やや横にそれた。15丈（45メートル）ぎりぎり当たった。ここまでか。

「すごいね。銃器だったらスコープとかついてるけど、肉眼で当てるなんてやるじゃない」

「ありがとうございます」

投擲の練習を切り上げる。時間も限られているので、最後に鉋を使うか。

「絶刀・鉋」

右手に持ち、練習を開始した。10分経っただろうか。突如、眩暈を起こした。何事かと思うと、設定完成という声が響いた。すると、機体が光り始めた。

目を開けると黒を基本とした機体となっていた。床には打鉄のコアラしきものが転がっていた。同様のことが刻？にも起きていた。機体は赤を基本にした十二単風の着物のよう変っていた。

「真庭君、鑢君？どうやったの？」

皿場先輩が混乱していた。そう言われても分からないものは分からない。待てよ、こいつは

「鉋が原因か？」

誰かが呼んだのか、千冬さんがやってきた。

「真庭、鑢。とにかく、今日の練習はここまでだ。機体は少々調べさせてもらうが、時間はいいか」

「うす」

「問題ないです。あ、皿場先輩、今日はありがとうございました」

そう言って、アリーナを去った。

「検査の結果が分かった」

ピッド内で待機してしばらくたったところか、千冬さんが戻ってきた。

「二人の機体だが完全に打鉄とは違った機体になっていた。先ずは、真庭のからだ。性能は第三世代並の機体になっている。特徴としては、機動性が他のISに比べ高い。装備についてだが、砲のみだな。それでも、拡張領域が十分にある。最後に何かしらの能力が設定されているようだがこれについてはまだ分かっていない」

「分かりました。拡張領域が装備したい武装があるのですが可能ですか？」

「大がかりなものでは無ければな。次に鑢だ。鑢の機体は真庭の機体より性能が上だ。ただ、単一使用能力と常時発動型能力で大半が埋まっている。装備は、手甲と足甲のみ。能力についてだが、これも真庭同様まだ分かっていない以上だ。質問は無いか？」

「織斑先生、機体の名前は決まっていますのですか？」

「決まっではないいな。お前たちが決めていいぞ」

「では早速、『黒鳳』（こくほう）で」

「じゃ、俺は『森羅』（しんら）で」

「黒鳳と森羅か。分かった、そう入力しておこう。以上だ。真庭、装備については明日に聞こう」

それを合図に俺達は学食に向かった。

side 一夏 時は放課後

今俺は剣道場にいる。どこから噂が漏れたのか、ギャラリーは満載だ。あいつらのところも今こうなっているのかな？それにしても竹刀持つのも久しぶりだな。その前に、いつもの習慣で針を発動させる。それを構え、目を閉じる。そしてなおした。

「よろしく頼む、箒」

「ああ、さっきのが一夏の？」

「ああ、四季崎記紀の完成形変体刀4番目の刀、薄刀・針。主題は、軽さと美しさだ。ただ、この刀スゲー脆いんだよな。」

「そうか、では始めるぞ」

30分後

「どついうことだ」

「と言われても」

手合わせを開始してから30分。俺の負け。やはり、ブランクが長いのが原因だ。

「…中学では何部に所属していた？」

「帰宅部だ。ちなみにバイトしてた。剣振ったのは半年前からだ。たまに、焰と刻？と稽古したけど、俺の勝率は2割だ」

「鍛え直す！IS以前の問題だ！それに筋は悪くないのだ。これから毎日、放課後に私が稽古つけてやる」

「いや、それはいいが、IS関連も――」

「分かっている。焰たちには一応勝っているのだな？」

「まあな。どっちかっていうと針の能力のおかげだ」

「どういうことだ？」

「なんつーか線が見るんだよ。トランスって言うのかな。その線を切れば、まっぴたつに切れるんだよ。岩でも、鋼でも」

「……すごいな」

「よしてくれ。続きいいか？」

「いいだろう」

と会話を終え、トレーニングを再開した。

side 刻？

訓練が終わり、学食に向かう途中、一夏達とであった。そのまま、一緒に夕食を食べることにした。

「で、どうなんだ、一夏のほうは？」

「感覚を失っているが、筋は悪くは無い。1週間で使い物にしてやる」

と篠ノ之さん。明らかに、恋い慕っているな。それに気がつかないとは、焰も言っていたが重症だな。

「焰と鑢君は」

「ああ、すまん。篠ノ之さん。俺のことは、刻？でいい」

「ああ、なら私のことは筭でいい。ところでISの訓練は順調なのか？」

「それについてだが、機体が変わった。恐らく、俺らのコアが原因であるがな」

と途中経過を焰が説明した。

「そいつは驚きだ。てことは、俺の針も」

「可能性としては十分あり得るな」

「しかし、分からないな。四季崎記紀はここまで予測できたのかねえ？」

「さてな、今となつては真相は闇の中。知るすべは少ないな」

そう言つてこの話を打ち切つた。食事を終え、部屋に戻る。少し休んだ後は、今日の復習と明日の予習をする。それを終え、修行着に着替え直す。焰はシャワーを浴びていた。屋上に行く。アリーナでは練習できなかったが、前々から考えていた奥義を完成させるためだ。すでに？刀流の奥義は習得してはいるが、向上のためだ。梅の連続技その名も

「梅に驚」

とまあ、発案したはいいがなかなか使い物にならない。まあ、練習あるのみだ。こいつは、打倒焰の技にしてやる。練習を終え、部屋に帰る。

「帰つたか、こく……」

「どうした？」

「なんで、半裸なんだ!？」

「いやゝ、このスタイルが一番しっくりくるし」

「知るか!?!まさか」

焰はあわてて廊下顔を出した。

「見ろ、刻?。一部女子が鼻血出してるぞ!」

「ええ！！俺のせい！？」

「当たり前だ。さっさとシャワー浴びて着替えろ」

こうして、日々は過ぎていき一週間後の放課後。ついにやってきた。俺はピットに入ろうとしたが、先に来ていたのか、一課と筈が廊下で待機していた。

「速いな」

「まあな。だけどまだ来てないんだよな、IS。最悪、薄刀でやるしかないのか」

「落ちつけ一夏」

「ま、俺らが前座だからな、その間じゃ・・・」

「織斑君、織斑君、織斑君」

山田先生、大事なことは二回でいいと思いますよ。

「山田先生。落ち着いてください。はい、深呼吸」

「は、はいっ。す~~~~~~~~は~~~~~~~~、す~~~~~~~~は~~~~~~~~」

「はい、そこで止めて」

「うっ」

一夏、先生で遊ぶな。にしても、落ち着きないな山田先生。

「目上の人間には敬意をはらえ、馬鹿者」

パンツ！と織斑先生にはたかれる。自業自得だ。そうして、俺達はピッドに入る。そこには一夏の専用ISが鎮座していた。ゆっくり見たいところだが、あいにく時間が差し迫っている。さっそく森羅を装備する。

「刻？」

「何だ、一夏」

「頑張れよ」

「ああ」

さあ、戦おう、焰。

side 焰

ピッドに入ると、オルコット嬢が先に待機していた。とりあえず、会釈だけはしておく。あとは、頭にかぶり物をかぶる。さて、いく

「あの」

「なんだ？」

「何をかぶっていらすの？」

「見て分らないのか？帽子だが。少々変っているが、気にするな」
まあ、これは、戦闘着ならぬ戦闘帽だ。オルコット嬢は、何か言いたそうだったか、あきらめたのか、ため息をつく。

「オルコット嬢」

「なんです？」

「一つ忠告してやろう。一夏にときめくなよ」

「はあ？」

「忠告はしたぞ」

そう言つて黒鳳を装備する。そして外に出る。刻？も同時にでていた。

「さて、刻？。勝負の前に名乗りを上げたい。いいか？」

「いいぜ、じゃこつちからだ」

一呼吸置く

「？刀流剣士、鑢刻？押してまいる！！」

「真庭忍軍末裔、真庭焔、忍び名真庭鳳凰、いくぞ！！」

第三話 変化（後書き）

箒ちゃんに鋸持たせました。？もしくは鈍持たせてもいいかなとは思いましたが、やっぱりで鋸でとのりで決めました。次回はちょっと長めにかこうとおもってます。

第四話 激闘

side 焰

名乗り上げ、さっそく、棒状手裏剣を投擲する。むろん、刻？は避け、あるいは手で払い落した。出し惜しみは無用だ。

「忍法・鬼火」

火球を発火させる。そして放つ。その数20。さてどう出る。刻？は迷いもせずに火球を避けた。しかもただ避けるのではなく、我に接近する。

「？刀流・牡丹」

避ける。が、追撃の雨だ。一旦距離を置く。チェーンウィップを装備。

「忍法・渦刀鎖式」

発動させ突貫。だが刻？は驚かずに、

「？刀流・桜」

馬鹿な！？発動している鎖を切るだ！？見誤った。桜を左手で防ぐ。装甲にひびが入る。チェーンウィップをしまい、続けざまに放つ。

「断罪円」

「雛罌粟から、沈丁花まで打撃技混成接続」

Side
—
夏

「すごいですね、二人とも」

「二人とも、これくらいで驚いているんじゃない、後が持ちませんよ。焰も刻？もまだ奥義だしてませんか」

「おっと、焔は使っているな。断罪円。近距離最強の忍法ですよ」

「一夏、焰の変体刀はどんな刀なんだ？」

78

あの刀はそうじゃない」

「何だそれは！？永久機関じゃないか」

「例外はあるけどな」

さて、そろそろ打ち終わる頃かな？

side刻？

埒が明かないのでいったん引く。焰も同様に引いた。

「流石は断罪円。ちよつとばかり、ダメージくらったぜ」

「ちよつとばかりか。まあいい、どんどんいくぞ」

再び鬼火を発動させた。なら俺は

「？刀流・桜桃」

と衝撃波を放つ。鬼火に当たり粉碎され消える。

「ならば、大嵐小枯！！」

風が吹いた。こっちは向かい風、あつちは追い風。まさか！？

「さらに鬼火だ。名付けて、重ね忍法『百鬼夜行』！！」

成程、分が悪い。避けてはいるが当たるのは時間の問題か。本当は、

まだ隠しておきたかったんだが、仕方あるまい。

「IS常時能力発動『属性レジスト』」

鬼火をいくつか避けつつ、またははじく。焰に接近する。

「?刀流・梅」

しかし焰は鉋を出しそれで防ぐ。一筋縄じゃないか、ならば、

「派生技、『梅に驚』」

蹴り続ける。だがふさがれる。流石は、頑丈な刀だけはある。一旦距離を置く。すかさず焰は、

「報復絶刀!」

突き技で来た。甘い。

「?刀流・菊」

てこの原理で武器破壊を狙う。が、気付いたのか、焰はあえて鉋を放した。そのまま、投げ飛ばされ地上に突き刺さった。やるのだが、その隙を逃さず、梅を放った。

side???

生徒会室の屋根裏。そこに私は待機している。否、せざるおえないか。

「左近、いるんでしょ」

「……」

「相変わらず、生真面目ね。映像見えてる？」

「問題ありません」

「で、感想は？相生忍軍の最後の一人として」

「お譲さま、私は忍者ではありません。あくまでも、執事です」

「十人が十人今のあなたのことを見て、執事より忍者だって言うわ。脱線したわね」

「まだまだ、発展途上といったところでしょうか」

「そう。確か、真庭君だったけ。彼が使った断罪円。あれ、左近の忍法の……」

「生殺しです」

「ああ、それぞれ。やっぱり、あの子」

「真庭忍軍の末裔でしょう」

「うちのご先祖様も節穴ね」

「調査したのは、わが先祖です」

「問題ないって許可したのは私のご先祖様よ。左近、この子たちの

経歴ちよつと調べてくれない。期限は、そうね。GWの初日がいいわ。その日は、簪や虚ちゃんや本音ちゃん、正雪くんを誘ってご飯食べに行きましょう。その手配も」

「御意」

「ああ、予約は6人よ。ちゃんと自分も入れなさい」

「御意」

そう言つて調査にかかる。忍者か・・・私は、忍法よりも刀の方に興味を持った。恐らくあれが完成形変体刀であろう。それらを含め、入念に調べなくては。真庭忍軍か・・・思うところは無くはないが、私はあくまでも影だ。影はあくまでも影だ。生きて死ぬだけだ。

side 焰

さて、手詰まりか。急に特攻してきたが、ダメージは見るところ少ない。おそらく、ISの能力であろう。だがそろそろ使えるはずだ。我は棒状手裏剣を構える。

「断罪円か」

「いいや、巻菱指弾応用。一斉射撃」

本来巻菱指弾は精密射撃だ。数を増やすほど、命中率は悪くなる。当然避けられる。接近される。刻？が技を放つ前に

「爪合わせ」

右手の爪を伸ばす。刻？は、冷静に手刀で爪を切る。

「？刀りゆ・・・」

グツサ、本人にも何が起きたか分からないだろう。我はすぐさま刻？の背中に刺さった鉋を抜き

「報復絶刀！！」

体重を乗せて切る。大ダメージのはずだ。が

「？刀流・董」

足が絡まり、手刀で押し倒され地面に投げ飛ばされる。油断した。上を見上げる。

「驚いたぜ。それが、お前の能力か、焰」

「まあな。我は、これが黒鳳の単一使用能力『死翔刀』。ネーミングセンスがないことはご愛敬だ」

「いいんじゃないか、さて、そろそろ時間も押してきたな」

そうやって刻？は地上に降りた。

「全力でいくぞ！！」

「やってみろ!!」

「ただしその時には、八つ裂きになってるだろうがな!!」

生半可な技では効果は無い。ならば、

「断罪絶刀!!」

「七花八裂・改!!」

神速で切り合い、打ち合う。すでに何百合やりあったのかは分からない。気を抜いたら負けだ。だが、胸に掌底をくらう。続いて、もう一撃強烈なのをくらう。気絶しそうな感覚に陥りながらも、俺は鉋をふるった。それが届いた。好機、もう一度胸を切り裂いた。勝った。それが命取りだった。刻?は猛攻にめげずに再び掌底を繰り出した。同時に我も斬りかかる。同時に、ダメージをくらう。その時、

「エネルギー残量0。両者引き分け」

はい?

刻?も同様に首をかしげる。会場も同様に啞然としていた。

「よくもまあ、あれだけ持ちあげて引き分けか。仕方ないといえば仕方ないな」

ピットに戻り、千冬さんの一言だった。

「まあ、一週間であれだけの動きだ。明日からも精進しろ」

「「分かりました」」

と、訓示が終わり、一夏に

「さて、次は織斑だな。いけるか？」

「ああ」

「ISのハイパーセンサーは問題なく動いているな。一夏、気分は悪くないか？」

「大丈夫、千冬姉。いける」

「そうか」

「一夏」

「何だ、焰？」

「勝ってこい」

「同じく、何ならときめかせろ」

「冗談言つなよ、刻？。あと、篤」

「な、なんだ？」

「行ってくる」

「あ……ああ。勝ってこい」

この男は。ま、一夏らしいと思う。

「焰」

「何だ、箒？」

「いつまでかぶっているんだ。その……鶴みたいな」

「ああ、すっかりしていた。それと、箒。これは、鳳凰だ。断じて鶴じゃない」

我はそう突っ込んだ。何となく、鶴は嫌いだ。理性が受け付けん。

side 一夏

「あら、逃げずに来ましたのね」

セシリアがふふんと鼻を鳴らす。鮮やかな青色の機体『ブルー・テ
ィアーズ』。どこか王国騎士を連想させる。

「逃げるかよ。逃げたら、あの二人に笑われてしまうからな」

「そうですか。なら、チャンスはいりませんわね」

「チャンスって？」

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、ボロボロの惨めな姿をさらしたくなければ、今ここで謝るといつのなら、許してあげないこともなくつてよ」

「あいにく、そういうのはいらないな」

「そうですか。それなら——」

俺は、目をそらさず、動けるように警戒する。

「お別れですわね！」

避ける。あとからやってくるソニック・ブームに翻弄されながらも、避けていく。が、ところどころ当たっていく。

「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲^{ワルツ}で！」

武器検索をする。あるのは、近接用ブレードと針のみ。まずは、近接用ブレードを展開する。

「中距離射撃型のわたくしに、近距離格闘技装備で挑もうなんて……笑止ですわ！」

「やってやるさ」

激戦が始まった。

side 刻？

「圧倒的不利だな」

「そうだな」

焰が頷く。セシリアは油断はしていない。恐らく

「オルコット嬢が油断するのが先か、一夏が倒れるのが先か……あ
るいは、一時移行を待っているのか」

「針は扱いにくいからな。一時移行だな」

「針はどういった刀なんだ？」

と、箒が尋ねた。

「軽く、美しいそして脆い。だが…」

「奥の手がものすごく厄介だ。まあ、見ればわかるさ」

side 一夏

「はあ、はあ」

打開できない。セシリアの油断を待っているが、なかなか油断しない。

「ほらほら、どうなさいました」

容赦なくブルー・ティアーズで攻撃してくる。

「くそ!!」

闇雲に降ったが当たりはしない。落ち着け、クールダウンだ。

一旦距離を置き、深呼吸をする。よし、近接用ブレードをなおす。

「あら、降参ですか？」

「誰が。使いやすい慣れてない刀から、使い難い慣れた刀に換えるだけだ!!」

右手に、白い鞘の刀を持ち、抜刀する。

「薄刀開眼!!」

目が瑠璃色に変化する。短時間で倒す。ブルー・ティアーズがレーザーを放つ。その攻撃を避ける。針が非常に軽いため、移動も早い。まずはビットに近づき、舞う。

「零の舞・雪月花!!」

ビット三台に雪、月、花と刻みこむ。ビットは音もなく壊れた。

「なっ!!」

残る一台もレーザーを放っていたが、壊す。セシリアに近づく。

「おあいにく様、ブルー・ティアーズは6機あつてよ！」

とミサイルが放たれる。

「一の……うつ」

なんで、5分経ってないのに……強制的に能力（力）の使用が閉ざされた。

ドガアアアン！！

side 第

「一夏つ………！」

さっきまで圧倒していたのに。薄刀・針。実際その刀身は美しかった。そして、それを手にし変化した一夏の瑠璃色の目も……。

「薄刀開眼が切れたか」

「おかしくないか？一夏の許容時間は平均5分。やっと、3分つてところだぞ」

「実戦だ。いつもより、緊張はするものだ。負けたか……」

そんな……。

「——ふん」

織斑先生が鼻を鳴らした。

「機体に救われたな、馬鹿者め」

黒煙がはれ、その中心には、純白の機体があった。真の姿で——

side—夏

設定完成。そう声が聞こえた。唐突に変化した。

ISが光の粒子にはじけて消え、新たに形をなした。工業的な凸凹はきえ、滑らかな曲線とシャープなラインが特徴的などこか中世の鎧を思わせるデザインに変化した。情報を整理し変っていたのは武器もだった。「雪片式型」ああ、まったく。

俺は針をなおした。どの道、薄刀開眼は使えない。雪片式型を構え、宣言する。

「白刀開眼!!」

目が浅葱色に変化する。これ以上、みつともないところは見せたくない。守られるだけではいやだ。俺も、守りたい。

俺は、再びセシリアに接近した。セシリアもライフルで撃ってきたが、あたる気がしない。

「一の舞・月下氷刃」

セシリアの機体を切り裂いた。薄刀開眼に比べれば、ランクは落ちるが十分使える。

『試合終了。勝者——織斑一夏』

決着を告げるブザーが鳴った。

「やったな一夏」

「ああ」

腑に落ちなかった。月下氷刃一撃で倒せた理由が。白刀開眼は線は見えず、ただ勘で切ったようなものだからだ。

「なんで勝てたか分からない顔をしているな。それこそ、単一使用能力じゃないのか？」

あ、言われてみれば。

「そうだな。白式というより、雪片の特殊能力だ。『バリアー無効化攻撃』相手のバリアー残量に関係なく、それを切り裂いて本体に直接ダメージを与えることができる。そうするとどうなる篠ノ之？」

「は、はい。ISの『絶対防御』が発動して、大幅にシールドエネ

ルギーを削ぐことができます」

「なるほど。直にあたる分大ダメージなうえに急所に当たれば尚更だ」

すごいな。白刀開眼＋バリアー無効化攻撃。薄刀開眼より使えるコンボじゃないか

「そううまく話があるわけないだろ一夏」

あれ、心読まれた？

「俺の死翔刀とてエネルギーを使った。一夏の能力も」

「その通りだ。雪片の特殊攻撃にはシールドエネルギーを使う。使い道を誤れば」

「自滅ってわけか」

なるほど。そううまく話は無いらしい。

「まあ、初陣にしては上出来だ。これから精進しろ。一つのことを極める方が、お前には向いているさ。何せ——私の弟だからな」

その後、山田先生からまた電話帳並みの厚さのルールブックをもらい退出した。はあ。

ちなみに白式の待機状態は指輪だ。針と同化したらしいとのこと。

「そう言えば、お前ら。どっちが副代表なんだ？」

「俺だ」

と焰。

「最終的にじゃんけんで決めた」

さよで。

「ま、今日は疲れた。飯を食って寝るに限る」

「だな」

「あ、箒」

「なんだ？」

「明日の放課後からも稽古つけてくれないか？」

強くなりたい。まだまだ、こいつらにはかなわないからな。あれ何で赤くなってるんだ？

そして、何でお前らはニヤニヤしているんだ？

「ま、いやなら――」

「いやとは言っていない！！その何だ。特別に付き合ってやる。いいな！！」

「ああ、よろしく頼む」

「暑いな」

「まったくだ」

お前らさっきから何なんだと思いつつ食堂に向かった。

sideセシリア

「…………ふう」

蛇口を閉じて、シャワーから流れる音を止める。掛けてあったタオルを手にとって、顔にそっと当てた。

（先ほどの試合）

正直悔っていた部分があったかもしれない。事前に彼の友人たちの試合を見て驚いたものだ。とくに最後の激突は凄まじかった。それでも近距離だということ彼のことを甘く見ていた。

「織斑…一夏」

あの瞳を思い出す。最初に見せた瑠璃色、最後に見せたライトブルーの瞳を。あの強い意志の宿った瞳を。父とは逆連想をさせる。父を含め男なんて野蛮だと思っていたのに……

ときめいてしまった。あの人の……織斑一夏（理想の人）のことをもっと知りたい。

「どうしましょう?」

どうやって彼のことを知ればいい? そうだ!!

「あの人たちならまちがいありませんわ!」

死闘を繰り広げた彼の友人たちなら答えてくれるだろう。

side 焰

さて、食事がすんだ。そのまま、俺と刻?は部屋で休んでいた。刻?はシャワーを浴びているときだった。

コンコン

控えめなノックの音がした。さて?誰かな。真庭語（裏）を閉じ、ドアを開いた。

「オルコット嬢?」

何故?とりあえず、部屋に招き入れた。

「して、なに用だ?」

「織斑一夏さんについてですわ」

一夏さん?まさか、

「まった。一つ、問おう。あいつにときめいたのか？」

頷く。あの男は……

「要するに、一夏のことを知りたいのだろう」

「まあ、おおむねそうですね。それと、わたくしのことはセシリアで構いませんわ」

「分かった。まあ、一言で言うならいい奴だ。良くも悪くもな。それがたたって、何人もときめかしてるからな……」

「焰……、シャワーいいぞ……」

失念していた。後ろを見ると半裸の刻？が立っていた。

「って、セシリアさんじゃねえか」

「ああ、セシリア。後ろを向くな。刻？、何か羽織れ」

「夜分遅くに失礼しますわ。鑓さん」

「刻？でいいさ、でなに用だ？」

「一夏のことを聞きたいそうだ」

「一夏の？まあ、一言でいえば良くも悪くもいい奴だな」

「ダブってますわね」

事実なのではない。

「まあ、俺らに根掘り葉掘り聞くよりかは、直で聞いた方がいいぞ。あいつは、細かいことは気にせん奴だ。気軽に話しかけてみればいいさ」

「だな」

「そうですか。ありがとうございます。先週は心ないことを申しして申し訳ありませんでしたわ」

「べつにいいぜ。それと、一夏口説くのは大分難しいぞ。俺の見たところ狙ってる人3人はいるかな」

「まあ、俺らは基本悪人でもない限り一応は平等に応援する。がんばれよ」

そう話を打ち切った。まったく、あの男は。そう思いつつ、激動の一日を終えた。

第四話 激闘（後書き）

感想待ってます。

第五話 妹分（前書き）

全さん、アンケートありがとうございます。出すキャラは後書きにて。

第五話 妹分

side刻？

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。織斑、オルコット、真庭、鑓。ために飛んでみる」

激闘の模擬戦から一週間、四月も下旬になった。俺は早速、森羅を展開する。俺のIS森羅はほかの機体とは違い、機械的部品が少なくかつ総合的に能力が高いのが特徴だ。ツと閑話休題。俺はそこで試してみたいことがあったので実践してみることにした。

「？刀流・七の構え・杜若」

クラウドニングスタートの姿勢をとる。位置に着いて

「よいドン」

加速する。先頭を飛んでいた焰に追う。が、追いつかない。焰の機体、黒鳳は他の機体に比べて速度が速い。さらに、最近編みだしたか「疾風迅雷」という忍法。何でも、通常のどの歩法よりも早いとか。

「杜若か」

「まあな。まだ、これ使って飛ぶのはなれてないがな」

感覚はつかめた。さて、少ししてセシリアが、最後に一夏か

「お前ら、どうやったら、早く飛べるんだ？」

「一夏さん、イメージはしょせんイメージ。自分がやりやすいよい方法を構築する方が建設的ですよ」

「そう言われてもなあ」

「説明してもかまいませんが、長いですわよ。反重力力翼と・・・」

「分かった。説明はしてくれなくていい」

確かに。今の俺たちでは理解できそうにない。

「一夏、開眼のどつちか使えばつかめるんじゃないか？」

「使っている間だけだ。普通に使えないと意味がない」

「難儀だな」

あの試合以降、セシリアは何かと付けて一夏のコーチを買って出た。それに付け加えて、俺や焰にもレクチャーしてくれる。しかし、セシリアの好意には当然というか気付いていない。付き合いが焰より浅い俺が言うのもなんだが、うん、鈍感だ。ツと閑話休題。次の実習は、急降下と完全停止か。なら、

「落花狼藉！！」

「織斑、鑢。誰がグラウンドを破壊していいといった？」

完全停止に失敗した。勢いつけすぎたな。一夏も同様か。とりあえず謝るところ。

「すみません」

「情けないぞ、一夏。昨日私が教えてやっただろう」

箒が一夏を叱る。昨日のつて、あの擬音混じりのレクチャーか。ギロ！！っと睨まれる。なんでわかったんだ？それで満足したのか、一夏に説教をし始めた。うゝゝむ、あいつ絶対尻にしかれるたちだな。次の実習は武装展開か。俺自身が刀なんだがな。武装がない俺は見学だ。一夏は針を、焰は鉋を、セシリアは狙撃銃を展開させる。一瞬でだ。

「流石だな」

そう感嘆する。

「ねえゝゝ、ようよう」

「なんだ、本音？」

「ようようは武装は無いの？」

「ないな。あっても使えないし」

「なんで？」

「鑢の人間は才能がないからな」

「だけど、あの試合はすごかったよ」

「まあな。才能がなかったから？刀流が生まれたんだ」

刀を振るうでなく、刀になる。初代は、何を思ってそう決断したのか？四季崎記紀が絡んでいることは口伝で伝えられているが、それ以上に確かめようがない。うちの先祖は焰の先祖のように、史書は残していない。せいぜい口伝のみだ。現に、真庭語で家の七代目が尾張城を倒壊したと書かれていることには驚愕した。そんなことを考えているうちに、授業が終わる。

「時間だな。今日の授業はここまでだ。織斑、鑢、グラウンド片付けておけよ」

まいったな。一夏が激突した分より、俺が破壊した方がひどい状況だ。穴埋めをしようとする矢先、

「織斑くくくん、鑢くくくん」

クラスの女子が話しかけてきた。

「今日の夕食の後って何か用事ある？ヒマ？」

「特に何もないけど」

「まあ、屋上で鍛錬するくらいだ」

「刻？、焰も言ったけど何か羽織れよ」

スルーする。

「もしよかったら、夕食の後食堂に残ってね」

まあたまにはいいか。そう思いつつ、穴埋め作業に入った。

side 焰

「というわけでっ！織斑君クラス代表及び真庭君副代表決定おめでとう！」

「おめでと〜！」

パン、パンパン。クラッカーが乱射される。さて、夕食後の自由時間の食堂。俺と一夏の就任パーティーが開催された。まあ、賑やかなのは嫌いではない。実家も祝い事があればこんな感じだしな。

「いやー、これでクラス代表選も盛り上がるねえ」

「ほんとほんと」

「ラッキーだったよねー。同じクラスになれて」

「ほんとほんと」

さつきから相槌を打っている女子は二組ではなかったか？ちなみにこの場には三〇人以上いる。まあ、突っ込むまい。一夏の方を見ると篝とセシリアに酌されている。刻？は、布仏さんらと喋っている。ちなみに俺は、黙々と団子を食っている。甘い。

「はいはい。新聞部です。話題の新生、織斑君、真庭君、鑓君に特別インタビューをしに来ました〜!」

「あ、私の名前は黛薫子。よろしくね。新聞部の副部長やってます。はいこれ名刺」

受け取って、その名前を見る。画数が多い。

「ではでは織斑君!クラス代表になった感想を、どうぞ!」

「えーと。まあ、なんというか、がんばります」

「えー。もつといいコメントちょうだいよ。俺に触るとヤケドするぜ、とか!」

どちらかといえば、俺の台詞だろう。

「自分、不器用ですから」

「うわ、前時代的」

高。健か。

「じゃ、まあ、適当にねつ造しておくからいいとして、あの白い刀の名前教えてくれる?」

「太刀ですか。それとも

「日本刀の方」

「薄刀・針ですが」

「針ねえ。ありがと、次に真庭君いいかな？」

「かまいませんが」

「じゃ、副代表になつた感想を」

ふむ。

「善処します」

「真庭君ももっと何かいいコメント言つてよ。ま、いつか、こっちもねつ造しといて、では質問です。真庭君の忍法は全部で何個あるの？」

「三つだが」

この発言に会場がどよめく。

「あれ、試合じゃ三つ以上使つてたよね」

「俺が使える忍法は三つですよ。一つ目に鬼火。二つ目に演武。簡単に言うとはかの忍法をまねることができる忍法だ。俺が無理だとは思わない限りな。骨肉細工とか絶対無理だし」

「骨肉細工って？」

「姿、形を変える忍法だ。一度やろうとして、1週間筋肉痛になつて以来やってませんがね。俺からはこれ以上話す気はない」

「えー。三つ目の忍法は」

「それは我が嫌いな忍法だからな。使う気もさらさらない」

「じゃ、最後に。試合に使っていたあの刀の銘は？」

「絶刀・鉋だが」

「鉋ね、じゃ、鑓君に質問。剣士手名乗ってたけど肝心の剣はどこにあるの？」

「ああ、否定する。？刀流は刀を使わない剣法だ。刀を使えば刀自身に振り回されるからな」

「へえ〜、ま、うまくまとめといて、最後にセシリアちゃんもコメントちょうだい」

「わたくし、こういったコメントはあまり好きではありませんが、仕方ないですわね」

とか何とかいいつつ満更ではなさそうだな。少しばかり飲み過ぎたか、断りを入れトイレに向かった。なにせ、元々女子校だったために男子トイレというのは来客用のみしかないというのが現状だ。こればかりは不便ではある。用を終え、再び戻ろうとした矢先、懐かしい顔があった。

「鈴」

「へ、嘘。ほ、焰！！」

何を驚いているかわからんが出会ったのは1年前、転校していった妹分の鈴だった。

「久しぶりだな。しかし、何で今頃？」

「ちょ、ちよつとした手違いでね。入学遅れて、転校って形よ。ねえ、焰、悪いんだけど受付ってどこにあるの？」

「ここからだと少々かかるな。ついてこい」

「あ、ありがとう」

「しかし、時がたつのは早いものだな。少しばかり見違えたぞ」

「それって、いい意味で？」

「まあな。ところで鈴、転校ということは国代表か？」

「そうよ。ところでなんであんたはIS使えるようになったのよ？」

「色々あってな。一言でいえば、こいつの影響かもしれん」

そう言つて鉋を出した。

「家の蔵から、ISのコアらしきものが見つかってな、そのうちの一つが俺に反応したというわけだ」

「それがその刀？」

「まあな。銘は鉋。過去の四季崎記紀が作ったとされる完成形変体

刀の銘をもつものだ。と、着いたぞ」

話しこんでいたらいつの間にかついたようだ。手続きが長引きそうなので今日は分かれることにした。

「鈴、また明日な」

「そうね。また明日」

なぜか、顔を赤く染めていたがまあいい。そのまま食堂へと向かう。

「真庭君、遅いよ〜」

着くなりそう言われた。はて

「真庭君も早く早く」

ああ、集合写真か。

「それじゃあ撮るよー。35×51÷24は？」

「え？えつと・・・2？」

「ぶー、74・375でした！」

なんだそれは、パシヤリとシャッターが切られる。まあいいか。就任パーティーは10時まで続いた。刻？は少し鍛錬することとで屋上にでている。毎度のことながら半裸だ。止めようとしたが、一部女子から反発をくらった。何故？と思いながら、真庭語（裏）読んでいる。既に読んだ真庭語より、際立った内容だ。真庭語（裏）

の内容は大きく分けて3部だ。一つ目は初代について。二つ目は大乱について。三つ目は変体刀をめぐる争いについて。目を引いたのは大乱についてだ。飛騨鷹比等が起こした大乱。尾張時代の天下太平の折に起きた戦争。起こした理由も詳しくは分かっていない。その折りで飛騨勢に加算した真庭忍軍毒組。異質な真庭の中でもさらに異形な集団。長年真庭家でも分からなかったことだが大乱で生き残った唯一の毒鶴が……

「焰!!」

集中しすぎたか、突然の声に驚く。見れば寝間着に着換えた刻?がいた。

「何驚いてんだ?」

「すまん、集中し過ぎたようだ」

「真庭語(裏)か」

「まあな。さて、シャワー浴びて寝るか」

そう言ってシャワーを浴び、床に着いた。その日、何故だろうか。久々あった妹分の夢を見た。

side 一夏

「織斑君、おはよー。ねえ、転校性の噂聞いた?」

「転校生?今の時期に?」

「国代表なのか？」

と刻？。

「そう。何でも中国代表候補生なんだってさ」

「「ふーん」」

ちなみに焰はまだ来ていない。また自販で甘いもんでも飲んでるの
だろう。

「あら、わたくしの存在を今更ながら危ぶんでの転入かしら」

一組のイギリス代表候補生、セシリア・オルコット。今朝もまた、
腰に手を当てたポーズが似合う。

「このクラスに転入してくるのではないのだろう？騒ぐほどのこと
でもあるまい」

あれ、さっき自分の席（窓側）に行ったはずの方気が、気がつけば
そばにいた。

「それにしても、どんな奴なんだろうな？」

「気になるのか刻？？」

「まあな。それよか、一夏。来月のクラス対抗戦の優勝賞品、学食
のデザート半年間のフリーパスって聞いたか」

「ああ。……………ああ!!」

「どうしました、一夏さん？」

「どうした、一夏？」

「あ、いや、焰が甘党だっていうこと知ってるよな」

「ああ、ご飯に小豆をかけて食うやつだからな」

「最近はしなくなったがな。まいったな、負けたらただじゃすまないな」

よし、とにかく頑張ろう。放課後さっそく練習開始だ。

「その意気ですわ、一夏さん。クラス対抗戦に向けて、より実践的な訓練をいたしましょう。ああ、相手ならこのわたくし、セシリア・オルコットが務めさせていただきますわ」

「ま、俺も手伝うぞ。とはいえ、専用機持ちは1組と4組だけじゃなかったか？」

「そうだよー。余裕だよ」

「——その情報、古いよ」

ん？教室の入り口からふと声が聞こえた。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないんだから」

「鈴？……お前、鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

「なに、格好つけてるんだ？すげえ、似合わないぞ」

「んなつ……！？なんてこと言うのよあんたは！」

うん、やっぱ鈴だ。こういう時は

「ナイスタイミング」

「なんだいきなり？」

鈴と反対側のドアから焰が入ってきた。手には、いちごおでん！？

「てか、何だそれ、焰？」

「ああ、新作が出たからな。試しに買ってみたがはずれだ。おでんにイチゴは合わん。と、鈴か、このクラスに転入か？」

「二組らしいぞ」

「って焰、あんた朝から何飲んでんのよ！..」

「イチゴおでんだが」

「そうじゃなくて、甘いもの取り過ぎよ。もっと節制しなさ……」

「おい」

「なによ!？」

バシッ!? 気返した鈴に痛烈な出席簿打撃が入った。――鬼教官登場である。

「もうSHRの時間だ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん・・・」

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」

「す、すみません。焔、昼休み来るからね
そう言っただッシュする。変ってないな。」

「そして真庭、さっさと飲み終われ」

まだ飲んでたのか!?!しかし、今年はこう知り合いと再会することが多いな。

「一夏、さきほどの女子との関係なのだが」

「というより焔さんとの関係といった方が正しいかも知れませんが・
・・・」

昼休みになってすぐに箒とセシリアに囲まれた。

「まあ、話なら飯食いながら聞くから。焰、刻？、いいか？」

「ああ」

「焰、気になったんだがイチゴおでん以外になんか変わったものは試したのか？」

「ああ、練乳ソーダ、まあまあだったな。蜂蜜コーラ、甘すぎる。グレープフルーツと伊予柑のミックスジュース、なかなかいけた。その他は……」

「ああ、もういい。聞いてるだけで口のなか甘くなってきたぜ」

「というより、本気で節制しているのか？」

「そうですわ」

「心配するな。忍法・鬼火で異常にカロリー食ってるから」

「カロリー消費だったの、忍法って？」

そんな話をしているうちに学食へ到着。案の定、鈴は入り口に立っていた。朝みたいになかった。こつけた立ち方じゃなくて、昔みたいな鈴らしい仁王立ちで、だ。

「よ、とりあえず中に入ろつぜ。積もる話は昼飯食いながらで」

「あ、ち、ちょっと一夏！ 勝手に決めるなあっ！」

最近学習したんだ。あまり立ち話すると俺にとってよろしくない状況が絶対に展開されるって。

だから、俺はとつと中に避難する。自分から好んで苦行はしたくないからな。

「それにしても久しぶりだな鈴。ちょうど一年ぶりになるのか。元気にしてたか」

「まあね。昨日は、ありがとね、焰」

「気にするな」

「なんだ、焰。鈴が転校したこと知らなかったんじゃないのか？」

「いや、昨日会った。2組だということは今日知った」

「焰、その娘とはどんな関係なんだ。まさか、付き合ってるとかと噂が聞いた。」

「べ、べべ、別に私は付き合ってるわけじゃ……」

「落ちつけ、鈴。まあ、妹分というべきか……何故睨んでいる？」

「なんでもないわよっ!」

哀れ、鈴。というより、普段人のことを鈍感扱いしているがお前も鈍感じゃないのか？

「妹分？」

「幼馴染よ！！」

「あーそうだな。箒が引つ越したのは小4のだったろ？鈴が転校してきたのは小5の頭だよ。で、中2の終わりに国に帰ったから、会うのは1年ちよつとぶりだよな」

よく考えると、箒も鈴も刻？も入れ違いなんだよな。

「で、こつちが箒。ほら、前に話したろ？小学校からの幼馴染で、俺が通つてた剣道場の娘。で、こつちのでかいのが刻？。鈴が引つ越した後にやってきた」

「ふうん、そうなんだ。これからよろしくね」

「ああ、こちらこそ」

「よろしくな」

「つて、箒だっけ。だいじょうぶよ。私はあなたの障害にならないから」

「ああ、わざわざすまないな」

「なんの障害だ？」

「焰さん、それを聞くのは野暮ってことよ。わたくしはイギリス代表候補生のセシリア・オルコットですわ、同じ代表候補生として、

よろしく願いしますわ」

「ええ、こちらこそよろしく」

セシリアに自己紹介した。

「なあ、鈴。親父さん元気にしてるか？まあ、あの人こそ病気とは無縁だよな」

「あ……。うん、元気——だと思う」

うん？急に鈴の表情に陰りがさした。同時に焰も細い目をさらに細めた。

「まあ、あれだ。これから3年ここに入るのだろう。よろしく頼むな、鈴」

「こつちこそ、焰」

「なあ、一夏」

「鳳さんは」

「焰のことが」

鈴の様子を見て気がついたのだろう。小声で三人が聞いてきた。

「そうだよ。小5から慕われてるんだが、妹分としてみてるんだよ。あいつ。まったく、人のこと鈍感だと言ってるけど、どっちが鈍いんだって話だ、ってなんで睨んでんだお前ら」

「いや、なあ」

「一夏さんも人のこと言えませんか」

「同じく」

何なんだよお前ら。

第五話 妹分（後書き）

真庭花梨 まにわかりん 忍び名 真庭火鼠

使用忍法 足輕 鼠火（鼠花火のような火を放つ）

外見は化物語の阿良々木火憐ちゃん（ショートカット）
年齢は、15歳 聖マリアンヌ女学院に通う。蘭とは友人。焰LO
VE（Likeではない）

真庭洋子 まにわようこ 忍び名真庭銀狐

使用忍法 口先八兆（常時発動型。弁舌上手）
花梨の母。鎌太郎の上司。真庭家の顧問弁護士。

以上を2巻の最初のほうに出せるように頑張ります。感想、質問待
ってます。

第六話 歴史は再び（前書き）

感想、質問お願いします。

今回は独自設定がかなり入ってます。

第六話 歴史は再び

side 焰

放課後第三アリーナ。いつものように訓練を始めるが、先に先客がいた。

「篠ノ之さん！？ど、どうしてここにいますの！？」

そう、いたのは打鉄を装備した箒だった。

「どうしても何も、一夏に頼まれたからだ」

愛されてるな、一夏。さて馬に蹴られて死にたくはないので俺と刻？はそうそうに離れる。今日は試してみたいことがある。鉋を構え、

「忍法・鬼火」

火球をまとわせる。が、

「うまくいかないな」

纏わせたはいいが数秒で消えてしまう。

「ま、練習あるのみか」

刻？は、奥義の練習中だ。以前よりきれが上がっている。一夏はなぜか箒とセシリアと2対1で戦っている。頑張れ、一夏。骨は拾ってやる。

訓練が終わり、夕食を食べ終え、部屋に戻った。刻？は今日は鍛錬しないのか、読書中だ。タイトルは「化物語」どうやら、のほほんさん（布仏さん 一夏命名）に借りたらしい。俺も真庭語（裏）を読んでいたが、用を足すため部屋を出る。わざわざ出るのが不便だと思う今日このごろ。部屋に戻ると、何か騒ぎ声が聞こえる。何なんだと思い開けると

「というわけだから、部屋代わって」

「いや、難しいと思うぞ、それ」

部屋に鈴がいた。

「どうした、鈴？」

「ちょっと、焰は黙ってて。大事な話だから。悪い話じゃないですよ。私のルームメイトかわいいし。刻？もむさ苦しいのはいやですよ」

「むさ苦しくは無いが、ここの寮長織斑先生だぞ」

「え」

「いや、織斑先生だって。まあ、あれだ。俺、ちょっとこの本、本音に返しにいくわ」

そう言って刻？が行った。さて、

「あー」

「なんでもない。今の忘れて」

まあいいか。適当に備えてあつた緑茶を入れる。

「まあ、あれだ。昼も言ったが3年はここにいるんだよな」

「そうね」

「もしよかったら、真希姉の結婚式出席しないか？」

「真希さんの？もしかして、蝶次郎さんと？」

「まあな、拳式は今年の秋にだ」

「うん。行くわ、真希さんには色々よくしてもらったし」

「そう言えば千冬さん、浮いた話とかないのかな？」

「どうだろ、あの性格きつそうだし」

「だろうな。美人なのにもつたいない」

「そついえば、白夜さんは今何してんの？」

「あー、白兄は束さんの護衛？」

「なんで疑問符？束さんって篠ノ之束博士？」

「ああ。箒の姉さんだ。ま、箒はよく思っていないようだ」

事実、ISの進出により箒はそのせいで各地を転校するそうになったそうだ。

「まあ、分かんないこともないかも」

「箒にはあんましこの事触れんなよ」

「でもよく、白夜さん、篠ノ之博士の護衛なんて、SPみたいな？」

「まあな。唯一、真庭家で忍者ばい仕事してる」

「そう言えば、白夜さんの忍法ってどんななの？」

「逆鱗探し。名称しかわからない。あのしゃべり方も忍法の影響だとか」

事実、白兄のしゃべり方は奇妙に聞こえる。

「ま、拳式の日程決まったらすぐ教える。というより、遅いな、刻？」

「（気使ってんのかしら）刻？とはどう知り合ったの？」

「あいつか。まあ、今の様子じゃわからんが1年前のこの時期は荒れに荒ててな。寄らば切るって感じだった。なれそめだったな。ふとしたことで一夏と喧嘩してな。俺も巻き込まれた感じになった。まあ、結果は負けたがな。ちょうど通りがかった蝶兄さんにも吹っかけてきてな、まあ、蝶兄さんが勝ったがな」

「へえ〜」

「ま、そのあと道場で説教されてな。なし崩し的に親友になったってわけだ」

「そうなんだ」

そのときドアが開いた。

「遅かったな、刻？」

「まあな。返したついで本音の部屋で「化物語」のマヨイまいまいの最終話を見てきたからな」

「……そうか。そろそろ寝るか」

「そう、今日は帰るね」

「また、明日な、鈴」

「また明日、焰」

そう言っつて鈴は行つた。

「なんだ、刻？」

「いや、な」

変な奴めと思いつつその日は就寝した。

それから時は立ち五月、たまに鈴が部屋に遊びに来る以外は変哲もなく過ぎていった。俺の新技「鬼火式・絶刀」はまあまあうまくいった感じか。そしてクラス対抗戦当日。

「焰」

「なんだ、刻??」

「どうして、両頬にもみじが舞ってる。まだ5月だぞ」

「いや、なあ。鈴に応援を頼まれたが、フリーパスのこと持ちだしたら急に」

「もういい。話さなくて」

そうなのだ。鈴ではなく一夏を応援すると言ったらなぜかはたかれた。

「ほむほむ、りんりんにちゃんと謝らなきゃ」

「しかしな、原因がわからん」

そう言うと呆れた顔で俺を見る二人。

「案外自分のことはよくわからないもんだな」

「そっだね〜」

何を言う。少なくとも、あの鈍感（一夏）よりは自分のことは分かるぞ。

side 一夏

「へ、くしゅん!!」

今なんか、すごい馬鹿にされた感じだ。誰だ、噂をした奴はとか思いつつ、アリーナに向かったが、ツインタールを逆立てた鬼がいた。

「ど、どうしたんだ。鈴」

「あ!!」

あ、やばいかも。目にハイライトがはいってないじゃなくて

「あ、いや、どうしたんですか。鳳さん」

「別になんでもないわ。ただ、焔をどうやって痛めつけようか考えているだけよ」

あー、わかった。恐らく焔が（フリーパスのため）俺を応援していることに腹を立てているらしい。

「鈴」

「なによ」

「憂さ晴らしや八つ当たりで挑めば、負けるぞ」

「!?!」

「こっちは真剣なんだ。焰のことは後回しにしてくれ」

「そうね、悪かったわ、一夏。全力で倒すからね」

「やってみろ、刀の錆にしてくれる」

「何その言い回し?」

「ああ、刻?の決め台詞に影響されてな。痛いかな?」

「いいんじゃない」

「そうか」

そう言い終わった瞬間にブザーが鳴った。さて、やるか。

先手、必勝。まず、雪片を装備し、仕掛ける。がかわされる。

同時に鈴が持つ青龍刀が襲いかかる。ガキン、何とか受け止めたがいかにせん力の差が激しい。衝撃で跳ね返される。

「ちっ」

俺は何とか以前ならった3次元躍動旋回で体勢を立て直し、距離を取ろうとした。

「——甘い!!」

パカッと鈴の方のアーマーがスライドして開く。中心の球体が光った瞬間、俺は目に見えない衝撃に「殴り」飛ばされた。

「今のはジャブだからね」

にやりと不敵な笑みを浮かべる。ジャブの後は、ストレートと相場が決まっている。あまり自信は無いが雪片を構える。再び光った瞬間に「白刀開眼」する。そして切る。

ドン!!

雪片に衝撃が走ったが、切れたようだ。

「な、なによその眼」

「とっておきだ。行くぞ」

再び仕掛ける。急加速急停止の訓練の際にひらめいた瞬間加速の際にひらめいた移動法「爆縮地」を使う。

「零の舞・雪月花」

切りこむが、雪月はふさがれた。

「やるな」

「一年間で散々詰め込まれたんだから」

そついうなり2刀の青龍刀で襲いかかる。これを防ぐ。

ズドオオオオン！！

突然大きな衝撃がアリーナ全体に走る。ステージ中央を見るともくもくと煙が上がる。

「何が起こってる？」

混乱する。駄目だ。一度深呼吸をする。よし、

「一夏、試合は中止よ！すぐにピットに戻って」

鈴からプライベート・チャンネルが飛んだ。

「ああ、わかつ・・・」

ハイパーセンサーが緊急通告を行ってきた。

——ステージ中央に熱源。所属不明のISと断定。ロックされています。

まずい。

ビームが放たれる。そして姿を現したそいつは異形だった。

「なんだよ、あれ？」

深い灰色をしたそのISは手が異常に長く、つま先よりも下まで伸びている。首がなく、型と頭が一体化した『全身装甲』だった。何より目を奪われたのは、バチバチと電気を飛ばす背中に刺さった日本刀である。

side 刻？

「なんだありゃ？」

突然現れたIS。それだけならまだしも、あの異形な日本刀にだれもが疑問を持った。

「悪刀・鐔と特徴は似ているな」

「鐔？」

「真庭語いわく持ち主に強力な活性力を与えると書かれてある。クナイの形って書かれてあったがな」

アラームがけたたましく鳴る。

「とにかく避難するか」

「そうだな。本音、気をつける」

「うん」

行こうとした矢先

「なんで扉があかないの？」

そう扉がロックされていたのだ。中には泣いている娘がいる。まずいな、このままだとパニックになる。よし、やるか。

「ちょっとどいてくれ」

「鑓君」

俺は手甲を出しながら言った。

「今から、この扉壊すから、離れてくれ」

群がっていた女子が離れる。

「？刀流奥義・飛花落葉」

全力で放つ。衝撃を受けた扉は後方に飛び去った。

「さて、落ち着いて避難してくれ」

俺は促す。

「ようよう」

「どうした本音？」

「ほむほむが急に怖い顔して、どっか行っちゃった」

何が起きているんだ？

side 焰

気配を感じた。何者かは分からないがいやな予感がする。我は急いでアリーナを走る。人のいない廊下を走って見つけた。袖なしの忍び服を着て、蟻を模倣した帽子をかぶった左手が刀の人間を。まぢがえない。あれは

「真庭忍軍毒組」

それに反応したのか、そいつは言った。

「いかにも、よく気がついたな」

「ここになに用だ。まさかあのIS!!」

「察しの通りさ。さて、流石にIS相手に無茶はできないからな。引かせてもらおう」

そう言うなり左手の刀を振る。すると空間が現れた。

「待て!!」

「慌てなさんな。いずれまた会おう。真庭鳳凰いやxx」

！！何故名乗ってもいないのに。驚いている隙を突かれそいつは空間に入り消えた。
何が起きているのだ。「……………」なぜ「……………」むら「我のもう一つの

「焰！！」

はたかれる。

「刻??」

「それ以外誰に見えるんだ?……………」何が起きた?」

「……………」すまん。ちょっと混乱している。あとで話す」

「そっか。とりあえず、一夏と鈴を助けに行こうぜ。苦戦してる」

「分かった。行こう」

考えることは後でもできる。ともかく行くか。刻?とともに走るその途中、

「箒」

ピットで観戦していた箒に鉢合せた。

「非常口は向こうだぞ」

「まさか」

「……………」

まったく、恋は盲目とはよくは言っがこの場合は感心しない。

「俺らが救援に行く。避難してくれ」

「………すまない。一夏を頼む」

「そう、うなだれるな。まったく、ここまで思われるあいつは幸せ者だな」

「だな」

「か、からかうな」

「冗談はここまでにするか。行くぞ、刻？」

「ああ。気をつけろよ」

箒と別れる。さて、急ぎますか。

side 一夏

「ちっ、近づけん」

全身装甲のISは絶え間なく、ビーム砲を打ってくる。たまに食らわせてもダメージの反応がない。針を使うか。できればそれは避け

たい。こちら、もう何分戦っている分からない状況だ。開眼して、即気絶するかもしれないリスクがある。まずいな。

「あゝゝもう、何で効かないのよ」

俺が知るかと言いたいが、恐らく原因はあの刀だろう。というより中に人はいるのだろうか。動きも機械じみているうえ、あの背中に刺さった日本刀。

「あれ、人が乗っているのか？」

「はあ、人が乗ってなかったらISは動かないでしょ」

「普通はな。だけど、例外はある」

俺がいい例だ。

「考えてみる。刀がグッサリ刺さっている時点で動ける人間なんていない。試す価値はある」

「どうすんのよ？」

「鈴、援護頼む」

俺は雪片をしまい、針を構える。チャンスは一回、

「薄刀開眼！！」

すぐにけりをつける。爆縮地を使い、ビームを避け、舞う。

「一の舞、月下氷刃」

決まったかに見えたが、浅い。全力でその場から離脱する。離脱し終わると、一気に脱力感に襲われる。開眼をやめる。幾分ましにはなったが、もう使えないだろう。

「決まったの？」

「いや、浅い」

敵は少し止まっていたが、すぐにこっちに攻撃を仕掛ける。

「やっぱ、あの刀か」

どういう原理かは分からないが、恐らくダメージ0の原因はあの刀にあると思う。

「鈴、後エネルギーはどのくらい残ってる？」

「180ってところね。一夏は？」

「120。無茶はできないな」

さあ、手詰まりだ。

「諦めるのは――」

まだはやいぞつと

「焰――！」

「刻？」

「さて、第二回戦と行きますか」

「だな」

軽口を入れ、二人が参戦した。

side刻？

ざっと一夏から状況を聞きだした。やっぱりな、

「壊されて壊れないからと言って、壊し続けて壊れないわけがないだろう」

「そうだな」

「援護頼む」

俺は、速攻で近づき

「雛罌粟から沈丁花まで打撃技混成接続」

こいつをまともに喰らえば、272回死ぬと紫苑婆は言っていたな。喰らい終わった敵は、動きを止めた。背中に刺さった刀から見るみると電気をとっているように見えたが、それも尽きたのか刀は砕け散った。

「一気に決めるぞ!!」

ここで決めるしかない。俺達は敵に向かって奥義を放つ。

「? 刀流奥義・鏡花水月!!」

「報復絶刀!!」

「白刀開眼・雪月花!!」

「衝撃砲・最大出力!!」

これら奥義をくらったが最後、敵は沈黙した。

「やったか?」

「それを言っな、一夏。やってない証拠になるぞ」

「何の話だよ?」

敵IS再起動――

ハイパーセンサーからの情報が知らされる。

「だから言っただじゃないか」

「知らねーよ」

刹那、客席からブルー・ティアーズの4起動時狙撃が敵ISを打ち抜く。

センサーも沈黙を確認したようだ。

「やっと終わったか」

俺はそう嘆息した。

side 焰

事件が終わり、いくつかの注意と誓約書で今回の件は特にとがめなしになった。一夏は打撲がひどいということで保健室に。俺と刻は部屋に戻った。

「焰、何があったんだ」

「さっそくか。ま、引き延ばしたところで、お前の目は誤魔化せんしな。さて、語ろう」

一呼吸入れる。

「真庭忍軍毒組がいた」

「毒組？」

「真庭忍軍が12頭領4組に分かれていることは知っているだろう。かつてもう1組存在した組があった」

「それが毒組か」

「しかり。組員は体のどこかが刀で構成されていると裏には書いてあった」

「それでわかったのか」

「ああ。その前に――」

我は扉を開ける。そこにいたのは

「鈴か」

「ほ、焰」

「聞いていたのか？」

こくりと頷く。

「はいれ」

「いいの？」

「断つても聞くだろ」

頷く。

鈴も入れ、再び語る。

「途中でいやな気配辿ってみて見つけた奴は左手が刀だった。どう

やら、あのISを手引きした後だったらしい。空間操る忍法でばれずに侵入したんだろう」

「どんなチートよ!!」

「そうでもないな。少なくとも今回は、IS相手に戦闘は試みなかった。が、実力は不明だ」

「しかし、何で今頃になって現れたのかねえ？」

「不明だ。毒組が最後に登場したのは、尾張時代の中期の大乱だ」

「それって確か飛騨鷹比等が起こしたやつでしょ」

「ああ。毒組は真庭本軍を裏切って、飛騨勢に加算した。ま、これで真庭忍軍が結構力落とす原因になったがな。毒組自体は5人で構成されてたが4人は大乱の英雄、鑓六枝によって討たれた」

「鑓六枝、鑓？」

「俺のご先祖だ」

「へえ〜。あ、でも焔、最終的に一人残ってるんですよ。だったからそいつの子孫が――」

「いや、それは無い」

「あれ、なんで？」

「最後に残った一人。真庭毒鶴後の鳳凰は完成系変体刀をめぐる争

いで死んでいる。結婚もせずにな」

沈黙する。

「無論、出奔したのも少なくとも無いがこれといって断定できるものはない」

「先生たちに言ったの？」

「言いたいところだが言ったところで迷宮入りだ。真庭の問題は真庭でけりをつける」

「ま、なんにせよ、アクション待ちか」

「そうだな、すまん、刻？、鈴。こんな話をして」

「気にすんな。しかし、俺らの刀といい、真庭忍軍といい共通点が

「四季崎記紀」

鈴の一言にハツとした。

「焰、前に話してたよね。四季崎記紀が作った変体刀をめぐって真庭忍軍は滅んだって」

「まあな。わが先祖人鳥が唯一生き残って真庭を再興させたが、この国はまだ四季崎の思惑のうちか」

「そうかもしれんな。ま、憶測の一つか」

「そうね。ん〜、なんかいろいろあって疲れちゃった」

「そうだな。結局対抗戦は中止。さらば、フリーパス」

そう言うとき鈴の顔が不機嫌になる。やれやれ、

「冗談だ。機嫌直せ」

「ん〜、じゃ買い物付き合って」

「わかった。そこで何かおごろう」

「本当！！約束だからね」

そう言うなり、鈴は部屋を出て行った。

「お熱いね〜」

「さあな」

とにかく色々あって疲れた。今日は寝るに限る。

side??

「あのISの解析結果が出ました」

「ああ——どうだった」

「はい。あれは——無人機です」

「どのような方法で動いていたかは不明です。織斑君達の攻撃で機能中枢がほとんど壊されていて修復不可能です」

「コアはどうだった？」

「…それが、登録されていないコアでした」

「あの刀については」

「それも不明です。ただ言えることは——

「なんだ？」

「現在の技術を駆使しても作れないことが分かりました」

「やはりな」

「何か心あたりがあるのですか？」

「いや、ない。山田先生、ご苦労だった。もう戻っていいぞ。あとの処理は私がする」

「そして、いつまでそこにいるのだ、白夜？」

「荒、場した？」

（あら、ばれた？）

「あの刀は」

「吁、折れが追手いた素志木の死技だ」

（ああ、俺が追っていた組織の仕業だ）

「そうか」

再び、巡ります。刀をめぐる物語がくるくるからから回っていきます。

第六話 歴史は再び（後書き）

真庭道場！！（f a t eのタイガー道場風に）

師匠（蝶次郎）「さて、第2話以降出番のない俺こと蝶次郎と」

弟子一号（海）「弟子役の海が進行するコーナーです。なお、弟子役は毎回変わります」

師匠「さて、今回の話で一巻が終わるが、出てきたな毒組」

弟子一号「そうですね。作者も刀語零話を読んでいないから、w i k iやその他で補完しているようです」

師匠「大丈夫なのか？」

弟子一号「まあ、神のみぞ知るってところですかね。ところで師匠聞きたいのですが、真希姉さんに尻を敷かれているのですか？」

師匠「さあ、どうだろう？（口笛を吹きあさつての方向をみる）」

弟子一号「原作通りと。次回からは、途中でちらつと出てきたあの人が出てきます。あの人出す時点で原作と矛盾するのですが」

師匠「元々、原作矛盾で始まってから問題ないだろ」

弟子一号「そうですね。マジ人鳥可愛いのに（刀語を読みながら）」

師匠「じゃ、今回は

弟子一号「これにて終了」

幕間 1（前書き）

テストやらなんやらで投稿が遅れました。

幕間 1

side 焰

さて、切り上げるか。屋上で鉦を振るのをやめ、部屋に戻ろうかと思っただが、

「今日は月がきれいだな」

そんな理由で屋上にあつた自販でリンゴサイダーを買い、飲む。

ああ、本当に月がきれいだ。

「そう思っわないか、仮面の？」

後ろには洋装の一昔前の欧州貴族がつけていた仮面をつけた男がいた。

「不^{おどろきをきんじえず}驚禁、まさか気付かれるとはな」

「何者だ？関係者以外は立ち入り禁止だぞ」

「不^{こたえず}答」

「そつか、なら殺るしかないよなあ！！」

棒状手裏剣を投擲する。

「甘い」

相手も投げ返し相殺する。近接するが、姿を消す。

「相生拳法・背弄拳」

後ろからの声にぞつとするが技を避ける。相生？まさか

「相生忍軍の末裔か」

「ひていせず不否、もつとも壊滅前に離脱した者の末裔だ」

「あんたには恨みは無いが、ここで会ったのも何かの因縁。いくぞ
！！」

そう言い放ち、棒状手裏剣を構え断罪円を仕掛ける。

「相生忍法・生殺し」

ガッ、ガッ、ガッ、ガッ、ガキ、ガキン

剣戟が鳴り響く。まさかこれが、隙を作り、一旦距離をとる。

「断罪円の原型か」

「ひていせず不否」

この時俺はISを展開して戦うことは考えていなかった。ただ、単に戦いたい。

「いくぞ、仮面野郎」

「はい」

再び激闘になろうとした瞬間、

「そこまでだ!!」

いつの間にいたのか、千冬さんが制止をかけた。

我には刻？が、仮面野郎には上級生だろうか、水色の髪先輩が手を握った。

「さて、その仮面の。素性を明かせ」

「答え――」

「左近、いいわ」

「・・・右近左近^{うぢかみこ}だ。更識家の執事だ」

「更識、どういうことだ？」

「どうも何も、学校でできない実家の仕事の報告を逐一ここまで報告させていただけですよ」

「はあ、分かった。そういうことは手続きを踏め」

「急な仕事もあるんで」

「それでもだ」

「は〜い」

「さて、何でお前たちはあの場で暴れていた？」

「その仮面が侵入者だと思ったので」

「売った喧嘩を買ったまでだ」

一触即発

「やめなさい、左近」

「落ちつけ、焰てかなんで、喧嘩腰？」

「単純明快だ。相生だ」

「相生？」

「相生忍軍。かつて真庭忍軍と双壁をなした忍軍よ」

先輩が答える。

「ま、今は更識家の執事だけだね、左近これからは彼との私闘は禁ずるわ」

「御意」

その後千冬さんから説教を受け解散となったが、

「ちょっと待ってくださいませんか」

二人を呼び止め、部屋の前まで来てもらい、ISコアを持ち出す。思ったとおり、炎刀・銃が反応した。左近が触れると、

「主、認証しました」

その声と同時に手に自動式拳銃と回転式拳銃が握られていた。

「やっぱりな」

「あら、よかったの？」

「良いも何も真庭家の方針は反応した人が所有者だと決めているんで」

「感謝する」

「言っておくが相生は嫌いだ。直接的な先祖ではないにしろわが先祖に対する屈辱は忘れはしない」

「覚えておこう」

そこで別れた。この時、あの先輩に4ヶ月後に色々ひっかきまわされることは予想もなかった。

「で、それで寝不足なわけ？」

「ああ」

鈴との約束、買い物に付き合っている。

「それにしても珍しいわね。焰、あんまし人嫌いしないのに」

「まあな。生理的に鶴の次に嫌いなんだ、相生は。先祖が死にかけ、真庭の滅亡間近の原因も相生だ」

「そう。あ、あれかわいい」

と興味をなくしたか、ウィンドウショッピングに興じる。まあ、たまにはいいかと思いつつ鈴を眺めていた。

午後3時、何か軽いものでもということので@クルーズでパフェを頼む。

「ほ、焰。あんた何頼んでんのよ？」

「なにつて、メテオブラックチョコパフェ2011だが」

「ちょっとは節制なさいよ」

「最近気がついたんだが、鬼火でカロリー消費できるからな、なんかどうでもよくなってきた」

「良くないわ！！まったく、次から気をつけなさいよ」

「そうする」

黙々とパフェを食べる。と後ろの席から

「じゃ、反省会だ。俺ら私設・楽器を弾けるようになりたい同好会のこの前のライブ、最初は盛り上がったが最後の方になるとお通夜のようになった。何故だ！！」

「思うに、原因は横司のあれのせいだと思うのですが」

「なに、俺のどこがいけないって言うんだ、真庭」

真庭？

「ほら、輝いた〜夢をつかむんだ〜のところで、輝いた〜トウメをつかむんだ〜 なんですか、トウメって？」

「何でもないよ、ただ、感じだして歌ったまでだよ」

「そんな変な感じを出さないください。はっきり言うと不愉快です」

「俺もそう思う」

「僕も」

「なんだよ、みんなして！！俺は真庭のせいだと思っぞ！！」

まさか

「何を言うのです。私のどこが悪いと言うのですか！！」

「ああ、お前一曲目のイントロからいきなり歯で弾き始めたじゃねえか」

「別にいいじゃないですか」

「良くないわ！！それでびっくりして、
ウオ、めをつかむうんだ　て、歌っちまったよ」

「あなたの場合、ちゃんとしてもトウメになるでしょーが！！」

「俺も海のパフォーマンスは良くないと思う」

「僕も」

「何ですか、みんなして、それにライブが盛り下がるのは私のせい
だけじゃありませんよ。弾、あなたにだって責任はありますよ」

弾？

「なに、どこが悪いっていうんだよ」

「盛り上げるためにクラッカー鳴らして、3発中3発が不発だった

でしょ。あれでわずかに残っていた盛り上がりも急降下でしたよ」

「く、反論できねえ」

「なにやってんのよ。弾、海」

鈴が横槍を入れる。

「り、鈴！お前、どうしてここに？」

「おや、鈴じゃありませんか。焰からIS学園に転校したと聞いていましたが」

「そうよ。ちなみに焰は」

「呼んだか」

振りかえる。

「おや、焰もいましたか。恥ずかしいところを聞かれてしまいましたね」

「って誰なんだよ。この二人は？」

「うるさいですよ、横司。数馬を見習いなさい。私のいこと幼馴染ですよ」

「よろしく。しかし、聞いたところ呆れるを通り越して、もはやギヤグカと思つぞ」

「私もそう思うわ。とくにトウメ」

「初対面の娘にまで、駄目だしされた」

「ところで、焰と鈴はデートですか？」

「な、何言ってるのよ」

「買い物に付き合っているだけだ」

「あのなあ、こうやって喫茶店でお茶してる時点で世の中じゃデートってー」

言い終える前に鈴に口を塞がれる弾。何があった？アイコンタクトで会話をする二人。

終えたのか、鈴が離し、弾は

「まあ、あれだ。久しぶりだな。鈴、焰」

「そうね」

という感じで、雑談となった。その後弾達と別れ、自然公園に向かう。この自然公園の一角には干拓されなかった湖を中心に市民の憩いの場所となっている。昔から何となくこの場所が好きだったので、今日もやってきた。いつもは一人で来るが、鈴も一緒だと何か新鮮だ。

「ねえ、焰」

「何だ、鈴？」

「あそこにいるのって」

ゆびさす方向を見る。そこにはショートカットのかわいい女の子とペンぎん帽子をかぶった海の弟、涼がいた。宿題なのか、スケッチブックに何か描いている。

「涼だな。よく気がついたな」

「あの子ぐらいでしょ。あのペンぎん帽子かぶってるの」

確かに。あの真希姉デザインのあの帽子は目立つな。涼の近くまで来ると気付いたのか声を上げる。

「焰兄さん」

「久しぶりだな、涼。元気にしてたか」

「は、はい。そ、それとお久しぶりです。鈴音さん」

「鈴さんでいいわよ。そっちの子は…彼女？」

「と、友達です」

と、必死に否定する涼。

「そうですか。ただの友達とは私は何か悲しいです」

「い、いや。その」

わざと肩を落とすショートの子に必死に言い訳する涼。毎度ながら思うのだが何このかわいい生き物。

「嘘、嘘。分かってるんだから。あ、紹介遅れましたね。校倉名雪
つていいです」

につこり笑う。うん、かわいい。鈴も同様のようだ。

その後、雑談に花を咲かせ、夕刻になり、涼達と別れ寮へと帰る道
中。

「焰にいちゃ〜ん」

「だが、断る」

親戚の花梨に会い、ハグされようとしたのを避ける。

「相変わらずね、花梨」

「それはこっちの台詞だぜい。鈴さんよ。あたしの計算違いだった
ぜい。まさかそこまで焰兄ちゃんのこと……」

花梨が言い終える前にその口を塞ごうとする鈴。

「無駄だぜい」

と真庭拳法の構えをとる。

「上等よ」

鈴も何かしらの構えをとる。仕方あるまい。

「落ちつけ二人とも」

「焰は黙ってて!!」

「兄ちゃんも黙ってるんぜい!!」

ほう、ならば

「断罪……」

「いきなり!!」

「断罪円は勘弁!!」

と喧嘩はやめたようだ。名残惜しそうな花梨を見送り、寮へと帰る。途中で鈴と別れ自分の部屋へと行く。すると、

「私が優勝したら——っ、付き合ってもらおう!」

「はい?」

と箒が一夏に告白をしていた。箒は言い終えると脱兎のごとく駆け出した。非常に青春のページな光景だが恐らく一夏には通じてはいないだろう。なぜか、恐らくあいつはどこまで?と言いそうな奴だ。一波乱あるかな。そう思いつつ部屋に戻った。まさか、この告白事件が俺と刻?を巻き込むとはこの時予想もしてはいなかった。

幕間 1（後書き）

今回は2話投稿です。

幕間 2

side 一夏

六月のある日曜日。俺と焰は久々に弾の家に遊びに来た。

「で？」

「で？で理解するのは難しいでしょう、弾。一夏も困惑するだけですよ」

そうだな。代弁してくれた海に同意する。

「だから、女の園の話だよ。いい思いしてんだろ？」

「それは幻想だ、弾」

焰が切り返す。ちなみに俺達は今、モンハンをしている。

「そうだな、結構気を使うことが多いし、何かと不便だな」

「それだけならまだしも、暑くなった影響かきわどい格好も目立つようになるし」

「それ、役得じゃね？」

「馬鹿言つな。誤解されちまったら最後、弁解は難しくなるし」

「そんなもんかねえ」

「そんなもんだ」

そう言い終わって、クエストクリア。

「よし、これくらいにするか」

「昼からはどうします?」

と昼の予定を話そうとすると、

「お兄!さっきからお昼出来たって言ってるじゃん!さっさと食べに——」

「そうだぜ。さっさと食べないとあたしが——」

どかんと蹴り開けて入ってきたのは弾の妹の五反田蘭とその親友の真庭花梨だ。

「あ、久しぶり。邪魔してる」

「久しぶりだな、花梨」

「焰兄ちゃん——」

「だが断る」

ハグをしようとしたのか、花梨は突っ込んで行ったが、これをかわす焰。もはや定番と行っていい光景だ。

「い、いやっ、あのっ、き、来てたんですか……?全寮制の学園に

通っているって聞いてましたけど……」

「ああ、うん。今日はちょっと外出。家の様子見に来たついでに寄ってみた」

「そ、そうですか……」

しかし、蘭って昔からそうだけど、何でおれ相手だと妙にたどたどしいというか、敬語なんだろうな。それを知ってか知らずか、弾と海と焰はため息をついている。何故だ？

「蘭さん、花梨ノックぐらいはしなさい」

「あ、すみません。海さん」

「海兄ちゃん、何で知らせてくれなかったのさ!!」

「あなたに逐一知らせる義務はありませんから」

「そんな海兄ちゃんに宣戦布告するぜい」

「ほう、花梨。私に勝てるつもりですか？」

そういう海の目は獰猛な鮫だ。一方の花梨は

「女に二言は無い!!」

なんかかっこいいこと言ってるし。ていうか

「やめろ、お前ら」

弾が突っ込む。

「すみません。少々血が騒いで」

「ごめんだぜ。弾兄ちゃん」

そんなこんなで昼飯をおごってもらったことになった。

「でよう、一夏。ファースト幼馴染？と再会したって？」

「ああ、筭な」

「ホウキ……？誰ですか？」

「筭姉ちゃんか、元気にしてるの？」

「花梨、知ってるの？」

「おう、幼馴染だぜ」

「そう」

「で、一夏。進展は無かったなのか？」

「どういふことですか？」

「ああ、その鈍感（一夏）はあろうことに一月同じ部屋であんなことやこんなことを」

「までまで、してないからね。そんなこと決してしてないからね」

「ヘタレが」

何どさくさにまぎれて毒舌はいているんだ、海。

「あんなことやこんなことやそんなことまで!!」

「いや、そもそもしてないし、そんなことってなんだ？」

「黙って食え。お前ら!!」

五反田家の家長にして、この商店街の大将（ちなみに中將は亀有さん）の五反田巖さんが現れた。

「すみません、大将」

「分かればよし」

満足げに頷いて料理を始める。

「お兄。あとで話し合いましょう……」

「お、俺、この後一夏達と出かけるから……。ハハハ……」

「では夜に……。決めました」

なにを？

「私、来年IS学園を受験します」

「その手があつた!!」

蘭が決意表明すると同時に花梨が便乗する。

「これで堂々と焰兄ちゃんに付きまとえる」

「付きまとつな。第一、洋子おばさんを説得できるのか？」

「大丈夫。父さんと鎌兄ちゃん経由で説得するから」

はあ〜とため息をつく焰。

「私達の成績なら余裕です」

「確かIS学園には推薦は無いのでは？」

海の指摘に蘭と花梨は不敵にほほ笑み、二人ともポケットから紙を取り出し弾に渡す。

「げえっ!？」

「ほっ」

「ISの簡易適性試験…二人ともAですね」

「で、ですので」

「受かったら、いろいろお世話になるぜい」

「ああ、受かったらな」

と安請け合いしたら、刹那蘭が食いついてきた。

「や、約束しましたよ！？絶対、絶対ですからね！」

「お、おう」

「いいのかよ、母さん？」

「あら、いいじゃない別に。花梨ちゃんも一緒にいることだし。――夏君、焰君、よろしくね」

「あ、はい」

「一応任された」

諦め顔で言う焰。

「弾、あきらめなさい」

「そうだな。ま、俺からは一言、IS学園に入学する気なら、何かしら護身の術は身につけている方がいいぞ」

「そうかも。じゃさっそく、道場に。行くよ、蘭」

「ちょ、ちょっと待てよ。花梨」

怒涛の勢いで二人は出かけて行った。

「若いっていいですね」

「そうだな」

「二人とも、爺臭いぞ」

何を言う

「さて、これからどうします？」

「久々ゲーセンに行きたいな」

「一夏、エアホッケーで勝負だ」

あえて十連敗中のものを選ぶとは

「中学のままの俺だと思ふなよ」

「こい、返り討ちにしてやるよ」

さて、行きますか。

side 刻？

「お久しぶりです。校倉さん」

「おう、わざわざ呼びたして悪いな。何か予定でもなかったか？」

「いいえ、大丈夫ですよ」

今日、昨年居候していた校倉さんから呼び出された。

「今日、呼んだのは他でもない。紫苑さんから言伝を伝えるためにな」

「！！祖母から」

「ああ、今日はお前さんの誕生日だろ。十六になったら、伝えてくれって頼まれたからな」

そこで区切り姿勢を正す。

「さて、言伝はこうだ。鑓の菩提寺に鑓家の歴史書を預かってもらってる。どう扱うかは、おまえの自由だとな」

「歴史書ですか？」

鑓の真庭語みたいな？

「まあな、菩提寺の住所は分かるか？」

「ええ、分かります。お盆にでも墓参りのついでに取りにいきましょうか
と思います」

「あ、刻？お兄ちゃんだ」

突如かわいい声がした。

「名雪ちゃん」

「こんにちは」

「あら、刻？の坊やじゃない」

名雪ちゃんの母、校倉 彩子さん

「お久しぶりです。彩子さん」

「久しぶりだね。そういや、もう聞いたのかい？」

「はい、聞きました」

「そう。お昼はどうする？食べてく？」

「おう、食べてけ」

「お言葉に甘えさせていただきます」

「刻？お兄ちゃん、遊んで」

「食べ終わってからな」

何にせよ、行動は夏になるか。俺はそう思いつつ曇天の空を見上げた。

side 焰

夕食後、山田先生に呼ばれた。以前頼んでいたものがようやく出来たということだ。

「わざわざすみません」

「いえ、大丈夫ですよ。問題はありますか？」

作ってもらったのは、変体刀のコアの収納ケースだ。これまではコアがはいっていた箱をそのまま利用していたが防犯上と利便性を考慮したものがいいと思い、入学当初に頼んでいたものがようやく完成した。基本はIS装備の応用か待機状態がブレスレット、機動時がけ収納ケースとなる。待機状態でもコアの反応が分かる優れものだ。

「ありがとうございます」

「いえ、作ったのは私じゃないですし。そう畏まらないでください。ところで、真庭君。以前から聞きたいとは思っていたのですが、四季崎記紀の変体刀でしたか。他の刀はどんな特徴なのですか？」

ま、気になるのも仕方がないか。

「特徴ですか。一言で言うと

絶刀『鉋』 主眼は頑丈さ

斬刀『鈍』 主眼は切れ味

千刀『？』 主眼は多さ

薄刀『針』 主眼は軽さと薄さ

賊刀『鎧』 主眼は防御力

双刀『鎚』 主眼は重さ

悪刀『鏢』 主眼は活性力

微刀『釵』 主眼は人間らしさ

王刀『鋸』 主眼は毒気のなさ

誠刀『銓』 主眼は誠実さ

毒刀『鍔』 主眼は毒気の強さ

炎刀『銃』 主眼は連射性と即射精と精密性

ですね」

「全部銘が金属偏ですね」

「ま、それは四季崎なりのしゃれでしょうかね」

そう言つて後にした。ま、四季崎が完成させたかったのは、完了形変体刀？刀『鑢』こればかりは話したくはないがな。しかし、何故

鑪のコアがあつたのだろうか？謎は深まるばかりだ。謎といえもう一つ、まだ誰にも話してはいないが初代真庭蝶々が？刀流初代鑪一根と邂逅した同時期、初代真庭鳳凰も四季崎記紀と会っていたらしい註釈が真庭語（裏）に書かれていた。何故？と疑問ばかりわいてくるが考えたところで憶測にすぎないが、このところの事件を偶然で済ますのは腑に落ちない。考えても仕方ないか。そう思い、糖分摂取のため自販に向かった。その後に、厨房で刻？の誕生ケーキでも作るかと思いつつその日を終えた

キャラ紹介

校倉 隼人

プロフィール

38歳。校倉総合運輸の社長。校倉必の直系。刻？の親戚。性格は豪快。なお、親バカ。

校倉 彩子

プロフィール

30代前半。隼人夫人。容姿は敦賀迷彩。幕の親戚。たまに、篠ノ之道場で剣道指南している。

校倉 名雪

9歳。涼のクラスメート。容姿は凍空こなゆき（ショート）。めっ
さかわいいで、商店街にFCもあるとかないとか。
ファンクラブ

幕間 2（後書き）

真庭道場2

師匠「はい、やってきました。真庭道場のコーナー。進行役は俺こと蝶次郎と」

弟子2号「弟子2号の花梨だぜ」

師匠「さて、花梨は獣組募集で全さんが考えてくれたキャラだよな」

弟子2号「そうだぜ、作者は名前見たとたんこれだつて決めたらしいぜ。ところで師匠、何故作者は原作の獣組を出さないんだ？」

師匠「ん〜。蝙蝠は現代の場合だと奇奇怪怪だという理由で没。川獺は最後まで悩んだが、先送りにしているようだ。出るかもしれないけど知らない。狂犬は忍法でNGという理由で、あと後々キーパーソンとして出るかもって作者はほざいている」

弟子2号「骨肉細工と狂犬発動はチート過ぎるもんな」

師匠「そう言うお前の忍法も結構なもんだぞ。2つつて」

弟子2号「いやいや、師匠。あたしの足軽は自分が持ったものまで軽減できないし、出来て海渡れるくらいだし」

師匠「十分スゲーよ。さてこれからの展開なんだが」

弟子2号「夏休みの回まであたしら出てこれないかも」

師匠「そうなんだよな。じゃなくて、次章あの人物（憑依）を出す
そうだな」

弟子二号「憑依って言うだけでわかるんじゃないのか？」

師匠「あとそれからついに刻？があおのセリフで決める場面が……で
るかも」

弟子二号「あくまで予想ってわけなのか。じゃ今回はこれにて

師匠「終了。あ、感想、質問まってまーす」

第七話 嵐の予兆

side 焰

「おはよう、一夏」

「おっす」

「ああ、おはよう、焰、刻？」

いつもの面子で食べる朝食。

「刻？、今日昼休みいいか？」

「いいけど、どうした？」

「昨日、お前の誕生日だったろ。一日遅いが、誕生祝いつてことで」

「ありがとな」

とそこに、

「おはよ、焰」

「グッモーニングですわ、一夏さん」

「おはよう」

鈴、セシリア、篝が来た。

「三人ともおはよう」

「何話してたの」

「ああ、昼休みに刻？の誕生日祝いでもしようという話だ」

「そうなのですか。おめでとうございます、刻？さん」

「ありがとな。まさか、焰昨日帰るのが遅かったのは――」

「ああ、ホールケーキを作っていた。自信作だ」

「階段ケーキじゃないだろうな？」

「3段重ねだ」

「多いでしょ――」

「そうだな」

そこで話を打ち切った。なお、箒たちも参加することになった。

朝のSHRの前、教室はいつもの喧噪だ。一夏は箒とセシリアに囲まれている。刻？はのほほんさんとその友達と共に「化物語」の感想で盛り上がっている。俺と言えば、IS武装のカタログを眺めている。内容は銃火器。いかせん火力が乏しいので、何か装備したいがぱっとは思いつかない。黒鳳の容量も少ないので1武装がせいぜいだ。

「諸君、おはよう」

つと、もう時間か。

「今日から本格的な実戦訓練を開始する。訓練機ではあるがISを使用しての授業となるので各人気を引き締めるように。各人のISスーツが届くまでは学校指定の物を使うので忘れないように。忘れた者は代わりに学校指定の水着で訓練を受けてもらう。それも無い者は、まあ下着でも構わんだろう」

いや、構うだろう！クラスの大半が心の中で突っ込んだらう。

「では、山田先生、ホームルームを」

「は、はい。ええとですね、今日は何と転校生を紹介します！しかも2名です！」

「えええええええっ！？」

普通分散させるものではないかと思う。ふと、手首のブレスレットを見れば鍍金が反応していた。驚いている我をしり目に転校生がはいってきた。

「失礼します」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ぴたりとざわめきが止まる。そのうちの一人が男子だったからだ。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、皆さんよろしくお願いします」

にこやかな顔でそう告げた。しかし、ニュースになってもよさそうなものを・・・少し探りを入れるかと思いつつ、観察する。が

「男子！守ってあげたくなる系の！」

「しかもうちのクラス！」

「地球に生まれてよかった〜〜！」

「フフ、夏の薄い本の内容が」

つて最後誰だ！！同時に一夏と刻？は思った……………刻？？

side刻？

何でかは分からない。今まで女子と話しても、友達関係にはなるがそれ以上はいかないのが常だった。まあ、紫苑婆が生きてた頃は？刀流の修行で忙しかったからな。初めてだな、一目惚れてやつ……………「花……………は……………惚れても……………」……………ッ痛。なんだ今の？

「どうした、刻？？」

「いや、何でもない」

「そうか」

焰も何か考えているらしく、あまり突っ込まなかった。外見は銀髪

の可愛い子なんだけどな、雰囲気が見えもあつてか軍人そのものだ。何、俺って軍人萌え？この考えに絶望していると、

「……………挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

そう言つて

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

それで終わった。山田先生が泣いてるぞ。その子は一夏の方を見るなり、つかつかと近づき平手を

「物騒だな」

と焰がその手を止めた。

side 焰

「何者だ？」

「真庭焰だ。ドイツでは過激な挨拶が常識なのか？」

「邪魔だ！！」

さて、我に向かって平手を放とうとした瞬間

「主、認証」

機械的な声が聞こえ、ボーデヴィツヒの左手に大きく反り返った鍰なしの刀が握られていた。やはりか！！鎖も意味がないことを悟り警戒する。

「なんだ、これは？」

「四季崎記紀の完成形変体刀のうちの一振り、毒刀「鍍」だ。気をつけるよ、そいつは四季崎の刀の中でも最も邪悪な刀だ。自我が食われるぞ」

「何を馬鹿な」

「ラウラ、忠告は聞いておけ」

「教官？」

「与太話ではないということだ。そうだろう、真庭」

「そうですね、抜刀しなければ問題ない」

「そう言う事だ。ラウラ、しまえるか？」

「問題ありません」

そう言つて、なおした。左手の中指に禍々しいデザインの指輪が装着された。が一夏の方を見て

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

と言い捨て席に座った。

「あー……ゴホンゴホン！ではHRを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は2組と合同でIS模擬戦闘を行う。解散！」

さて、どうしたものかねえ。今は考える時間はないか。またあとで考えるかと思い、急いで移動することにした。

side 一夏

「ああ！転校生発見！」

「しかも織斑君達と一緒に！」

HRが終わって、さっそく各学年の教室から情報先取のための尖兵が駆け出してきている。

「ちっ、予想以上に早い」

「したかあるまい。煙幕で」

「やめろ、この間もそれで怒られたじゃないか」

「何にせよ、急げってことだな」

「な、なに？なんでみんな騒いでるの？」

「そりゃ男子が俺達だけだからだろ」

「……………」

？なんで「意味がわからない」って顔をするんだ？

「いや、普通に珍しいだろ。ISを操縦できる男って、今のところ俺達しかいなんだろう？」

「あつ！——ああ、うん。そうだね」

「おかげで俺らは珍獣扱いの待遇だ、急げ、あと12分だ」

さて、どうにか群衆に捕まる前に校舎を出ることができた。そして、
第二アリーナ更衣室

「うわ！時間やばいな！すぐに着替えちまおっぜ」

とにかく急げ。そう思い一気に脱いだところで、

「わあっ！？」

シャルルが叫んだ。

「どうした？」

「な、何でもないよ」

「「お先に一夏」」

見ると、焰と刻？は既に着替えたのか、脱兎のごとく駆け出していた。

「ああ、待てお前ら。急ぐつぜ、シャルル」

「う、うん」

「遅い！」

第二グラウンドに無事到着とはいかなかった。ああ、鬼が腕を組んで

ばしーん

「くだらんことを考えている暇があつたらとつと列に並べ！」

俺とシャルルは一組整列の一番端に並ぶ。

「災難だな、一夏」

「お前らなあ……刻？、調子悪いのか？」

「うん、いつも通りだが？」

と言って髪をいじくる。分かりやすいな。焰は焰で、目を鋭くしながら、もう一人の転校生ラウラ・ボーデヴィツヒをみて何か考え込んでいる。

「焰、やっぱ気になるのか？」

「ああ、毒刀『鍔』は真庭にとっても因縁があるからな」

「因縁？」

「ああ、真庭忍軍末代十二頭領が一人、真庭鳳凰が毒刀「鍔」の所有者だった」

「鳳凰？お前の忍び名と同じだな」

「ああ。しかし、なにも起きなければいいがな」

「末代頭領に何があったんだ？」

「一言でいえば、鍔を抜刀して乱心した。わが先祖を切りつけ、真庭の里を壊滅させた」

「――！凄まじいな」

そこで話を打ち切る。改めて完成形変体刀に戦慄する。そう言えば、変体刀については名前と特徴ぐらいしか知らない。以前、歴史の特集で巖流島の戦い（前篇は宮本武蔵対佐々木小次郎、後編は鑢七花対錆白兵）って番組を見たところ、後編の方があやふやだったような気がする。まずはそこから調べるか、そう思い頭を実習に切り替えた。

side刻？

「では、本日から格闘及び射撃を含む実践訓練を開始する」

「はい！」

射撃！？まずい、どのくらいまずいかっていうとマジまずい。まあ、なるようになった。

「今日は戦闘を実演してもらおう。――鳳！オルコット！」

戦闘実演か

「それで相手はどちらに？わたくしは鈴さんとの勝負でも構いませんが」

「ふふん。こっちの台詞。返り討ちよ」

「慌てるな馬鹿ども。対戦相手は――」

けどやっぱ銃器は無いわー。マジでどうしよう。

「ああああーっ。ど、どいてくださいーっ！」

ぼんやりしていたため反応が遅れたが、体はすぐに反射して、放つ

「？刀流・蒲公英」

飛行物体を容赦なく貫く。やべ

ドカーン！数メートル離れた壁にぶつかり、その正体がわかった。

「あいたたた、ひどいですよ、鑢君」

山田先生だった。

「すみません、突然のことだったので手加減できなかったんで」

「ゴホン、二人には山田先生と対戦してもらおう」

大丈夫なのか？

と、さっきまで思っていたが認識を改めよう。山田先生は、2対1にもかかわらず手傷を負わずに二人を倒した。二人の即興のチームプレイの未熟さが目立つが、それを差し引いても強い。

「さて、これで諸君にもIS学園教員の实力は理解できただろう。以後は敬意をもって接するように」

パンパンと手を叩いて織斑先生が皆の意識を切り替える。グループごとの実習になるようだ。訓練機が打鉄3機、リヴァイヴ3機ということで専用機持ちがグループリーダーを務めることになった。俺はボーデヴィツヒさんの補佐をやるように指示されたが肝心の本人がやる気がないため実質俺が指示を出していた。

「おい」

ひと段落したところで声をかけられる。

「何だ？」

「さっきの技はなんだ？」

「？刀流・蒲公英。？刀流の初步の技だ」

「？刀流？」

「虚しい刀の流れと書いて？刀流。鑓家代々伝わる無刀の剣法だ」

「……時間があつたら、私と戦え」

戦闘狂か？迷ったが頷いた。しかし、改めてみると気がつくこともある。この子には、何と言うか個がない。強気な姿勢も恐らく織斑先生を真似ているだけだろう。まるで、鍍で自分を覆い隠すように恐らく、毒刀がこの子を主としてみたのはこれが原因かもしれない。願わくば何も起きないように祈るしかないな。

side 焰

さて、実習も問題なく進んでいる。途中、黄色い声が上がったから何事だと思えば一夏が筈をお姫様だっこをしているではないか。相変わらずだなと思いつつ班員を見れば、期待の眼差しで見ているが、俺の身長は低い方だし、する気もさらさらない。シャルルの班は引き際を誤ったか、千冬さんの直接指導か。グラウンド20週はさすがにきついな。そう思いつつ、実習を進めた。

昼休みの学食。俺達は一つテーブルを使って刻？の誕生会をした。

「おめでとう、刻？」

「ありがとな、焰。にしてもやっぱ多いぞ。このケーキ」

「すまん。ちょっと張り切り過ぎた」

「にしてもおいしいわね。焰、あんたまた腕上がった？」

「まあな」

思えば、真庭家は全体的に甘党だと思う。とくに顕著なのは俺と密兄さんだろう……閑話休題。

「俺からはこれ」

一夏は刻？に限定物のスニーカーを贈る。そう言えば、前に欲しがっていたな。

「ありがとな。けっこう掛っただろ？」

「いや、俺と海と弾の割り勘だからな、気にすんな」

こうした具合で誕生会は進んで行った。

「真庭君」

声をかけてきたのは、デュノアだった。

「良かったのかな、僕が同席しても」

「構わんよ。ついでと言っては悪いが、お前の歓迎会って意味合いもある。ま、もっとももう一人の方は取り付く島もないがな」

それとなく誘ってはみたが、見事に無視された。俺はともかく、刻？の様子がおかしかったな。まさかな。

「ま、ここで会ったのも何かの縁。長いかどうかは分からないがよろしく頼む」

「うん、こっちこそ、よろしくね」

につこりと笑顔を見せる。まあ、悪いやつではなさそうだ。俺も鍍の件で少しばかり気がたっていたかもしれない。

「そう言えば真庭君達は何時放課後にISの特訓してるって聞いたけど、そうなの？」

「ああ、今月に学年別トーナメントがあるからな。一夏の奴がむらつ気があり過ぎるからな。その特訓だ」

「僕も加わっていいかな？何かお礼したいし、専用機もあるから少しくらいは役に立てると思うんだ」

「助かる。よろしく頼む」

何はともあれしばらくは様子見か。そう結論付けた。

side 一夏

シャルル達が転校してきて4日経った金曜日の放課後。俺達はアリーナで訓練を開始していた。

「そう言えば、俺と焰まだ模擬戦してなかったな」

「言われてみればそうだな」

ISの実習が始まった折り、たまに模擬戦をしているが焰とまだ戦ったことがなかった。

「なら、やるか」

「望むところだ」

アリーナの一画を借りて、焰と対峙する。周りには、箒や刻？をはじめギャラリーが多数いたがこの際気にしない。

「箒、合図頼む」

「ああ、いざ尋常に………始め！！」

雪片を構え爆縮地で距離を詰める。が、察知されたか上空に飛び棒状手裏剣が襲いかかる。

「はぁ！！」

それを薙ぎ払いつつ、焰を見れば鬼火を発動そして投げつけた。鬼火を避けるもしくは切り払いながら接近する。焰は棒状手裏剣を一本構える。巻菱指弾の応用か？と思ったが接近する。手裏剣が放たれる。これを弾……ガキン！！何だと！！弾くどころか弾かれた。それを狙ってか、焰は砲を構え

「報復絶刀！！」

side刻？

「新技か」

俺はポツリと漏らした。

「新技ですか？」

興味深げにセシリアが聞いた。

「ああ、あれが焰の新技、鉄甲作用。投擲の威力を9倍いや11倍……10倍だったかな？」

「要は、焰さんの投擲の威力が増したといったところですか」

「そうだな。だが欠点もある」

「溜めですか」

「正解」

溜めに時間がかかるとぼやいていたな。

「さて、一夏はどう出るかな？」

side焰

決まった。が一夏は体を捻って直撃を塞いだ。甘いな。

「平突き!!」

横薙ぎの攻撃を放つ。直撃だったが、後方に逃れる。鉋をしまい、鬼火で追撃する。が、流石に追い込まれたか、動きが機敏になったため当たらない。そうこうするうちに、一夏は雪片を拾い構え、爆進した。溜める時間もないか。観念し、鉋を構える。ガキン、一合、二合と斬り合うが剣術の腕は一夏の方が上手だ。我に勝てる要素は突き技くらいしかない。刹那、一夏の目が浅葱色に変わり、雪片が白く輝く、

「雪月花!!」

3連撃をどうにか鉋で塞ごうとあがいたが、1撃しか防げなかった。一旦距離をとる。鉋を構え、投擲する。当然一夏は避ける。それでいい。棒状手裏剣を構え、接近する。再び始まる剣戟。数合の後、わざと後方に引く。追撃する一夏。甘い。能力発動「死翔刀」を発動させる。一夏に向かう鉋。気付いたのか、鉋を弾こうとする。再び接近し

「断罪円!!」

を仕掛ける刹那、一夏は雪片を投げつけた。流石に予想外だ。と避けたところで、一夏は針を構え、

「薄刀開眼・弍の舞、剣閃・木枯し!!」

剣閃を放った。棒状手裏剣で防ぐがすべて碎かれたうえに大ダメージだ。持ってあと一撃。鉋を寄せて構える。一夏も察したか針を構える。空気が凍る。そして

「断罪絶刀!!」

「零の舞・雪月花!!」

交差する剣戟。

「負けたか」

我は膝をついた。僅かに一夏の方が早かったということか。そうつぶやいたと同時に一夏も膝をつく。

「か、勝ったのか？」

「ああ、お前の勝ちだ」

「良くやった、一夏」

「お見事ですわ、一夏さん」

息つく暇もなく介抱される一夏。役得か。そんな中

「負けたわね」

「ああ、負けた」

鈴が話しかける。

「ほら、しゃっきとしなさいよ。あと、これ」

そう言っ取り出したのは、ポカリ。

「わざわざ済まん」

受け取って、飲む。

「しかし、あの新技は驚いたぞ、一夏」

「ああ、木枯しか。実戦で使うの初めてだったけどうまくいった」

初披露であの實力か、我もうかうかはできんな。その次は、セシリアとシャルルの対戦で今日の訓練は終了した。

第七話 嵐の予兆（後書き）

真庭道場！！！！

師匠「はいはじまりました、真庭道場のコーナ―。今回の弟子は――

弟子三号「真庭白夜駄（真庭白夜だ）」

師匠「なあ、いつも思っけどさ。聞きづらいんだよ、お前の会話」

弟子三号「鹿他内ダロ。折れの忍法ノ福左様何打から（仕方ないだろ、俺の忍法の副作用なんだから）」

師匠「まあ、お前の忍法についてユミマタさんから質問がきてるから回答してやってくれ」

弟子3号「欧。折れの忍法、逆鱗探しはナニガ難でも合い手を怒らせる岳じゃ名井ンだ。合い手の喜怒哀楽の意標を吐く忍法だ。ま、大半は起こらせて志摩津する琴が大井がな。（応。俺の忍法、逆鱗探しは何が何でも相手を怒らせるだけじゃないんだ。相手の喜怒哀楽の意表を突く忍法だ。ま、大半は怒らせてしまうことが多いがな）」

師匠「成程。だけど、やっぱ聞きにくいわ。ところで思っただけどさ、束とはどういう関係だ？むしろ、お前ら会話成立してんの？」

弟子3号「質れいな。束とは合い棒兼濃い人兼根役者兼有人兼指定と行った常呂だ。貝和も正立はしているぞ（失礼な。束とは相棒兼恋人兼婚約者兼友人兼師弟といったところだ。会話も成立しているぞ）」

師匠「そうか。てか、婚約いつしたの!？」

弟子3号「(遠い目をしながら)左穴 (さあな)」

師匠「……ま、気まづくなっただので今回はここまで。次回はISの主役一夏が弟子役だぜ。感想、質問、誤字脱字、真庭道場の弟子役希望があつたらどんどん書いてくれ。では、今回はこれにて――」

弟子二号「修了 (終了)」

第八話 発覚（前書き）

展開早いです。

第八話 発覚

side一夏

「ええとね、一夏がオルコットさんや鳳さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握していないからだよ」

「そ、そうなのか？一応わかっているつもりだったんだが……」

「一応だろう。見栄をはるな。現に対銃器戦にお前は弱すぎる」

う…反論したいが事実なのでしょうがない。焰は焰で手裏剣と鬼火以外にも鉄鞭や真庭拳法、効果は薄いが閃光弾、煙幕等の暗器を使用したトリッキーな戦い方だし、刻？は衝撃波等で戦っている。俺も対銃器用に編み出した技、木枯しはまだ錬度が低い。

「そうだね。僕と戦った時もほとんど間合いを詰められなかったよね？」

「うつ……、確かに。『瞬間加速』も『爆縮地』も読まれたしな」

「一夏のISは近接格闘オンリーだから、より深く射撃武器の特性を把握しないと対戦じゃ勝てないよ」

「そうだな。だけど、懐にはいれば一夏の勝率はかなり上がるもんな」

俺の勝利の大半は開眼のどちらかだ。一日の使用時間も少しだが増えたもののそれを頼りにしちゃいけないな。シャルルの瞬間加速に関する講義を受けながら理解を深めた。

「そう言えば、一夏は射撃武器の後付武装イコライザがないんだよね？」

「ああ、そうだな。俺と刻？は、拡張領域がないからな。焰はなんか一つ、つけるんじゃないかったのか？」

「まだ、思案中だ」

「なら試しに射撃武器の練習をしてみようか。はい、これ」

そう言っただけ渡したのは、さっきまでシャルルが使っていた55口径アサルトライフル『ヴェント』だった。もう、使用許諾はしたらしい。ために撃つていく。感想は速いと言ったところか。続いて、焰が撃つ。本人いわく、片手銃がいいと。そして

「俺か」

刻？の番になった。焰から受け取ろうとするが、

「あ」

謝って落としたか、それを拾おうとするが、

「ま、待て」

思うように拾えない。そんな調子なわけで、他の場所で練習する子達に

「すまん」

と詫びを入れること5回、ようやく拾って構えたが

「刻？……どこに向かって撃つ気だ」

「へ？」

構えた方がいいが、銃口を自分に向ける始末。やっと気付いたか、構えなおし撃ったところで、目標とは反対の方向に撃つ始末。

「刻？……やはり」

「だから、撃ちたくなかったんだよ」

ああ、やっぱりか。俺がそう納得してる中で

「どういう訳だ？」

と箒が聞いてきた。

「ああ、鑢の人間には代々刀、武器が使えないっていう呪いを受け継いできたんだよ」

「どういう呪いよ！？」

「そう言う呪いだ。それで、？刀流が生まれたんだよ」

やけくそ気味に言う刻？。俺も最初聞いた時、とてもじゃないが信じられなかったしな。こうした騒動もあつたなか、午前の練習を終えた。そして昼食、俺達は屋上に集合した。

今日は、自分で作った弁当にしようと思っていたが

「箒とセシリアは俺に用意はするなと言っし」

「ああ、俺は鈴からだ」

と用意していない。

「い、一夏、弁当作ってきたんだ、食べるか？」

「い、一夏さん、わたくしサンドイッチ作ってきましたの。お召し上がりになってくださいな」

と箒とセシリアから弁当を貰う。

「焰、酢豚作ってきたから。か、勘違いしないでよね。作り過ぎただけなんだから」

鈴、ツンデレは焰には通用しないぞ。焰は苦笑いしながら受け取り、

「ほう、パイ入るか。分かっているじゃないか、鈴」

と素直に称賛している。さて俺もまず箒の弁当を開ける。

「お、うまそうだ」

サケの塩焼きに鶏肉のから揚げ、こんにゃくとごぼうの唐辛子炒め、ほうれん草の胡麻和えというバランスの良い献立の数々がそこにはあった。食べてみれば、どれもおいしい。

「うまいぞ、箒」

「そ、そうか」

何、顔真っ赤にしてるんだ？と思いつつセシリアのサンドイッチを食べてみると

「甘！！」

何で？BLTサンドが甘いのか？そして、刻？、何で徐々に後退している。何とかサンドイッチを食べ上げる。そう言えば

「箒、何でお前の分、唐揚げないんだ？」

「一夏、察してやれよ」

刻？が麦茶を飲みながら言う。だから、分からないんだって。

「だけど本当にうまいから箒も食べてみるよ。ほら」

くわっ、と焰達が凝視する。何なんだよ、お前ら？

「あ、これってもしかして日本ではカップルがするって言う「はい、あーん」って言うやつなのかな？仲睦いね」

シャルルがそんなことを言って納得したように微笑む。そしてセシリア、何故ハンカチをかんでいる？

「甘いな」

「……そうね」

焰と鈴が呟く。そんな感じで昼食会は終わった。

side 焰

昼食を食べ終え、再び訓練を始める。シャルルに片手銃を貸してもらい、撃つていく。鈴のアドバイス等のおかげで巻菱指弾の応用で幾分か精密射撃も可能になった。周りの様子はというと、一夏と篤はシャルルに射撃を教わっている。刻？はセシリアに接近戦における簡易的な格闘を教えている。その時

「ねえ、ちょっとアレ……」

「ウソっ、ドイツの第三世代型だ」

「まだ本国でトライアル段階だつて聞いてたけど……」

当の本人は、周りを気にする素振りは無く、一夏を見ている。まさか！我はすぐに砲を装備、投擲の構えをとる。思った通り、ボーデヴィツヒは実弾砲に向けた刹那、

「飛来絶刀！！」

砲を投擲する。ようやく一夏達も気づいたか構える。

「ずいぶんと物騒だな」

「貴様……」

射殺さんばかりに睨んでくる。

「ずいぶんと一夏にご執心ではないか？痴情のもつれか何かか？」

おいっ、と一夏が突っ込むがこの際気にしない。

「誰が。あいつがいなければ教官は大会二連覇の偉業を成しえただろうことは容易に想像できる。だから、存在を認めない」

「っは。何を言うかと思えば。確かに千冬さんの優勝であつただろうな。だがな、あの人は優勝より一夏を選んだ。そんなことそれがすべてだ。それにな、責任の一端は我にもあるからな」

そう言つて、棒状手裏剣を構える。

「まだ、とやかく言うのならば、我が相手だ」

「助太刀するよ」

とシャルルが隣に立つ。一瞬で装備呼び出し（コール）を終える。

「貴様ら」

『そこの生徒！何をやっている！学年とクラス、出席番号を言え！』
スピーカーからの声が鳴り響く。騒ぎを聞きつけたのであろう。

「……ふん。今日はひこう」

横槍を入れられて今日がそがれたか、あっさりと引いた。やれやれだ。そのまま鉋を拾いしまう。

「焰」

一夏が話しかける。

「あのときのことは気にしてないからな」

「言うな。うまくやれば、お前が誘拐されることも、千冬さんが優勝逃すこともなかった」

「馬鹿言うな……平行線になりそうだから、もう言わない」

「すまん、一夏」

「…あゝ。もう4時だし、今日はやめましょ。焰も一夏もくよくよしない。いいわね」

鈴が仕切り直すように声を上げる。鈴の明るさには毎回助けられるな。と思いつつ、ロッカーに向かった。

「そついや、一夏。シャルルはどうした？」

「何か用事があるみたいだ」

転校以来シャルルはISの実習後の着替えと一緒にしたがない。何故かなと思った時、携帯が鳴る。メールのようだ。内容を確認すると、奏兄さんからだった。

「すまん、刻？。少し用事が出来た。先に帰ってくれ」

「何かあったのか？」

「野暮用だ」

と言い、外に出る。以前にシャルルについての情報を花梨の兄貴、奏兄さんに依頼した。俺の情報力では、せいぜい外堀が限界だった。

「奏兄さん、さっきのメールの件だが」

「ああ、俺もびつくらこいたぜ。まさか、ISシエア3位のデュノア社がスキャンダルすれなことやってたなんてな」

「語訳はいいです」

「あいあい。シャルル・デュノアだったな。率直に言おう。女だ。本名は、シャルロット・デュノア」

……？……！！女！！

「なぜ、性別を偽る必要があるんだ？」

「ああ、そいつはなお前らに近づくためだ。要は、お前らのISの情報の強奪のために派遣されたって事だ」

あれが演技だとは我にはとても思えぬだがな

「言いたかないんだが、彼女…愛人の子だ。その愛人って言うのも数年前に亡くなってな。言うときかざるおえない状態らしい」

ふざけているな

「おちつけ、焰。調べたついでに弱みも何個か掴んできた」

「……いつも思ってたが、奏兄さん、どこから仕入れているんだ？」

「そいつは秘密だ」

「そう言うと思ったさ。ともかく、まだばらさないでくれよ」

「あいあい。じゃ、またな〜」

ふう、予想以上に重い内容にため息をつく。知ってしまった以上は真意を問わねばなるまい。しばらく思索した後、一夏の部屋へと向かう。ノックをする。

「すまんが、デュノアいるか」

「わっ、ほ、焰!？」

「……すまんが入っていいか？」

「う、うん」

入れば、一夏はおらず、ベッドの一つが膨らんでいる。

「どうかしたのか？」

「ちょっと、風邪気味で。一夏は夕食を食べに行ってるよ」

「そうか……聞きたいことがあるのだが、いいか？」

「な、何かな？」

「率直に言おう。お前、女だろ」

時間が止まるということとはこういうことなのだ。微妙な空気が停止したぞ。

「な、何

「違和感を感じたのは、お前が転校した時からだよ。ニュースにもなっている内容だ。事実、我らの時も圧力はかけたとはいえニュースにはなつたからな。次点はお前の日々の態度いや仕草かな」

と言つて区切る。彼女は、カタカタと震えていた。

「悪いとは思つたが、知り合いに凄腕の情報屋がいてね。それで、やめて!!」

見れば、ベットから起き上がったシャルルいやシャルロットと言つべきか。目を真っ赤にしてぼろぼろと涙を流しているではないか。まずい、泣かせるつもりはなかったのだが……

「た、ただいま……」

間が悪い時に一夏が帰ってきた。

「よお、焰……って何でシャルルが泣いてるんだ!？」

あゝと思ひながら、何とか事情を説明する。聞けば既に一夏に女であることはばれていたらしい。原因を追究したがはぐらかされた。

まあ、いつもの事かと思い、もう一つ追究することにした。

「まあ、我が聞きたいのは一つだ。汝……一夏と刻？に害をなすか？」

いつも以上に目を細め睨む。シャルロットは一瞬、怯えたが凜とした口調で

「なさないよ。なしたくない」

そう答えた。

「ならいい」

そう言つて立ち上がる。

「え、そんなにいいのか」

「なんだ、複雑にした方がいいのか？」

「いや、そうじゃないんだけどさ」

「さつき、答えた時の目で信頼した。それでいいじゃないか。ああ、この事はばらさんよ」

また明日と言い残し、食堂に向かった。

sideラウラ

気まぐれに屋上にでてみた。なんてことは無い夜だ。苛立つ……織斑一夏——。教官に汚点を起こさせた張本人……。排除しようとしたが、生意気な小男に邪魔される始末。苛立つ。部屋に戻ろうかと思つた矢先、大柄な男がいた。見れば、修行だろうか、一撃一撃に気迫を感じる。

「七花八裂・改!!」

技名を叫び、次々と技を繰り出す。その光景に私は見とれた。

「このくらいにしとくか……ボーデヴィツヒさん？」

「ずいぶんと修行熱心なのだな」

「まあな、強くなりたい一心でやってるからな」

迷いなくそう言い放つ。その能天気さが癪に障る。

「なあ、あんたに一つ聞いてもいいか？」

「なんだ？」

「あんた、何のために戦つてるのか？」

その問いに私は……

「知れたこと、教官のようになるためだ」

そう言い放つた私に

「そうか。ま、いいさ、戦う理由なんて自分のためだ」

そう言って去っていた。なぜだ、何故そう私を憐れむように見る。
ただ苛ついた。

第八話 発覚（後書き）

キャラ紹介

真庭 奏

この物語における川瀬さん。花梨の兄貴。職業は探偵。副業で情報屋。情報力高し。

使用忍法 記録辿り

第九話 嵐の序章

side 焰

いつものように登校する。ふと、クラスの喧噪がいつも以上であることに気がついた。入れば、

「そ、それは本当ですよ!？」

「う、嘘ついてないでしょうね!？」

「本当だってば!この噂、学園中で持ちきりなのよ?月末の学年別トーナメントで優勝したら男子のいずれかと交際でき——」

「俺らがどうしたって?」

「」「きゃああつ!？」」「」

何なんだ?と思った同時に予鈴が鳴る。

「じゃ、あたしはこれで」

「授業の準備をしませんと」

鈴とセシリアはそう言って話をそらす。まあ、いいかと思いつつ授業を受けた。

昼休みになり、食堂へと向かう。一夏と刻？は何か用があるらしく、珍しく俺一人だ。日替わり定食を頼み、食べる。その途中で

「焰、座っていいか？」

篝が同席する。何というか、覇気がない。

「どうした？また一夏からみか？」

軽口を叩いてみるが

「それだったらどんなにいいか」

両手の人さし指をつんつんさせながら言う。何この娘？乙女なんですけど

「焰」

睨まれたので、とにかく話を聞こう

「じ、実はな今度の学年別トーナメントで優勝したら付き合えと言ったんだ」

もしかしてあれか

「知っていたのか！？」

「偶然通りかかったただけだ」

「話を戻そう。それが何故かトーナメントで優勝したら男子のいずれかと付き合えると噂が広まっているんだ」

朝の喧噪の内容はそれか。一夏と刻？はともかくなんで俺まで？俺は自分で言うのも何なんだが背は低めだし、顔はやや女顔だ。もてる要素はあまりないと思うのだが

「その台詞、鈴の前では言わない方がいいぞ。しかし、これはいたいということなんだ」

沈みまくる篤。

「どうも何も優勝するしかあるまい。お前も木刀とはいえ完成形変体刀の持ち主だ。何かしらの見所があるのではないか？」

「そう……かもな」

これまたさつきとは違った沈んだ表情になる。やれやれと思いつつ悩みを聞いた。

「まあ、それは人として持っていていい感情だと思うぞ。かっとなつてグサつてならない限りはな」

「それでも不安なんだ。また、あんな風になるんじゃないかって」

「生真面目過ぎるぞ、篤。……っとそうだ。王刀『鋸』の特性は知ってるか？」

「いや、知らないが」

「毒気のなさだ。不安なら、無心になって振ってみる。何か、答えが出るかも知れんぞ」

「……そうだな。色々愚痴って悪かったな、焰。その、ありがとう」

「別にかまわんよ」

そこで昼飯を食べ終わる。さて、午後もがんばりますか。

side 鈴

「「あ」」

先にアリーナにいたのはセシリアだった。

「随分と速いじゃない。焰達は？」

「まだ所用で遅れるそうですわ」

「ふ〜ん」

そう言いながら、準備をする。まさか、あんな噂流れてるなんてねえ。焰は一夏と同じくらい鈍感だからいきなり誰かと付き合うことは無いだろうけど、不安なものは不安だ。現に焰はもてる。一夏に比べると少ないけど、花梨みたいに積極的に行動する子もいるしなんか3年の影の薄い先輩とも親しく話してたし油断はできない。にしてもあの鈍感は〜〜！！

「鈴さん……何、百面相してますの？」

「ええ！？嘘、顔にでてた！？」

こくりと頷くセシリア。

「今のは……セシリア」

「……あら」

セシリアの表情も険しいモノに変わった。二人の視線の先にあるのは、一機のIS。黒を基調としたカラーリングを施されたドイツの第三世代機。黒き雨の名を冠する機体、シュヴァルツェア・レーゲン。

そして、その操縦者——ラウラ・ボーデヴィツヒ

「……」

「……！？」

いきなり、撃ってきた。何とか避ける。

「……どういふつもり？いきなりぶっ放すなんていい度胸してるじゃない」

双天牙月を連結して、衝撃砲を準備する。

「中国の『甲龍』にイギリスの『ブルー・ティアーズ』か。……ふん、データで見たときの方が強そうではあったな」

いきなりのご挨拶。

「何？やるの？わざわざドイツくんだりからやって来てばこられたいなんて大したマゾっプリね。それともジャガイモ農場じゃそいうの流行ってんの？」

「あらあら鈴さん、こちらの方は言語をお持ちでないようだからあまりいじめるのは可哀想ですわよ？犬だってワンと言いますのに」

「はっ、二人がかりで量産機に負ける者が専用機持ち、ましてや代表候補生とは笑わせてくれる。よほど人材不足のようだな、貴様らの祖国は。さすが、数だけしか能のない国と古いだけの国だ」

言うじゃない。上等よ。

「いいわよ、やってやろうじゃない。セシリア、どっちからやるかジャンケン」

「ええ。別にわたくしはどちらが先でも構いませんが、少しばかり灸を据えてやる必要がありますわね」

「はっ！二人同時でいいぞ。一足す一は所詮二にしかならん。下らん種馬を他の女と取り合うようなメスと、不意打ちしかできん小男に恋などという現を抜かすメスに私が負けるものか」

こいつ（怒）

「……いいわよ、そこまで言うならマジでボッコボコにしてやるから。廃棄処分へちやんこになっても泣かないでよねッ！」

「この場にいない人を侮辱するような方など、同じ欧州連合の者として我慢なりませんわね。二度とそのような口を叩けないようにこ

こで叩いて差し上げますわ」

「御託はいらん、とつと来い」

「「上等!」「」

side一夏

「一夏、今日も放課後練習するよね?」

「ああ、勿論だ。今日使えるのは――」

「第三アリーナだ」

と焰が答える。そう言えば

「刻? たちはどうした?」

「刻? は所用で今日は休むそうだ。箒は剣道場だ。鈴とセシリアは先に行っているだろう」

「そっか……それにしてもなんで箒は剣道場に?」

「おそらく鋸で素振りでもしているのだよ。あの刀の特性は毒気のなさだからな」

などと、雑談していると

ドゴォン! ?

突然爆発音がした。

「何事？」

「こつちで先に様子を確認する？」

シャルが観客席へのゲートを指す。ピットに入るよりも早く様子を見ることができる。急いで向かい確認すると

「鈴！セシリア！」

二人が相手にしてるのは黒いIS「シュヴァルツェア・レーゲン」を駆るラウラの姿だった。よく見れば鈴とセシリアの方が追いこまれている。すでにエネルギーも操縦者生命危険域に達している。レッドゾーン

「まずいな」

そう言ったのは焰だった。

「しかたあるまい」

そう言うなり鉋を構え、

「報復絶刀！！」

とアリーナを覆うバリアーに斬りかかったが

「くそっ！？」

はじき返される。確かに時間は無い。ならば、

「焰、下がってくれ」

針を構え薄刀開眼する。十分に見える。

「これが物を殺すっていうことだ」

針で線を切る。アリーナを覆っていたバリアーが跡形もなく消え去った。

「行くぞ、焰」

「承知……飛来絶刀!!」

と焰はラウラに向けて鉋を投擲する。

「ふん……。感情的で直線的、絵にかいたような愚図たちだな」

鉋が届く寸前で止まる。が時間稼ぎには十分だ。俺はセシリアを、焰は鈴を抱え離脱する。

「う……。焰？」

「無様な姿を……お見せしましたわね……」

「喋るな…シャルル、二人を頼む」

俺は雪片を、焰は棒状手裏剣を構える。

「前衛は任せる」

「ああ」

爆縮地を駆け、ラウラに接近する。

「面白い。実力の差を思い知らせてやる」

激突する刹那、ガキンと金属音が響く。

「やれやれ、これだからガキの相手は疲れる」

「千冬姉!？」

「模擬戦をやるのは構わん。――が、アリーナのバリアーまで破壊する事態になられては教師として黙認しかねる。この戦いの決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」

「教官がそうおっしゃるなら」

とラウラは素直に頷く。

「織斑、真庭、デユノアもそれでいいな……あと真庭、不意打ちはするな」

「!？」

よく見れば、鉋が死翔刀の状態になっている。

「分かりました」

焰は、鉋を引き寄せて答える。

「は、はい」「僕もそれで構いません」

「よろしい。それではトーナメントまで、今後一切の私闘を禁止する」

パンツ！と千冬姉が強く手を叩く。それはまるで銃声のように鋭く響いた。

「……………」

「……………」

場所は保健室。ベットの上では打撲の治療を受けて包帯の巻かれた鈴とセシリアがむっスーとした顔で視線をあらぬ方向へと向けていた。

「別に助けなくてもよかったのに」

「あのまま続けていれば勝っていましたわ」

感謝するかと思えばこれである。

「鈴」

焰が黒い笑みを浮かべ、鈴に近づき

「そんなこと言つのはどのお口かな〜」

と鈴の口をつねる。

「いたゝ痛いつて」

じたばたする鈴。なんか、中学の時もこんな光景あつたけ？

「でもまあ、怪我が大したこと無くて安心したぜ」

「そうですね。こうやって横になっていること自体無意味——つう
うう！」

馬鹿だろ

「馬鹿つて何よ！馬鹿」

「一夏さんこそ大馬鹿ですわ！」

「お前らもな」

そう言つた焰はセシリアの口もつまむ。まあ、いい薬にはなるだろう。

「好きな人に格好悪いところ見られたから、恥ずかしいんだよ」

「ん？」「」

シャルルが飲み物を買って戻ってきた。その後ろには、刻？と箒が。

「ななな何を言ってるのか、全っ然わかんないわね！こここここれだから欧州人って困るのよね！！」

「そそそそうですわね。そ、そう言う邪推はいささか気分を害しますわ！！」

二人ともまくしたてながら顔を真っ赤になってる。……なんなんだ？

「鈍感が」

「同じく」

後ろで刻々と箒が呟く。

「にしても、派手にやられたな。二人ともISの調子は大丈夫なのか？」

「ちょっとまずいかも」

「トーナメントに間に合えばいいのですが」

「難しいな」

カレンダーを見る。もう、トーナメントまで日数がない。その時

ドドドドドドドッ……！！

「な、何だ？何の音だ？」

「足音だな。数は数十人とみた」

相変わらず耳がいいな焔。ドカーン！と保健室のドアが吹き飛ぶ。
マジで？

「織斑君！」

「デユノア君！」

「真庭君！」

「鑢君！」

入ってきた——なんて生易しいものではない。文字通りなだれ込んできたのは数十名の女子生徒だった。しかも俺達を見つけるなり一斉に取り囲み手を伸ばしてきた。普通に怖いわ。

「な、な、なんだなんだ！？」

「落ちつけて」

「しかたあるまい、劣化版断罪……」

焔がハリセンで断罪円を仕掛けようとしたのでひとまずは落ち着いたようだ。

ん、なんだこれ

「なになに、え」と『今月開催される学年別トーナメントでは、より実践的な模擬戦を行うため、ペアでの参加を必須とする。なおペアができなかったものは抽選により選ばれた生徒同士でくむものと

する。優勝したペアには、学食デザート1年間フリーパスを贈呈。
締め切りは――」

「ああ、そこまでいいから！とにかくっ！」

「我と組め、刻？」

女子たちが言うより早く、焰が宣言した。

「えらい、やる気じゃないか」

「無論だ。フリーパスだぞ。近接戦最強のお前と暗殺特化の我が組
めば優勝間違いないだ」

刻？のときの振り仮名間違ってると思うぞ。

「「「ええええ」」」

「あゝゝゝ、悪いな。俺はシャルルと組むからあきらめてくれ」

「「「ええええ」」」

まずい、ミスったか。

「まあ、そういうことなら……」

「他の女子と組まれるよりはいいし……」

「男同士っていうのも絵になるし……」
「ほんっほん」

こうして、嵐のような喧騒が去っていた。

「ふう……」

「あ、あの、一夏——」

「一夏っ！」

「一夏さんっ！」

「焰——！」

安堵のため息をついた俺にシャルルが声をかけようとして箒とセシリアと鈴に阻まれた。

「焰、私と組みなさいよ。私が狙撃手になるから」
アーチャー

むしろ合っているのか。某紅茶を思い出しながら鈴を見る。

「それじゃあ、第4次の2の舞だろ」

「関係ないわ。あたしは金ぴか違うし」

「一夏、私と組め。……幼馴染だろ——！」

「いえ、クラスメイトとしてここはわたくしと！」

「箒、それではお前の願いはかなわないじゃないのか？」

焰の突っ込みに閉口する箒。願いつてなんだ？そう思った時

「だめですよ!!」

振り向けば山田先生が

「おふたりのISの状態をさつき確認しましたけど、ダメージレベルがCを超えています。当分は修復に専念しないと、後々重大な欠陥を生じさせますよ。ISを休ませる意味でも、トーナメント参加は許可できません」

あちゃー、やっぱり駄目だったか。うつむく二人。

「そう言う事だ、鈴。ゆっくり養生しろ」

と鈴の頭をなでる焰。

「子供扱いする……痛っ」

こうした会話を終え、俺達は保健室を後にした。

side刻？

いつものように修行に励む。今回の焰はいつになくやる気だ。恐るべき、焰の糖魂。

さて、新技を試すか

「？刀流・桐!!」

足払い・突き・横薙ぎを速攻で繰り出す技だ。原型は紫苑婆が使っていた名もなき技だ。

「まだまだな」

いかせん錬度は低い。今日はここまでにするか。

「にしても、荒れそうだな」

そうつぶやく。今回の件は、嵐の序章かそれとも……

第九話 嵐の序章（後書き）

真庭道場！！！！

師匠「はい、はじめました真庭道場のコーナー。今回の弟子役は

弟子4号「織斑一夏です」

師匠「質問コーナー始めたんだが、質問がないという状況。笑えばいいのかな、泣けばいいのかな？」

弟子4号「そんな重い話を俺に振らないでください」

師匠「と、まあ話を変えて現段階のIS抜きが登場人物の強さを俺なりにまとめてみたぜ」

真庭白夜↓右近左近〓織斑千冬↓真庭蝶次郎↓（経験の差）↓鑢刻
？↓ラウラ・ボーデヴィツヒ↓真庭焰↓篠ノ之箒〓鳳鈴音↓織斑一
夏〓セシリア・オルコット〓シャルロット・デュノア↓越えられない壁↓IS学園一年女子

弟子4号「偏見混じってません？」

師匠「気にするな、弟子よ。あくまでも俺なりだ。この表じゃ頭の良さは含まれちゃいない」

弟子4号「質問しますけど、白夜さん千冬姉より強いんですか？」

師匠「まーな。俺らの学生時代、唯一千冬に一本取ったのは後にも先にも白夜だけだったな。逆鱗探しを駆使して最後笑わして勝った

「からな、あいつ」

弟子4号「想像できない。どんな学生時代だったんですか？」

師匠「懐かしいな。束と白夜が計画立てて、俺と奏で馬鹿やって千冬と真希が突っ込むって毎日だったな」

弟子4号「そ、そうなんですか。（だから時々、千冬姉の制服に返り血が残ってたんだ）」

師匠「じゃ今回はここまで、次回の真庭道場のコーナーは奏が弟子役だ。感想、質問、要望等お願いします。これにて

弟子4号「終了」

第十話 亡霊よ

side 一夏

「しかし、すごいなこりゃ」

「三年にはスカウト、二年には一年間の成果の確認にそれぞれ人がきているからね。一年には今のところ関係は無いけど、トーナメント上位者には早速チェックがはいると思うよ」

「ふーん、ご苦労なことだ」

「まっただ」

「緊張感零だな、お前ら」

俺は緊張はしてるぜ。焰は試合の前に棒付き飴なめてるし。

「さて、はじめは一夏とシャルルvsボーデヴィツヒと筈か。次に我と刻？。対戦ペアは……」

「おー。ようよう」

「よう、本音」

のほほんさん？

「一回目の対戦、私とかんちゃんだからよろしくねー」

そう言って、ピットに入る。

「ま、頑張れ。むろん優勝は我らだがな」

「相変わらずだな。お前の糖魂。ま、焰達とはうまくいったとして決勝戦だな。首を洗って待ってるよ」

「やってみる。ただし、その時には一夏は八つ裂きになっているだろうがな」

俺達にはやりと笑い、拳をうった。

「さて、行くか。シャルル」

「うん、行こう、一夏」

「よう。まさか初戦で当たるとはな」

「ふん、私と当たる前に負けられては困るからな、好都合だ」

「はは、ご心配どうも。安心しろよ、その天狗の鼻をへし折ってやるから」

中央モニターが戦闘開始までのカウントダウンを開始する。アリーナ全体の視線が二人へ向けられ、ブザーが鳴り響いた。

——戦闘が、始まった。

「叩きのめす！」

白と黒、相反する二色が同時に後ろへ弾けた。それに追従するように、オレンジ色の光と、灰色の光も移動を開始する。

「シャルル！ とりあえず最初の作戦で行くぞ！」

「うん！」

「ふ、小細工など捻り潰す！」

「——安心しろ」

俺に砲弾を放つべく、ラウラは肩の砲身に少しの意識を向けていた。その隙を縫って、爆縮地を使ってラウラの眼前に迫る。雪片を大上段に構え、まっすぐにラウラを見据える。

「——真正面から、小細工なしでぶっ叩いてやるからな！」

「っ！ 上等だ！」

ラウラに向けて放たれた斬撃はすんでのところで回避された。即座にプラズマブレードを展開し、俺へと向き直った。

sideシャルル

『じゃあシャルル、頼むぞ』

『うん、一夏も気をつけて』

プライベートチャンネルもそこに、僕はアサルトライフルを構え

た。相對するは、篠ノ之箒の駆る打鉄。

「ごめんね、一夏じゃなくて」

「なっ……侮るな！」

「侮らないよ。侮れないから、全力で行くんだ」

言葉を終えたと同時にアサルトライフルの引き金を引いた。数回の銃声と、それを上回る銃弾が箒へと襲い掛かる。

「くっ……」

咄嗟に手に持つ刀型のブレードで防ぐも、数発は装甲へ当たり、エネルギーを削っていく。

僕は両手にサブマシンガンを持ち宙空へと飛ぶ。反撃しようとした箒は

「な、に……？」

「篠ノ之さんには言っただけ？これが僕の特技の高速切り替え（ラピッド・スイッチ）だよ！」

言っ、僕は両手の引き金を躊躇いなく引き抜いた。

「っ！ この……」

例えISを装着した箒の身体が銃弾に追いつけたとしても、量産機たる打鉄の限界値は低い。先ほどを遥かに上回る連射で、雨のような弾丸を受け、箒はたたらを踏んだ。

「！ダメージが上がっている……？」

「サブマシンガンの効果的な射程に入ってるからね。ずるいとか、言わないでよねッ！」

徐々に距離を詰め、シャルルは両手のサブマシンガンを箒へと投げつけた。箒はそれをブレードで薙ぎ払い、そして、目の前に現れた僕に驚愕した。

「速い……まさか、イグニッション・ブースト瞬間加速！？」

「そうだよ。とっておきなんだけど、キミの相手はこちらに見向きもしてないからね。一気にケリをつけさせてもらっよう！」

右手からブレードが実体化する。が

「舐めるな！！」

渴と言っただろうか、動きが止まった。何で？箒はブレードを構え言う。

「確かに私は一夏と同様銃器には弱い。だけど、それがどうした。私の剣、存分に見ろ！！」

箒の目が変わった。まるで、王者のように

「旋風！！」

ブレードから放たれた剣閃は容赦なく僕を貫く。しまった、短期決

戦のはずが

「まだだ」

顔を上げると既に箒がいた。とっさにブレードを振るうが剣術は箒が上だ。すぐに追い込まれた。

「偽・雪月花」

それは一夏の剣を箒がアレンジした別の雪月花。容赦なく僕を襲った。まずい。その時、

「悪いな、箒。雪月花」

一夏が箒に雪月花をくらわせた。崩れ落ちる箒。もしも、コンビネーションがもつとうまい人と組んでいたら僕は負けていたかもしれない。

「悪いな。何とか、木枯し決めて隙作っただ。やれるか？」

「十分」

作戦道理とは行かなかったが、これで2対1だ。勝負はこれからだ。

side 焰

「倒されたか」

そう呟いた。

「最後は怒涛だったな」

「何かを掴んだんだろう。まだまだ、力不足だったようだがいずれは化けるな」

「ああ」

激戦は続いていく。

side 一夏

爆縮地でラウラへと直進する。袈裟の形に振り下ろす。突撃の最中に展開した零落^{ひつろ}白夜の刃を以て。

「——ぬるい。あの人の動きを劣化トレースしたような動きで、私に触れられると思うな！」

しかし、ラウラは白式の数度にも動じなかった。触れば問答無用でシールドエネルギーを消滅させる零落^{ひつろ}白夜の刃を前にして、自身の右腕をそれに振り上げた。

「この停止結界の前ではその剣も意味をなさないと理解できなかったのか。学習能力のないやつだな」

嘲笑し、ラウラは目の前の敵に向けて肩の砲身、その銃口を構えた。俺も同じように笑い、ラウラを見ている。それが少女にはたまらなく不愉快だったようだ。

「何がおかしい」

「いや、ルールすら理解してないやつが学習能力云々を言うってのが面白くてな」

「何を……っ!？」

突如、ラウラの背後に衝撃が走り、シールドエネルギーが減少した。集中が途切れたことにより結界から解放された俺の斬撃をかわし、ラウラはひとまず距離を取った。

ラウラの背後にいたのは、シャルル・デュノア。ショットガン 散弾を手に、ラウラを見つめていた。

「悪いけど、僕らはタッグ戦をやってるんだ。敵は一夏だけじゃないから、よろしくね」

自分を小バカにしたような言い方に、ラウラは憎々しげに舌打ちをした。

sideラウラ

「くっ……」

停止結界を使えばそれは自らの最大の隙となる。二人の連携は隙がなく、個人技ではどうにもならない。

(私が……押されている……?)

二人に攻め込まれ、内心で考えて、その事実には激昂した。

「そんなことがあつてたまるものか……ふざ、けるなあッ!」

零落白夜の刃を避け、その勢いのままに白式の背後へと回る。

シャルルのフォローよりも速く、白式の背を蹴り飛ばした。

「一夏！」

「遅い！」

向けられたシャルルのアサルトライフルをワイヤーで弾き飛ばし、砲弾を放つ。

そして左手にプラズマブレードを構え、背後へと全力で振り抜いた。

「なっ！？」

金属音が鳴り響き、雪片が宙を舞った。驚愕の顔に染まる一夏に斬撃を放った。

シールドエネルギーを確実に削り、次の敵を確認するべくすぐさま一夏を殴り飛ばした。

「貴様らごときに、負けるものか！」

「悪いけど、負けてもらっよう！」

正面からシャルルがサブマシンガンを両手に突撃した。弾丸の雨を掻い潜り、右手をシャルルへと向けた。

「は、迂闊だな！」

弾丸は停止し、既に武装を近接用に換装していたシャルルも停止する。

そのまま肩の砲身に意識を向ける。片方を潰してしまえばもう片方はどうとでもなる。そのまま、シャルルへと砲弾を放とうとしたが、

背後からの攻撃を意味するアラートに、その身を固めた。

「な……に……？」

驚愕しつつも、すぐさまシャルルを置いて真横へと飛んだ。手にアサルトライフルを持った一夏は、私に向かって引き金を引いた。

「ぐっ………这种事情だ！ ヤツは近接武器しか保有していないはずだ！」

「僕が訓練の時に使用許可したんだよ。残念だったね」
アンロック

「ッ！？」

「でやああッ！」

風切り音から金属音へ、シャルルが高速切替によっていつの間にか切り替えたブレードが腹部へ直撃した。痛みを感じずとも、その衝撃は身体へ通る。たまらず後方へ下がるが一夏の銃撃が再び襲いかかった。獣の咆哮を思わせる連続した銃声は地面を這うように着弾する。

「ふざけるな！ 私がこんな………こんなことがあつてたまるかぁッ！」

鋭く伸びたワイヤーが一夏の手にあるアサルトライフルを弾き飛ばした。もう片方のワイヤーで一夏の首を絞めて拘束、視線はシャルルへと向けられていた。
いつでも一夏をシャルルへ放れるように、隙を作らず、隙を見逃さず。いつ高速切替をされてもいいように、戦闘体勢を保ったまま、

シャルルを睨み付けた。

「……」

「……」

睨み合う二人。ちらりと一夏は雪片式型の位置を見つめ、そして二人へと視線を戻す。

そして――唐突に、動き出した。

――瞬間的に、”それまでのシャルルからは考えられない程の”加速をして。

「なっ……瞬間加速だど!？」

「やっぱりさっきのを見てなかったみたいだね」

「何故だ！データにはなかったはずだ！」

「当たり前だよ。この試合で初めて使ったからね！」

超音速で接近するシャルルの右手にはブレードが握られたまま。予想外の出来事に硬直で動けないところへまで肉薄した。

「隙あり。だよ」

右手を振り上げ、シャルルがラウラへ攻撃の意思を表す。それを防ごうと左手のブレードで受けようとその手を上に向け、防御の姿勢で構えた。直後、右脇腹に、想像し得ない衝撃が走っていた。

「がッ……」

一夏を拘束していたワイヤーが離れ、アリーナ端へと吹き飛ばされた。右手を振り上げたままのシャルルの左手のシールドの下には、パイルバンカーが仕込まれていた。

「これで……一気に決める！」

体勢を立て直せないわたしに瞬間加速で接近し、動く間すら与えずに追撃を放つシャルル。シールドエネルギーがゼロになるまで、何発も何発も。

——ふと、観客席で誰かが「終わったかな」と呟いた。

自分を照らす唯一の光、織斑千冬。彼女になるには、負けは許されない。

彼女のようにあるには、最強であることが前提条件である。最強である為には、負けることなど許されるわけがない。

——負けたくないのか？

（私は、負けるわけにはいかない！）

力がほしいか？

（ああ、欲しい）

自我を失ってもか？

（それを得られるのなら、私など……空っぽの私など何から何までくれてやる！

——だから、力を。比類なき最強を。唯一無二の最強を——私に寄せ！）

——なら、寝てろ。

それを最後に私は暗転した。

side—夏

バチン！！突然稲妻が走ったかと思えば、シャルルが吹き飛ばされる。ラウラは顔をうつむけたまま、毒刀・鍍を出しそれを抜刀した。刀から閃光があふれる。眩しさに目をそむけたが、収まり見る。そこには鍍を抜刀したラウラが……いや違うあれは、誰だ？

「ラ、ラウラ？」

「ラウラ？誰だ、それは……俺は、四季崎記紀だ！！」

伝説の刀鍛冶かたぎが再びこの世にあらわれた。

第十話 亡霊よ（後書き）

真庭道場！！！！！

師匠「はい、はじめました真庭道場のコーナー。今回の弟子役は

弟子5号「あいあい、忍び名川獺こと真庭奏です」

師匠「さっそく忍び名ばらしたな」

弟子5号「ま、フライングっていうことで——早速、質問答えていきましようや」

師匠「そうだな、真庭家全員の忍び名は次の通りだ」

真庭白夜——真庭白鷺

真庭真希——真庭鴛鴦

真庭鎌太郎——真庭螳螂

真庭蝶次郎——真庭蝶々

真庭密三郎——真庭蜜蜂

真庭亀有——真庭海亀

真庭海——真庭喰鯨

真庭涼——真庭人鳥

師匠「ま、原作通りだな」

弟子5号「目新しいのはうちの母さんと妹ぐらいか」

師匠「続いての質問だ。この物語で、f a t eのクラス分けにする

とどうなるかだ」

弟子5号「偏ると思うのは何故だろう？」

師匠「シャラップ。これも次の通りだ」

セイバー 織斑一夏 織斑千冬 篠ノ之箒 鑢刻？ 真庭亀有（若いころ）

弟子5号「しかしなんで、刻？はセイバー？」

師匠「無刀の剣士だからだ！！」

弟子5号「亀おじさんは意外だな」

師匠「ああ、何でも若い頃（10代）はフェンシングの大会で優勝したり、代表になったとか。結構もてたらしい。静香おばさんとはその縁で会ったとか会わなかったとか……」

弟子5号「今度調べよっか？」

師匠「頼む、続いてはランサーだ」

ランサー 真庭白夜 更識楯無

弟子5号「槍使い少な！？」

師匠「白夜に至ってはいつ使っているか俺でも見たことがない」

弟子5号「だよな。あいつ、いつも槍（銘・偽日本号）持ってるけ

ど使う仕草すら見せないし……調べてみたが、謎だった」

師匠「…新たな謎は置いといて、次はアーチャーだ」

アーチャー 鳳鈴音 セシリア・オルコット シャルル・デュノア

ラウラ・ボーデヴィツヒ 右近左近 真庭密三郎

弟子5号「多いな」

師匠「アーチャーと言う割には全員弓使ってないけどな………続いてはライダー」

ライダー 織斑千冬 真庭真希 更科楯無

弟子5号「何でライダーなんだ？」

師匠「これと言って、乗り物に騎乗するって奴はいないが、f a t eのライダーじゃある一つの共通点がある」

弟子5号「それは」

師匠「姉御肌もしくは姐さんの存在」

弟子5号「確かに、f a t eとe x t r aで証明している」

師匠「だろ。続いては、キャスター」

真庭焰 真庭花梨 更科楯無 四季崎記紀 篠ノ乃束

弟子5号「何で、また？」

師匠「焰と花梨の場合、鬼火と鼠火の火の忍法で。生徒会長は作者の私見だ。確かに、水を操るってことは魔術師に見えるかもな、四季崎に至っては予知能力で、束は、言うまでもないだろ。続いてはバーサーカーだ」

真庭海　恋する乙女達　酒に酔った千冬

弟子5号「海は分からんでもないが……」

師匠「恋する乙女はまあ、語るまい。酒に酔った千冬は……だれにも止めらねえ（遠い目をしながら）」

弟子5号「確かに（遠い目をしながら）」

師匠「気を取り直して最後、アサシン」

アサシン　真庭家一同　右近左近

弟子5号「元忍者の家系だからな」

師匠「だな。じゃ、今回はここまで。感想、質問、誤字脱字、要望等あつたらよろしく願います。感想は作者の栄養源になります。あの作者はガラスのハートだからそこそこ踏まえてよろしく願います。では、これにて

弟子5号「終了」

第十一話 野望の果てに眠れ（前書き）

お待たせしました。やっと完成しました。BGMは『亡霊よ野望の果てに眠れ』で

第十一話 野望の果てに眠れ

side一夏

四季崎紀紀？なんで伝説の刀鍛冶を名乗っている？

「は、どうやら歴史の改竄は改変程度に終わったというわけか、やつてられないな、おい」

歴史の改竄？改変？何のことだ？

「ん、何かと思えば全刀じゃないか。まだ、残ってたのか。にしても、不完了だな、お前。まあいいさ。この体は慣れてはいないが、試し切りする分にゃあ十分使える」

そついった四季崎？は眼帯をとる。現れたのは金色の瞳。

「取っておきだ。避けて見せろよ！！」

鍍から禍々しい何かを纏った剣閃が放たれた。

side焰

四季崎紀記だと！？まさか、鍍の毒は四季崎の思念だというのはか。

「なににせよ、行かねば分らないか」

「ああ、そうだな」

一夏が避けた剣閃は観客席のバリアーに当たり徐々にバリアーを無

効化にしているため観客は避難しているようだ。

「行くぞ」

「ああ」

side一夏

「つぐは」

呻き声を出す。シャルルは剣閃をくらい戦闘不能だ。俺も何とか避けてはいるが、少し当たったところは禍々しい何かが引っ付いて微量のダメージになっている。落ち着け、何も化け物と戦おうってわけじゃないんだ。深呼吸をする。よし、

「ほう。やっと戦う面になったじゃねえか。ん」

「援軍だ」

「無事か、一夏？」

見れば、焰と刻葉だった。正直助かった。

「ああ、何とかな。二人とも気をつける。鍍に纏わりついているあれに振れれば、微量だがダメージくらう」

「鍍の属性か？」

「ああ、そうだぜ。これが鍍の特性『猛毒投与』だ。ま、これは、後付なんだがねえ」

にやりと笑う四季崎。

「お初にお目にかかる四季崎殿でよいのか？」

「堅苦しい挨拶は苦手というより嫌いだね。砕けていこうや」

「なんで、年端もいかない女の子に憑依してんだ、あんた？」

怒りmaxの刻葉が言った。なんだろう？関係ないかもしれないが、うつすら何か見える。

「なんだ、虚刀じゃないか。この女はお前の……一根のやつもそうだったが、なんで虚刀が選ぶ女はおっかない奴なのかねえ？…おつと、関係なかったな。この鍔は俺の毒しねんが格段に強くてな。意志が弱いとすぐに毒しねんが回り易くなるんだよ。ま、この機体のせいでもあるな。他者をまねるとは、面白い仕掛けだが俺に言わせりゃ不完全だな、こりゃ」

「一つ聞きたい。なぜ、完成系変体刀をISにしたのだ？」

「IS？ああ、このインフィニット・ストラトスの略か。一言でいえば気まぐさ。気まぐれで俺の子孫のことを予知してみたら面白いもの作っていたからな。材料もあつたことだし、少々脚色してみたまでさ」

予知？材料がある？

「ま、その虚刀も俺の子孫にあたるわけだが、もう一つの系統のほうさ。おしゃべりもここまでにしようや。特に虚刀、お前がどれくらい完了したかに興味がある」

ゆっくりと鍔を構える四季崎。

「まだ、この体じゃ、過去と少し先の未来しか見えないが俺はお前らに倒されるだろう。だが、未来ってのはほんの少しなことでぶれまくるものだ」

「「「言われなくても!!」「」」

俺達は獲物を構える。

「ほう、いい面だ。なら俺も取っておきを見せてやろう。こいつはよう、この日の本の最後の剣の時代の寵児が使っていた構えだ。この構えから繰り出される三段突きは回避不能って曰くつきだ。避けてみるよ」

「「「上等だ!!!」「」」

亡霊退治の始まりだ。

side 篇

ラウラがかの伝説の刀鍛冶四季崎紀記を名乗り「俺の子孫が……」
と言う所で、私は実家にある家宝の刀を唐突に思い出した。作者銘
紀記、篠ノ之日和に捧げる刻まれてある女性用の実刀を。まさか、
あの人がI Sを作れた理由も……

「……き……うき……篇!!」

とシャルルがいた。

「早く、避難するよ」

確かに、私がこの場にいてもやれることはないだろう。むしろ、一夏達の邪魔になる。それでも、

「すまない、シャルル。私は残る」

端から見れば愚かだろうが、それでも私はこの戦いを見届けたい。

side 焰

「百鬼夜行!!」

鬼火を連続で投げ出しているが、四季崎はカノン砲や剣閃でそれを打ち消す。

「零落白夜!!」

「甘い!!」

鍍による神速の突きが繰り出された。何とか雪片で受けた一夏。その隙を突き、刻葉が

「虚刀流・梅!!」

だが、A I Cによって動きが鈍くなる。

「刻葉!!」

我は、棒状手裏剣を投擲する。それに気づいた四季崎は手裏剣を避ける。A I Cの影響がなくなり、身軽になる刻葉。

「どうした、虚刀？お前の實力はこんなものか！？」

挑発する四季崎。

「言われなくても見せてやるさ、ただしその時にはあんたは八つ裂きになっているだろうがな！！」

森羅のレジストの能力の一つAICレジストを発動させた。

それに合わせ、我と一夏は援護に入る。我は鬼火で、一夏は剣閃で四季崎めがけてはなっていくがすべて捌かれる。

「こんなものか。真庭忍軍に全刀！！」

「ずいぶんと余裕だな」

刻葉が接近する。

「虚刀流・桐！！」

新技・桐を決めた。がそれでも四季崎は倒れず、まだ余裕綽々の顔だ。

「上々だな、虚刀に全刀、真庭忍軍。だが、まだまだ、初代達の足元にも及ばねえ」

挑発しまくる。

「全刀でなんなんだよ？」

一夏が叫んだ。そういえば、四季崎はさっきから一夏のことを全刀と呼んでいる。

「なんだ知らないのか。完了系変体刀・全刀・錆。完了系変体刀は鑢と錆を合わせて五丁六本作ったんだが、どれもこれも完了にはほど遠いものだったが、最終的に残ったのが鑢と錆だ」

全刀・錆。虚刀は無刀の剣法、ならば全刀は？

「最終的に全刀はいつかがたが来るとは思ってた、鑢を完了形変体刀にしたんだがどうやら正解だったようだ」

薄く笑う四季崎。その笑みは冷笑。

「虚刀は一根が深く根を張ったから、虚刀は今もなお健在だ。それに比べてお「ふざけるな!!」……ん？」

一夏に冷笑を向けていた四季崎が振り向いた先には、箒がいた。

「何が全刀だ!!一夏は一夏だ。亡霊が馬鹿にするな!!」

いい啖呵だ。少々ビビッていたようだな、我らは。

「ほう、言っな。お前さんは王刀の所有者か。……日和？」

日和？誰だ。

「いや、違っな。あいつはあんたより髪は短かった……っつ」

今度はなんだ？身構える。

「……………こんな力……………がほしかった……………わけじゃな……………んだ……………
た…助けて……………」

ちい。なかなか、しぶといな。作り物にしてはなかなかの根性だな。さて、少しばかり喋りすぎたな。続きと行こうか…！」

四季崎が再び宣戦布告をする。

「……………委細承知。四季崎紀記、あんたを倒す」

殺気を含んだ宣戦布告を刻葉が言う。

「同じく、さつきから全刀だが錆だかしらねーけど、馬鹿にさっればなしじゃ気分悪いしな」

一夏が雪片を構え宣言した。

「亡霊は黄泉の府へ帰っていただこうか」

それを皮切りに再び戦いが始まった。

side 刻葉

再び四季崎に接近する。が四季崎も鍍のほかにかノン砲やらワイヤーブレードを駆使してくる。杜若で翻弄し接近する。狙うは鍍のみ。

「こい、虚刀…！」

四季崎は鍍を構え、挑発する。あの構えは3段突きか。

「連撃木枯らし!!」

一夏が雪片で剣閃を放つ。その数、7。

「は、甘いな」

「ぬしもな」

その隙を突き焔が

「刺し穿つ死翔の絶刀」
ゲイ・ボルグ

鉦を全力で投擲した。おそらく、鉄甲作用＋巻菱指弾応用だろう。技名はご愛嬌というやつか。

「ちい」

カノン砲は木枯らしの連撃を防がなければならない。鍍かAICで鉦を防がなければならない状況で四季崎が選んだのは

ぴた

鉦が止まった。そのまま落ちる鉦。再びこつちを向く四季崎。が

「なに!!」

再び鉦が襲い掛かる。焔のIS黒鳳の能力「死翔刀」だ。不意を突かれた四季崎は鍍で応戦する。

「虚刀流奥義・飛花落葉!!」

全力全開だ。四季崎を見れば、己の作品に満足した職人の顔になっていた。

「ちえりおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおお!!」

四季崎から鍍が離れる。その瞬間に倒れるラウラ。外傷はなさそうだな。

「大丈夫か？」

呼びかける。

「……………ああ」

とりあえず無事のようにだ。

「なんで、そんなに強いんだ？」

唐突に聞いてきた。

「まだ、俺は強くないよ。まだに剣士だしな。あいつだって、3人がかりだ」

だけどもあ

「強くなりーてから強い、こんなんじゃない駄目か？」

「……………よくわからないな」

だよな。

「確かなのは、あんたを助けたかったからだ」

「……何故？」

「……惚れたからだ」

「誰が誰に？」

「俺があんたに惚れたからだ」

言ったそばから心臓が早鐘を打つ。それを聞いたラウラは顔を赤くして気を失った。俺らを見ている焰と一夏はにやにやしているがこの際気にしな……！！

「何か来るぞ！！」

「よく分かったな。虚刀」

唐突に空間に裂け目が入り、そこから現れたのは蟻をかたどった被り物をかぶった左手が刀の男と

「へえ〜。あのあんたがもう一人の虚刀ねえ。あの女とはずいぶん違うわね」

蜘蛛をかたどった被り物をかぶり左足が刀の女が現れた。

「真庭忍軍毒組！！」

焰が叫んだ。

「久しいな、鳳凰よ」

左手が刀の男が言った。

「どくまにが何の用だ？」

……あれ空気が凍った？

「待て、刻葉。どくまにて何だ？」

と一夏が聞く。

「真庭忍軍毒組。略してどくまに」

「そんなかわいらしい略し方やめろ！！」

焰が突っ込む。

「別にいいぞ」

あれ？

「我らをそう呼んでいる女がいるのでな。別に気にしてはおらんよ」

なぜか哀愁漂う雰囲気で答える左手が刀のどくまに。

「ま、我らの目的はこれよ」

そういつて毒刀の鞘を拾い鍍に向け何かしらの処置を施した。

「では、我らは引こう」

追撃したいが俺たちは満身創痕だ。が

「その侵入者たち止まりなさい」

見れば訓練機を纏ったIS学園教師陣だ。

「やれやれ、毒蜘蛛」

「はいな」

毒蜘蛛と呼ばれた女が前に出る。そして、ISを装備した。そのISは手足が合計8本そのうち一本は刀だった。教師陣に向かっていく。

「忍法・鎖縛陣」

手足から白い粘着質の糸が繰り出される。教師陣のISはひとつ残らず絡み付かれた。

「爆ぜろ」

そういつた瞬間、糸が爆発し煙幕が立ち込めた。

晴れた瞬間にはそこにどくまにはいなかった。

s i d e ラウラ

「俺があんたに惚れたからだ」

それを聞いた私は、そう言われて——ときめいて、しまったのだ。そして早鐘を打つ心臓が言っている。こいつの前では私は、ただの15歳の「女」なのだ——

「う、あ……」

ぼやつとした光が天井から降りているのを感じて、私は目覚めた。

「気が付いたか」

見れば織村教官がそばにいた。

「私……は……？」

「全身に無理な負荷とダメージがかかったことで筋肉疲労と打撲がある。しばらくは戦闘は不可能だ」

「……何が起きたのですか？」

あまり思い出したくはない。意識を失った私はそのまま深い闇……いや、狂気というのだろうか、何もかもが狂った感覚になった。

「……お前は鍔を抜刀し、乱心した。四季崎紀記と名乗り、織斑達に襲いかかったが結果は返り討ちだ」

四季崎紀記？ふと、左手を見れば指にはめってあったあの禍々しい

指輪はなかった。

「教官、鍍はどこに？」

「……一応重要要件であり機密事項なのだが、お前が気を失った直後に真庭忍軍毒組と名乗る二人組が鍍を奪い逃走中だ」

真庭忍軍毒組？

「目下調査中だ。ついでに言えばお前のISにVTシステムが搭載されていた」

ヴァルキリー・トレース・システム。過去のモンド・グロツソの部門受賞者の動きをトレースするシステムで使用禁止のシステムだ

「恐らくではあるが、お前の乱心はこのシステムも絡んでいるかもしれない。ドイツ軍に問い合わせている。近く、委員会からの強制捜査が入るだろう」

結局私は

「ラウラ・ボーデヴィッヒ！」

「は、はいっ!？」

「お前は誰だ？」

その問いに私は

「わ、私は……。私……は……」

「誰でもないのなら、ちょうどいい。お前はこれからラウラ・ボーデヴィツヒとなるがいい。なに、時間は山のようにあるぞ。少なくともお前には側にいる人間もいることだしな」

にやり、と教官が笑った。

「鑓のやつは私はここ数か月しか交流はないが、愚弟達の親友だいちかとほむらからな、悪い奴じゃあるまい」

そういつて私の頭をなでる教官。そういい終わって席を立てベツトから離れる。もう言うべきことは言ったのだろつ。教師の仕事に戻るようだ。

「ああ、それから」

ドアに手をかけたところで、振り返らずに再度言葉を投げかけた。

「お前は私にはなれないぞ。お前はお前だ」

そしてドアを開けた瞬間、見知った長身がそこにいた。

「なんだいたのか」

「つて、織斑先生!!」

「見舞いなら手短にな」

「あ、ありがとうございます」

変わって入っていく鑢刻葉。席にかけて

「あゝ、体のほうは大丈夫なのか？」

「ああ、しばらくは戦闘はできないが、日常生活に支障はないそう
だ」

「そうか、よかった」

気まずくなる空気。

「俺が言ったことは覚えているか？」

俺があんたに惚れたからだ。

思い出して赤面してしまう。

「おおお、覚えているって言うのならいいんだ。改めて言いたいこ
とがあるんだ」

頬を掻きながら、その無刀の剣士は

「俺はあんたに惚れていいか？」

真摯な目で見つめてきた。思わず、左目が金から青になりそうなほ
ど緊張してしまう。

「返事はすぐじゃなくてもいいから言ってくれ」

そういつて顔を赤面にした無刀の剣士は出て行った。

「ふ……ふふ……はははっ」

なんだ世界は意外にも明るいじゃないか。返事などもう決まっている。差し合つてするべき事はどうやって告白しようか。考えただけでも、楽しくなってきた。私は今日という日を死ぬまで忘れないだろう。そう思えるくらい晴れやかな気持ちになった。

第十一話 野望の果てに眠れ（後書き）

真庭道場！！！！！！！

師匠「おーす、ちーす、めーす、長いこと待たせてすみません。真庭道場の始まりだ！！」

弟子6号「少しは落ち着かんかい。というよりなんでわしが弟子役？」

師匠「ローテンションだぜ、亀おじさん。自己紹介よろしく」

弟子6号「はあゝゝゝ。まあいいわい。真庭家家長真庭亀有だ。若いころは――」

師匠「さっそく、質問コーナーだ」

真庭家の当主は誰？原作みたく12人いるの？

弟子6号「一応当主はわしだ。真庭家は12頭領制はなくなったが、鳥、魚、獣、虫と一応分かれている。本家は鳥だったが、先代当主だったわしの親父と次期当主候補だった兄（白夜、真希、焰の父）がとある事件で死んでしまったのでな、一応当主代理という形になっているが白夜と真希は継ぐ気ないし、焰はまだ未成年なので未だに当主代理のままじゃ」

師匠「とある事件については本作で明らかにしていく予定なので期待してくれ」

弟子6号「あれは15年前の――」

師匠「ネタバレ禁止拳!!」

ドカーン

師匠「今回これまで、感想、誤字脱字、要望等よろしくお願いします。
す。ではこれにて

弟子6号「終了…パタ」

あと一話入れて二巻の内容を終わらせる予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2123v/>

I S 語

2011年11月21日18時52分発行